

---

# ポイズンガール

藍沢 砂糖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポイズンガール

### 【Nコード】

N2028Y

### 【作者名】

藍沢 砂糖

### 【あらすじ】

「お父さんは私が責任を持って、殺してあげるからね」  
理科準備室を掃除していた夏川奈々瀬は薬品棚の奥から古いプリント用紙を見つけた。それはお互いの食べ物に仕掛けをしあうサイババルゲームの進行表だった。興味本位で友人達とゲームを始めた奈々瀬だったが、ゲームは異常な程に加速してゆく。

正義の味方、笹中悟はちよつとしたきっかけで人を殺してしまった。正義の味方から殺人犯に転落した悟は自らの正義を守るために力いっぱい逃げ出した。たとえ誰に悪者だと罵られても、自分は正

義の味方でい続けなければならない。悟の逃亡生活が始まる。  
そして奈々瀬と悟の運命は交差する。

## 非日常の扉

選択を間違えれば、分かってるよね。

遮光カーテンを閉め切った薄暗い理科準備室に、揺るぎのないはつきりとした声が響かずに充満した。密閉された狭い部屋の空気は凝っていて息苦しい。

放課後の校舎は昼間の賑わいが嘘だったかのように静かだった。まだ部活や補習で残っている生徒が沢山いる筈だが、この密室には一切の音が入ってこない。まるでこの校舎には、いやこの世界にはここにいる五人以外消えてしまったのではないかという程の静まりようだった。

ここは別世界だ。

蒸し暑さと息苦しさに加えて薬品特有の鼻を衝く臭いまであり、偏頭痛を引き起こすにはこれ以上ない条件の環境だった。

実験用の水道付きの大きな机に置かれた二つのピーカーには黒い液体がなみなみと注がれている。その前の丸椅子に着いた夏川<sup>なつかわ</sup>奈々瀬は、ぶつぶつと細かい泡が浮き上がってくるそのどす黒い液体を無表情に見ていた。

声は再び聞こえる。

「見たって分からないよ。どっちも同じ色」

薄い口唇をおもむろに舌で湿らせた奈々瀬は声のする方に刃物のような鋭い視線を向ける。机の向かい側には、薄笑いを浮かべながら長い髪を指先で弄ぶ篠原<sup>ひのはら</sup>紗季<sup>さき</sup>が頬杖をついて奈々瀬を舐めるように見ている。

紗季は更に続ける。

「選択を間違えれば…」

死ぬよ。

そう結んで愉快そうに目を細める紗季。

立合人である他の三人も心配そうに、あるいは何かに期待しながら

ら奈々瀬と紗季を交互に眺めている。何も答えずに大きく息を吐いた奈々瀬は、制服のブラウスのボタンを一つ外して襟元を摘まんで扇ぐ。

暑い。奈々瀬の耳の裏側から垂れた汗の滴が首筋をつつと伝い、露わになった彼女の白い胸元を濡らす。

そして奈々瀬が初めて声を発した。

「ズルはしてないんだよね。誓える？」

当たり前じゃないの、と吐息混じりに答えた紗季は机の上に両肘をついて手を組み合わせた。祈りを捧げているように組んだ両手の奥から二つの瞳が奈々瀬を真っ直ぐに捕らえている。奈々瀬からは彼女の口元は見えないが恐らく、笑っているのだろう。

どちらかと言えば紗季の事は嫌いではない。

しかし彼女がこのように時折見せる薄笑いとは実験動物を観察するかのような無機質な視線だけはどうしても好きにはなれなかった。

紗季は口元を隠したまま言う。

「ビーカーに入っているのは正真正銘どこにでも売ってる普通のコーラ。ただし、片方はハズレだけだね。それは奈々瀬も解ってるでしょ」

語尾を釣り上げて首を傾げる紗季。

「選択権は奈々瀬にあるんだから、どちらでも好きな方を飲みなよ。私はいくらでも待ってあげても良いんだけどね、他の皆が退屈しちゃうじゃない」

組んでいた手を解いて口元を露わにする紗季。やはり彼女は、笑っていた。紗季は胸まである長い髪を人差し指に絡ませて遊んでいる。

奈々瀬も同じように小さく笑った。

「そうだよ。紗季は勝負事でズルするような馬鹿じゃないもんね。確率は二分の一で条件は私も紗季も同じ。片方は普通のコーラでも片方は…」

「毒入りだよ」

紗季は奈々瀬の言葉に被せてぎよろりと目を見開いた。

彼女は胸ポケットから茶色い小瓶をゆっくりと取り出して奈々瀬に見せつけるように軽く振る。赤く濁った液体が瓶の中でちゃぷちやぷと踊った。

奈々瀬は全く動じず無表情のままだったが、周りで見ている立会人の誰かがごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。

奈々瀬と紗季は互いに視線を外す事なく見詰め合っている。

毒を用意してきたのは紗季だが、どちらかのピーカーに毒を混ぜたのは立会人の一人、ピーカーをシャツフルしたのは別の立会人、その二つのピーカーを机の上に置いたのもまた別の立会人。

つまり、この場にいる五人ともどちらが毒入りかは判らない。

「どうしたの、奈々瀬。もしかして…ビビっちゃった？」

なんなら私が代わりに飲んであげても良いんだよ、と紗季は挑発してくる。彼女はいつもこうして精神的に揺さぶりを掛ける。この余裕の表情から発せられるプレッシャーに押し潰されて判断を誤った者が今まで何人いた事か。

一見動じていないような奈々瀬も内心では追い詰められている。

紗季の冷たい瞳は「早く飲め、早く毒を飲んでのた打ち回れ」と急かしてくる。それでも奈々瀬はその瞳から視線を外さない。

目を逸らしたらプレッシャーに負けたという事だ。精神的な負い目を感じてしまう、そうなってしまえば紗季の思うつぼだ。

奈々瀬の顎先から汗が一滴落ちる。

それは机の上に零れ、ひたりと小さな音を立てた。

「あら、暑いかな？」

紗季は彼女の汗が落ちるのを目敏く見ていた。この一言は、一拳手一投足を漏れなく見られているというプレッシャーになる。このまま心理戦で紗季に勝利する事はなかなか容易ではない。

すると紗季は目を再び細めた。

「それにしても奈々瀬ったら凄い汗だね」

「何なのよ、さっきからいちいちうるさいわね」

しまったと思いがらも、もう遅い。紗季の挑発に乗ってしまったのだ。下手に相手をするとな女のペースに巻き込まれ兼ねないのは十分承知の筈だったが、つい言い返してしまった。

案の定、更に紗季が畳み掛けてくる。

「ブラウスもぐっしり濡れてるじゃない。ホント女子高で良かったね。そんな汗だくの姿、男の子に見られたくないでしょ」

今度は無視した。

しかし奈々瀬が一度相手をしてしまった事に付け込むように、紗季は蛇のように湿気を孕んだいやらしい目で奈々瀬を見ている。

実際、奈々瀬は暑さと緊張感の所為でかなりの汗をかいていて、汗でブラウスがじつとりと背中に貼りついて下着の線が浮き上がっている程だ。確かに思春期の男子には見せられない。薄暗い部屋で、奈々瀬の細く締まった<sup>からだ</sup>躰のラインが露わになっている様はどこか官能的だ。

「ところで、どうするの。恐いんだったらホントに私が代わりに飲んであげても良いんだよ」

「冗談言わないで。私が飲むに決まってるじゃん。紗季こそ落ち着きなくぺらぺら口数が多いけどホントは私がアタリを引くのが、負けちゃうのが恐いんじゃないの？」

ほんの僅か、紗季の表情が変わった。

「へえ、そんな事言うんだったらさっさと飲んだら良いじゃないの」  
さあ、と催促してくる紗季。

意を決した奈々瀬は、勢いよく立ち上がって右側にあつたビールを手に取った。三人の立会人の視線が奈々瀬の右手に集中する。数秒遅れて紗季もゆっくりとビールカーに目を向けた。

「ホントにそっちで良いの？」

「今更変えないよ」

「そっちが毒入りかもしれないよ？」

「だから、これで良いんだってば！」

まだしつこく揺さぶってくる紗季に対して苛立ちを覚えた奈々瀬

は、彼女に向かって怒鳴りつけた。しかし暖簾に腕押しと言ったような様子で紗季は相変わらぬ薄笑いを浮かべている。

奈々瀬は手に取ったビールを見詰める。

「奈々瀬、ルール分かってるよね。一度これで良いつて宣言したらもう変更はきかないんだよ」

分かってるよ、と返す奈々瀬。

そしてもう一つのルール。飲むときは一気に飲み干さなくてはならない。奈々瀬は頭の中でそのルールを思い浮かべて、大きく深呼吸をした。

そして。

奈々瀬はビールカーの中身を一気に喉に流し込む。

その様子を紗季と三人の立会人は食い入るように見ていた。期待と不安の入り混じった表情の立会人達に対して、ただ一人紗季だけは感情の読めない冷ややかな目で奈々瀬の喉の動きを観察していた。飲み干した奈々瀬が机に、割れてしまいそうな勢いでビールカーを置く。息を切らしている奈々瀬の姿を四人はじっと見ていた。

そして。

奈々瀬は机に突っ伏すように倒れ込んだ。彼女は真つ赤な顔をして言葉になっていない苦しげな呻き声を上げる。

奈々瀬！ と立会人達は悲鳴にも似た声を上げた。

紗季は今まで通り上品に笑っている。

「ほら、言ったでしょ。そっちが毒入りかもしれないよって。ホントに人の忠告はちゃんと聞くもんなんだよ」

獣のように唸って喉を掻き毟る奈々瀬を見下ろして悦に浸る紗季は、まさに悪魔のように邪悪な高笑いを上げた。机に這いつくばる奈々瀬は充血した目で絶<sup>すが</sup>えるように紗季を見ている。そしてがたがたと震える手を勝者の彼女に伸ばした。

「負け負け負け、奈々瀬の負けよ」

目に涙を溜めて見上げる奈々瀬を切り捨てた紗季は本当に愉快そうに、映画に出てくるような悪い魔女に似た甲高い笑い声を上げて



いる。

立会人達は目の前で起こる凄惨な様子を信じられないといった様子でいる。その中で最初に落ち着きを取り戻した一人が別のビールに水を汲んで奈々瀬に差し出す。しかし奈々瀬にはそれすら目に入っていないようだ。

悶え苦しむ奈々瀬をしばらく見て満足したのであるう紗季は、安全なもう一つのビールを手を取った。

「思いつきり笑ったから喉が渴いたわ。これは勝利の祝杯として頂いてあげる。のた打ち回る奈々瀬を見ながら飲む勝利の美酒って所かな」

勝利とは敗者を踏み躪にじるところに美德があると考えている紗季。

本当に性格が悪い。紗季は悶える奈々瀬を見下ろしてビールに口を付け、手首を傾けた。

そして優雅に喉に流し込む。

「ばーか」

奈々瀬の声だった。

「引つかかったな。何が勝利の祝杯だよ、私が飲んだのは普通のコーラだったよ」

何事もなかったかのように立ち上がった奈々瀬はブラウスの袖で口元を拭った。周りの皆は目を丸くしている。中でも一番驚いて目を白黒させているのは勿論、勝利を確信していた紗季本人だった。

次の瞬間、ガラスが割れる音が凝った空気を切り裂く。

紗季がビールを落とした。それと同時に紗季はその場に崩れ落ちて、汚れた床の上でのた打ち回る。目を真っ赤に充血させてぼろと涙を零す紗季から、つい一分前までの傲慢な姿はもうつかげない。

痙攣の始まった紗季を、奈々瀬は悠々と見下ろして、ぽつりと零した。

「残念、私の勝ちみたいだね」

奈々瀬は艶つぼく濡れた舌を出して笑った。

夜の湿った空気はアスファルトの匂いをまとっている。

高速道路の高架とそびえる古い工場に切り取られた濃紺の狭い夜空に、不細工で形の悪い下弦の月がふわりと浮かんでいた。

生ぬるい気温とは裏腹にこゝろなつかし笛中悟は少し冷たい汗をかいていた。

…もしかすると、

…あの事を。

街灯も疎らで、足元も良く見えない暗い場所に立っているのは悟と、もう一人は鮫島と名乗る胡散臭い男。悟はこの男の事を知らない。

和柄のアロハシャツに胸元には金のネックレス。猫背で不健康そうな鮫島はどう見ても性質たぢの悪いチンピラだった。この男とは初対面だが、自分にとってプラスになるような人物ではないという事は判断できる。

「いったい何の用なんです、話ならこんな所じゃなくてファミレスとかでも良いんじゃないですか」

悟は静まり返った夜の世界に耐え切れずに第一声を発した。しかし鮫島はその問いには答えず、にやりと笑って並びの悪い歯を見せた。

「まあそう焦るなよ。一応確認しとくけど、アンタ笛中さんで間違いないんだな？」

悟は一瞬戸惑って曖昧に頷く。

「そうだよな。笛中悟、二十七歳だっけ。間違いないよな。ホント会いたかったぜ、笛中さんよ」

鮫島は先の曲がった煙草に火を点けた。

フルネームも年齢も正しい。どうやら人違いではないようだ。

「だから何の用なんです」

悟は少し語気を強める。

「そんなに焦るなって。ゆっくり説明してやるから」  
いやらしく笑う鮫島は口と鼻から一緒に煙を吐いた。

今まで真面目に生きてきた悟はこの手の人種が一番苦手で、学生の頃も所謂不良と呼ばれる者を極端に避けていた。恐かった訳ではないが、関わりと自分まで馬鹿になると思っていたからだ。

会話を交わすだけで吐き気がする。

こんな人物が自分の名前を知っている事に嫌悪感を覚えた悟は眉間にしわを寄せて鮫島から視線を外した。にやにやと頭の悪そうな緩んだ顔をしている鮫島を見ているとだんだん腹が立ってきた。

学生時代に空手を経験している悟は、たとえいきなり襲われてもその状況を打開する力も十分あるし、鮫島より背も高い。この男が自分に何らかの因縁をつけて絡んできたのだとしても、腕力では勝る自信がある。だから鮫島に嫌悪感と不信感があっても、恐れは雀の涙ほどもない。

それでもこの手の男は何をしでかすか分からない。

人差し指と親指で煙草を摘まんでいる鮫島は煙を吐きながら爬虫類のような目で悟を舐めるように見ていた。

なかなか話を切り出そうとしない鮫島に対して悟は苛立ち始める。  
「用がないならもう帰りますよ」

吐き捨てるように言った悟は踵を返す。すると「ちょっと待てて」と、鮫島のしゃがれた声が背中越しに聞こえた。

「何です」

苛立ち混じりに言った悟は振り返って迷惑そうに鮫島を睨みつける。鮫島の相変わらずの不愉快な笑みが悟の神経を逆撫でした。

そして鮫島は勿体ぶったように溜めてから口を開いた。

「先月だったかなあ」

悟の背筋が凍った。

「もしかすると、」

「あの事が。」

明らかに顔色が変わった悟を見て、鮫島は更にいやらしく顔を歪

ませる。まるで獲物に巻きついた蛇のようだ。

「先月…？」

「そうだよ。確か夜の十時頃かな。郊外の国道。ほら、海沿いの工場が並んでる所らへんだよ。アンタその辺り車運転してただろ？」

そう言った鮫島の視線は真っ直ぐに悟の目を捕らえていた。疑問形ではあるがその目が確信を得ている。

「ああ、仕事の帰りに毎日その道を通っていますが。それが何か？」  
平静を装ってみたものの、声は震えている。

鮫島はそれを見逃さない。

「アンタ…そこでイケナイ事しなかったか？」

…イケナイ事。

おもむろに首を傾けて悟の顔を覗きこんでくる。煙草臭い。自分の言葉にどんな反応があったか、どれだけ弱ったか、観察されているようにこの上なく居心地が悪い。顔を顰めた悟は思わず身を引いた。

「何の事ですか…」

「トボケンな！」

鮫島のどすの利いた怒声が人気のない夜の高架下に響く。悟は大きな体をぴくりと引き攣らせた。今までの表情とは一転して鮫島は鋭く悟を睨んでいる。

悟が怯んだのを確認すると、鮫島は直ぐににやけ面に戻った。

「笹中さんよお。アンタその夜、そこで人を撥ねただろ…」

その言葉は悟の胸を貫いた。

喉がからからに乾き、視界が霞んでくる。人を撥ねた。その言葉が悟の頭の中で跳ね回って何度も反響する。

「何かの間違いじゃないでしょ…」

「そんなワケねえよ。アンタは誰にも見られてないと思ってたか知らねえけど、俺はこの目でしっかり見たんだからよ」

口籠った悟。その額に冷や汗が滲む。

…視られていたのか。

「暗かったって言っても、あれだけ派手に吹っ飛ばしたんだから気付いてないワケじゃないだろ。間違いないよ」やっちまった」って分かっているはずだ。それでもアンタは、ほったらかしでそのまま走り去った。つまり…」

轢き逃げってやつだろ。

鮫島は悟の反応を楽しむかのように溜めてから言った。

「僕はそんなの知らない、僕が轢いたって証拠なんてあるんですか！」

「証拠？ 今アンタがここにいる事が証拠なんだよ」

「どういう事ですか、と必死に取り繕って返す悟。煙草を一口吸って、悟から滲み出る動揺を確かめるようにしてから鮫島は言う。

「轢いたヤツの車のナンバープレート控えさせて貰ったんだよ。ナンバーからちよっと調べたら名前と住所と連絡先は分かる。それで今日呼び出したらアンタが来たってワケなんだよ」

この男を蛇と形容したのは間違いではなかった。

アンタは立派な犯罪者なんだよ、と言って蔑んだ目を悟に向ける。轢き逃げ、犯罪者。テレビや新聞でしか見聞きした事のないような言葉を自分に突きつけられた悟は真っ青になっていた。冷たい汗が背中に湧く。

「本当に気付かなかったんだ。暗かったし、あの時は急いでいたから人を撥ねたなんて分からなかったんです。もしそれが本当なら、今から…出頭してきますよ」

悟はそう言っただけで俯いた。

「ウソつけ。往生際が悪い野郎だ」

青ざめた顔で鮫島の顔を見ると、彼は実に愉快そうに笑っている。今の悟とはまるで正反対の表情だ。

「何が気付かなかっただよ。撥ねた後、一回車止めて出てきただろ。それでアンタは轢いた男をきっちり確認してたじゃねえか。それでいてアンタはそのまま車に乗って何事もなかったように逃げたんだ。結局後で救急車は来たんだけどアンタが轢いたオッサン、意識無か

つたぜ。可哀想に、あのオツサン死んじまつたんじゃねえかな」  
うう、と漏らして言葉が出てこない悟。

「出頭するなら勝手にしろよ。ただ、普通の交通事故と違って轢き逃げは罪が重いぞ。もし相手が死んだりしてたら罰金ぐらいじゃ済まねからな、もしかしたらムシヨに入って何年も出て来れないかも知れねえぞお」

にへらにへらと粘着質のある笑みを浮かべて、鮫島は弱り切って頂垂れる悟の表情を下から覗き込む。煙草臭い息が悟の顔にかかる。追い詰められた。

悟はその場に崩れ落ちるように、アスファルトの上に膝をついた。そして頭を抱えて亀のように丸くなった。

「今…。今ホントに大事な時なんだ。だからバレル訳にはいかなかつたんだ」

涙声で語る悟を、鮫島は冷たく見下ろしている。

鮫島のような、社会の底辺にいるようなガラの悪い人間に話しても理解できないだろうが悟は構わず胸中を話し始めた。

「幸せにしたい人がいるんだ。来年の春、僕はその人と結婚する事になってる。でももしあんな大事故を起こしてしまったとなると、会社をクビになるかもしれない。世間体だつて悪くなる。そんな事になったら彼女を幸せにする事なんて出来なくなる。人生めっちゃくちゃだ」

こんな人間に言つても無駄だと分かつていても、思わず身の上を語つてしまった事に自己嫌悪を覚える。ふうん、と案の定どうでも良いような相槌を打つ鮫島。矢張りこんなチンピラには自分の気持ちなど理解できないんだと悟は歯を食い縛る。

すると鮫島は蹲る悟の前に屈み込んだ。

「そこでアンタに相談なんだよ、笹中さん」

鮫島は馴れ馴れしく悟の肩に手を置いた。その手に汚らわしいものを感じた悟は小さく身震いする。

「相談？」

「ああ、警察には言わねえよ。俺だって警察は嫌いだからなあ。それに、どうせならアンタにはそのまま幸せになつて欲しい」

警察が嫌いと言うのは本当だろう。しかし、後に言った言葉は明らかに心が籠つておらず嘘臭い。

「黙つててくれるんですか！」

「勿論さ。ただし条件がある」

悟はふと顔を上げた。そこには本物の蛇のように冷血で人間味のない目をした鮫島の顔があった。

「俺も金に困つていてね。リーマンやつてるアンタは少なくとも俺よりは金もつてんだろ？ ちよつと分けて欲しいんだよ」

「口止め料つて事、か……」

どこまでも腐つた人間だ。

「そういう事だ。三百万ほど用意してくれねえか？」

「さ、三百万！」

驚嘆する悟に対して、鮫島は至つて当然の事のような顔をしている。しかし一般的なサラリーマンである悟にとって現実的な額ではない。

「借金とかすれば無理な話じゃねえだろ」

「でも……」

「良いのか、周りにバレたらアンタの人生めっちゃめっちゃになるんだろ。明後日まで待つてやるから工面してくれや」

額に冷や汗と脂汗が混じつた物が滲む。

「そんな…明後日までに三百万なんて無理だ…。用意出来る訳がない」

「まあ、頑張つてくれよ」

悟の肩をぽんと叩いて鮫島は立ち上がった。そして短くなった煙草を指で弾く。放物線を描いたオレンジ色の火は工場の塀にぶつかつて弾けた。

鮫島は膝をついたままの悟に「連絡待つてるからな」と言い残してから、背中を向けて歩き出した。その言葉も悟の耳には届いてい

ないようだ。

破滅、三百万。

二つの言葉が悟の頭上でめまぐるしく回転している。

「あ、そうそう」

立ち去りかけていた鮫島がふと振り返った。

「カナちゃんだっけ」

その名前を聞いて悟の首筋は冷たくなった。

「確か香那<sup>かな</sup>って言ったよな、アンタの彼女。色白で、真面目そう  
けっこう可愛い娘だよなあ。羨ましいなあ」

顔を上げて目を見開く悟。全ての血液が逆流するような感覚が彼を襲った。

「もし笹中さんが無理だっけ言うんだったら、アンタの彼女に頑張ってもらおうかな。文字通り体張って。胸も大きいし、けっこう良いセンいくと思うぜ」

鮫島は下品な舌なめずりをした。

…香那。

悟の心臓が冷たい血液を全身に送り出して巡らせている。鼓動が高まれば高まるほどに体温が下がってゆく感覚がした。

「香那は関係ない。これは僕だけの問題でしょう!」

「知らねえよ、そんな事。とにかく金になれば良いんだ。お前の女を守りたけりゃ明後日までに三百万用意しとけよ」

鮫島は野卑な笑い声を上げて背を向ける。

歯を食い縛って悟は拳を握りしめた。香那だけは、香那だけは巻き込みたくない。悟にとって彼女は全てだった。

愛している。

彼女の笑顔も、しっとりとした髪も、ふっくらした口唇も、柔らかな肌も、澄んだ声も、甘い香りも。彼女の全てを愛している。この先、死ぬまで一緒に生きてゆきたい。この世で唯一、そう思える女性だった。

純潔で純粋な香那の汚れる様など想像もしたくない。



「アンタが明後日までに金を用意できない事、ちょっと期待してんだぜ」

鮫島は歩きながら言った。

「実はよ…アンタの彼女、思いつきり俺のタイプなんだわ。こう見えて俺ってあんな感じの真面目で従順おとなしそうな娘が結構好きなんだよな。そんな子が調教されて夜の店に売られるなんて、想像しただけで興奮してくるぜ」

どくん、と悟の心臓が大きく打つ。

香那が見ず知らずの男の前で肌を露わにし、その体を触られ、舐められ、貪られる。その光景を想像しただけで視界が黒く霞んだ。

「あの娘の調教するのが楽しみだ。最初は泣くかもしれないけど、大概の女は一か月もあれば慣れちまうんだ。女って俺らが思ってるよりスケベな生き物だぜ。完成したらアンタにも見せてやるよ、淫乱な香那ちゃんをな」

鮫島はいやらしい想像をしながら歩き去ろうとしている。

…香那に手を出すな。

卑しく汚らわしい鮫島に香那の名前を口にされる事でさえ嫌悪を覚えるのに、この男は頭の中で香那を凌辱している。悟は許せなかった。しかし自分が三百万という大金を用意しないと香那は魔の手まのてに落ちてしまう。

そうなると香那は自分の知っている純潔で純粋な香那ではなくなってしまう。

…嫌だ、香那を失いたくない。

香那が香那でなくなってしまう事は、悟にとって全ての幸せと未来を失うのと同じだった。香那の笑顔が頭の中に儚げに浮遊する。

…誰が悪いんだろう。

あの夜、一人の男を撥ねた自分自身だろうか。あんな時間に夜道を歩いていた撥ねられた男だろうか。それとも遅くまで残業をさせる会社だろうか。悟の中で様々な悪の根源が巡る。しかしどれも違った。

悟は目の前で背を向けている男を見た。

…こいつだ。

…こいつさえいなければ。

悟は脇に置いてあったコンクリートブロックを両手で拾い上げて、よろめきながら立ち上がる。それは冷たく重く、いびつな断面が悟の指に食い込んだ。

鮫島は姿勢の悪い蟹股がにまた歩きで真っ暗な夜道を進んで行っている。

その後を悟が音を立てないように近くに近付いてゆく。

こんな男、いない方が社会の為なんだ。

そう何度も自分に言い聞かせる。すると鮫島は煙草に火を点ける為に立ち止まった。その背後に悟が静かに忍び寄るが、鮫島が気付く様子はない。鮫島の背中に手が届く程の距離まで来た時、悟はこくりと唾を飲んだ。

そしてブロックを大きく振りかぶり、鮫島の後頭部めがけて振り下ろした。

軽い感触の後に低い呻き声。鮫島は大きくよろめいてはいたが倒れなかった。どうやら後頭部には命中せず、側頭部を掠めただけだったようだ。不意を突いて一撃で決めるつもりだったが失敗してしまった。

悟の全身から冷や汗が噴き出る。

「てめえ…何のつもりだ！」

頭から血を流す鮫島は僅かに恐怖の混じった声で言った。まさか温厚そうな悟が攻撃してくるとは思っていなかったのだらう。

「香那には、手を出させない…絶対に」

目を合わせた瞬間に鮫島は恐ろしい獣と対峙したかのようにぴくりと引き攣った。悟はブロックを再び握り直して、鮫島の頭部に叩きつける。骨の軋む鈍い音に続いて、泣き声に似た悲鳴を上げる鮫島。

今度も狙いは外れたが、咄嗟に頭を庇った鮫島の腕と指がへし折れ潰れた。

「や、やめろって、彼女には手エ出さねえから。な、な？」

悟は聞く耳を持たない。

媚びるような目をした鮫島に更にブロックを叩きつける。顔面に当たり、とうとう鮫島はその場で仰向けに倒れた。

「痛てえ、痛てえよお」

鼻血を垂らしてアロハシャツを汚す鮫島の上に馬乗りになる悟。

再びブロックを大きく振りかぶった。悟は潰れた手で顔を守ろうとする鮫島を見下ろした。

そして顔面めがけて重いブロックを振り下ろす。

何度も何度も。手で守ろうとしてもお構いなしに、歯が折れようともお構いなしに、許しを請われてもお構いなしに。

この手のチンピラの言う事は信用できない。「もうしない」「何でもするから」と口では言っておきながら、後で必ず仲間を連れて報復に来るに決まっている。だから二度と会う気も起こらないように徹底的に痛めつけるべきだ。

鮫島の鼻は折れて曲がり、歯も何本かなくなっている。鼻腔や口から血が溢れて呼吸を遮っているのか、鮫島は苦しげにごぼごぼという音を鳴らしていた。その赤黒い血は悟のズボンにもかかり、形の不揃いな水玉模様を作っていた。

このまま殺してしまっても良いのではないか。

悟はそうとさえ思った。こんな人間、一人この世からいなくなつたところで悲しむ者などいないだろう。

寧ろいなくなった方が皆喜ぶかもしれない。もしここで本当に自分と香那から手を引いたとしても、また他の誰かに同じような脅迫をするに決まっている。それならここで殺してしまうべきだ。

悟は無情なほど淡々と、単純作業のように鮫島の顔面を潰していた。鮫島は時々血反吐を出すだけで抵抗すらなくなり、顔ももう原型を留めていなかった。

あんた、何やってるの！

ふと背後から甲高い叫びが突き刺さり悟は我に返った。立ち上が

つて振り返ると、一本道の奥に柴犬を連れだした中年女性が悟を見て震えている。

「け、警察呼ぶわよ」

女性は悟の姿を頭の先から足のつま先まで見渡しながら威戒姿勢を取っている。はつとなつた悟は凶器となつた血塗れのブロックをその場に捨てた。

「あの…違つんです…」

悟が弁解しようと女性に歩み寄ろうと足を踏み出したら、その女性には短い悲鳴を上げて後ずさつた。顔にまで返り血を浴びた悟と、その足元には顔面を潰され動かなくなつた鮫島の姿がある。

誰がどう見ても悟が悪者だ。

「僕はこの男に脅されて…」

一方的な悪者という誤解は解いておかなくてはならない。悟が腫れ物に触れるように慎重に女性に近寄ろうとする。

「誰か助けて、殺される！」

夜を切り裂くような悲鳴。更に叫んだ内容もサスペンスドラマのように分かりやすい。悟は思わずその場でたじろいで後ずさつた。

今の悲鳴の所為か、近くの何軒かの住宅の窓に電気が灯つた。

気が動転した中年女性はまだ訳の分からない事をわめき散らしている。このままだと警察が駆けつけて来るのも時間の問題だ。

悟の足元では鮫島が血の混じつた真つ赤な泡をぶくぶくと口から溢れさせている。この状況を見ると、どう考えても自分が加害者だ。警察に捕まると傷害罪に問われるし、更にこの前の轢き逃げの件もばれてしまう。

そうなつてしまえば未来はない。

「仕方なかつたんだ、僕は悪くないんだ」

悟はがたがたと震える足を無理矢理動かして、その場から逃げ去つた。背後から女性の喚き声が響き続ける。

…僕は悪じゃない。

悟は走つた。

未来を、幸せを守る為に。

冷蔵庫を開けた奈々瀬はビーカーにミネラルウォーターを汲んで一気に飲み干した。そして直ぐに同じビーカーにもう一度汲み直す。「ほら、紗季も飲みなよ」

流し台に顔を突っ込むようにして咳込んでいる紗季に水の入ったビーカーを差し出すと、彼女も一気に飲み干して、机の上に乱暴にビーカーを置いた。「実験器具は大事に扱いなさいよ」と奈々瀬がからかっても紗季は無視して水道の蛇口を捻って水勢を増した。

「どう、生き返った？」

「全く…まだ喉が焼けるように痛いよ」と紗季。

彼女は泣き出しそうな顔をして水道で何度もうがいしている。その様子を見て奈々瀬は笑った。

「ハズレのコーラにはタバスコ一本全部入れようって言ったのは紗季でしょ。完全に致死量越えてるじゃん。私達は反対だったでしょ」  
紗季はぐうの音も出ない。

紙町女子高等学校、科学部三年の五人組は理科準備室に集まっていた。

九月になって新学期が始まり、彼女達の部室兼活動場所である理科実験室の掃除と荷物整理をしている途中に、いつのまにかタバスコロシアンルーレットが始まっていたのだった。

気が付けばもう夕方。

片付けもほとんど終わらない内に日が暮れようとしていた。

流し台に立ってビーカーを洗うのを手伝う奥山アルマおくやまは、奈々瀬と紗季を茶色い瞳で見比べて感心したように言う。

「紗季のプレッシャーの掛け方すごいよね。見てる方まで緊張したよ。やっぱ特進クラス同士の心理戦って見応えあるね」

「特進クラスだからってこんな遊びには関係ないでしょ」

念入りに口を濯ゆすぎながら紗季が答えた。喉がひりひり痛むのか何度も咳払いを繰り返している。

そんな彼女を見てアルマは口元に手を添えて上品に笑った。腹を抱えて大笑いという姿は、育ちの良いアルマからは想像もつかない。紗季は口に含んだ水を流しに吐いた。

「ああ、まだ舌が痛い…。このタバスコドリンクって、みんなが思ってるよりずっと強烈なんだからね。嘘だと思っただったら飲んでみなよ、そのお人形さんみたいな顔も不つ細工に歪むよ、きつと」  
心なしか紗季の声はがらと濁っている。

「そんな事言われたら飲むわけないじゃん」

洋画の女優がするような手のひらを上に向けて首を傾げる仕草も、混血であるアルマには良く似合う。

「くっそー。その前にこの借りは絶対に返すからね、奈々瀬！」

いつでもどうぞ、と返して奈々瀬は舌を出した。

「これで紗季とは五勝五敗一分ね。今の所イーブン。もう次の勝負で決着にしようじゃないの」

「五勝五敗一分。そうよ、あの引き分けさえなければ今日で決着だったかもしれないのねえ、くるみちゃん…」

紗季はタオルで口を拭きながらじろりと小宮こみやくるみを睨みつけた。くるみは頭を抱えて小動物じみた素早い動きで机の影に隠れようとする。待ちなさい、と奈々瀬に鋭く呼び止められると、申し訳なさそうに顔を出した。

「いや、その…あれはですね」

弁解しようとするくるみを二人が睨む。もめている原因は夏休み前に行われたワサビ寿司ロシアンルーレットの事である。

「アンタの中途半端な優しさが、この争いを生んだんだよ」

「あ、ああ…申し訳ない」

くるみは申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた。

ワサビ寿司の時の戦いではくるみが「毒」を仕込んだ。しかしワ

サビの量が少な過ぎて、刺激物に免疫のある二人にはどれがハズレか判らず、結局二人で美味しく寿司を堪能しただけという和やかな結果に終わってしまったのだった。

「もう済んだ事だから良いんだけどね」

じゃあもう怒らないでよ、と小声で洩らしたくるみは二リットルのペットボトルに入れて常備しているウーロン茶をごくごくと飲む。気の小さい彼女は、拙い状況に陥ると緊張の所為で酷く喉が渇くらしく、その都度ウーロン茶をがぶ飲みするのだ。どこか愛嬌のある憎めないその姿も科学部の名物になっている。

「ところで次はどんな勝負するの？」

ビーカーを洗い終えて水滴を切るアルマは期待するような目で奈々瀬と紗季を見比べていた。

「そうだなあ。例えば、フグ刺しロシアンルーレットとか？ くるみが適当に捌いたフグ刺しを交互に食べるの」と奈々瀬。

「いやいや、それってマジで死んじゃうじゃん。トテロドトキシんだっけ。神経毒を甘く見ちゃ駄目だよ」

苦い顔をして首を横に振る紗季。

「冗談だつて、流石に死んじゃつたら洒落にならないでしょ」

準備室の片づけを続行しながらも、頭の中は面白いゲームについての事でいっぱい科学部メンバー。次は誰が、どのような物を口にして醜態をさらすのだろうという事ばかり考えていた。

奈々瀬はカーテンと窓を開けて空気を入れ替える。

夏の終わりと秋の始まりを告げる涼しい風が吹き込んできた。入り込んできた新しい空気に、薄いガラス窓がみしりと軋む。

三階の理科準備室の窓からは中庭が見える。昼休みにはベンチに座って学食で買った昼食を食べる生徒達で賑わっている中庭も、今はもう誰もいない。池の水面が真っ赤な夕焼けを寂しげに反射させているだけだった。

ふと、秋の匂いがした。

「うわあ、随分涼しくなってきたね」

準備室の隅で、ホルマリン漬けの解剖されたカエルが入った瓶を愛おしそうに拭く水谷麻衣子は、感情の籠らない声でぼつりと呟いた。

「もう九月だもん。じめじめむしむしの夏ともおさらばよ。今月末には夏服ともおさらばになるのかな」

奈々瀬の言葉にこくりと頷いた麻衣子は、縁なし眼鏡の奥にある眠たげな眼で夕焼け空を眺めている。彼女のショートヘアがふわりと秋風に揺れていた。

三年の彼女達が夏制服を着るのはこの夏が最後。このまま涼しくなると、もう二度と紙町女子の夏制服に袖を通す事はなくなってしまうのだ。そう考えると奈々瀬は少し名残惜しいような気がした。

奈々瀬と紗季の熱戦で、じつとりとむせ返っていた準備室に新鮮な空気が柔らかく入り込んでくる。五人は久しぶりに新鮮な地上の空気を味わうモグラのように、揃って大きく深呼吸をした。

「高校生活最後の夏も終わっちゃったんだね」  
麻衣子が薬瓶の整理をしながら淡泊に呟く。彼女の無感情な声でそう言われると余計に寂しい気がする。

「夏が終わったって事は、ここからは受験勉強漬けの毎日になるのかな」

紗季の言葉に奈々瀬は「げっ」と声を漏らして苦い顔になった。勉強など、夏休みは宿題を形だけ片付けたぐらいで、他には全くと言って良い程やっていなかった。受験勉強という言葉を聞くと胸が苦しくなる。

「アルマは良いよね、推薦で大学決まってるし」  
すると困った顔でアルマは微笑む。ビスクドールのような彼女の白い肌は窓から差し込む夕日に照らされて紅く染まっていた。奈々瀬の言葉には肯定も否定もしないで、アルマは聞き返してきた。

「紗季と奈々瀬はやっぱり国立大なの？」  
まあ私はね、と紗季は答えた。奈々瀬も身を乗り出して慌てたように、そうそう私も国立だよ、と続ける。あまり勉強していないの



で胸を張って言えない。

もう九月。高校生活も残す所あと僅かだ。

他府県の大学の薬学部への推薦が決まっているアルマ。大学へは行かずに爬虫類ペットショップでバイトしようかな、などと言っている麻衣子。一方で特進クラスの奈々瀬と紗季は国立大学への進学を期待されている。そしてマイペース過ぎるくるみはまだ具体的な志望校すら曖昧模様な状態だった。

進路が決まっている者、決まっていない者それぞれだが、半年後には科学部の五人もそれぞれの道に進んでしまう。一年で科学部に入部した時から、楽しい事も辛い事も分かち合っ一緒に馬鹿をやってきた仲間とも、もう直ぐ離ればなれになってしまうのだ。

いつかはその時が来ると分かっていたのだが、いざその時が近づいてくると気持ちが落ちてしまう。

いつまでも高校生のまま、馬鹿なゲームばかりやっていられたらどれだけ楽しい人生なんだろうと、科学部の五人は思っていた。

そう、馬鹿なゲームを。

「暗くなるのも早くなつたなあ。よし、五時半までには片付けちゃおう。それからみんなで駅前のカフェでお茶しようか」

紗季が提案すると、他の四人も「賛成！」と声を揃えた。

カフェという目標が出来て彼女達の作業速度が増す。後でお茶するという事が決まっているにもかかわらず、くるみはペットボトルのウーロン茶をがぶ飲みしている。そんなに水分を取っていると、美味しい紅茶の味が分からなくなろうと思っただが、重い荷物を運んだり体を動かしたので喉が渴いたのだろう。喉を鳴らしてウーロン茶を飲むくみの姿を見ていると、こちらまで喉が渴いてくる。

奈々瀬は薬品棚の整理に取り掛かった。

茶色い瓶にはいずれもラベルが貼られている。塩化ナトリウムやエタノールなど授業でもよく使用するものから、いつ使用するのかも分からないような薬品まで、恐らく百以上の薬品が棚の中に並んでいる。

その中の一つを手に取り、目を細めてラベルを見る。

「ねえ、ヒドロキシプロピオン酸って何？」

「何それ、そんなの三年間で一度も使った事ないよね」とくるみ。使わなそうなら捨てちゃえば、と言った紗季はこちらに目もくれずモツプ掛けをしている。そうだね、と下顎を突き出して同調した奈々瀬は薬品瓶の蓋を開けた。

中には白い粉末が入っていた。

シンプルな瓶、シンプルなラベル。茶色い薬品瓶に入った粉末は不思議な魔力を帯びているように、奈々瀬の知的好奇心を掻きたてる。もしかして危険な薬品なのだろうか。しかし液体ではないし、少しくらい触ってみても大丈夫だろうと、奈々瀬はそろりと瓶の中に指を伸ばした。

「何してるの奈々瀬！」

空気を切り裂くような叫びに奈々瀬はびっくりと引き攣った。

その場の全員が作業の手を止めて奈々瀬に注目する。声を上げたのはアルマだった。彼女は真っ青な顔をして奈々瀬を見ている。そしてその震えた口唇を動かして、震えた声を発した。

「今…ヒドロキシプロピオン酸を触ったの？」

「え、ちよつと触ってみただけど…どうしたの？」

奈々瀬がそう答えるとアルマは両手で口元を覆って大きく目を見開く。

まずかったのだろうか。取り乱すアルマを見て奈々瀬にも不安が伝染する。え、何なの何なの、と奈々瀬は狼狽していた。

するとアルマが一言だけ口にする。

劇薬よ、と。

「ちよつと待ってよ、これってもしかして猛毒なの？」

奈々瀬は慌てて瓶の蓋を閉めて机の上に置いた。その近くにいたくるみも逃げるように瓶から離れた。

「でもちよつと触ったくらいだよ。飲んでもいないし、目にも入ってないから大丈夫だよ、ね？」

奈々瀬が一步進むと、アルマは距離を置くように後ずさった。同じように他の三人も奈々瀬から一步離れる。

…何なのよ。

皆はまるで化け物を見るような目で奈々瀬を見ている。奈々瀬の胸の中で、上手く表現出来ない灰色の不安がふつふつと泡立ち出した。するとアルマが何度か深呼吸して息を整えてから口を開く。

「奈々瀬、落ち着いて聞いてね。　ヒドロキシプロピオン酸は経皮でも危険なの。しかも指先でしょ。爪の間から毒素が侵入して、やがてそれが全身に回って、嘔吐や目まいの症状が表れるの。それから、最悪の場合…」

そこまで言ってアルマは口籠った。

「もしかして、私…死ぬの？」

アルマは目を伏せるように頷く。

死。その言葉が脳裏を過った奈々瀬は、弾かれたように流し台に駆けて蛇口を捻る。勢い良く出る水に、薬品の付いた指を晒して「しごとと血が滲むほど擦った。

死にたくない。まだ死にたくない。

「ねえ、奈々瀬」

不意に名前を呼ばれて振り返ると、麻衣子が例の劇薬の瓶を持っていた。人差し指で眼鏡のブリッジを押し上げた彼女はおもむろに薬品瓶を開けた。彼女が瓶の口をこちらに傾けると中の白い粉末が見える。

すると麻衣子は瓶の中に手を入れた。

「ちよつと麻衣子、何してるの！」

奈々瀬が叫ぶと麻衣子は僅かに口元を綻ばせた。彼女が何を考えているのか全く分からない。麻衣子は更に驚くべき行動をとる。

粉末をつまみ上げ、それを自らの舌の上に乗せた。

「ま、麻衣子…」

奈々瀬は目を丸くして絶句した。驚愕する彼女の目を見たまま、麻衣子は長い舌を口の中に戻してあの白い粉末を味わうように口を

動かしている。

「全く、アルマも意地悪だよ」

麻衣子がアルマの方へ目配せする。すると彼女は柔らかかそうな栗色の髪を揺らして、くすくすと笑っている。

…え、何？

「これは猛毒でも何でもないので。      ヒドロキシプロピオン酸って  
ただの乳酸だよ」

「乳酸…」

そう乳酸、と言って頷く麻衣子。

「知ってるでしょ、筋肉疲労の原因物質って言われてたやつ。食品  
添加物として使われているから口に入っても死なないよ」

「そうだったの！    という事は…」

ちらりとアルマの方を睨むと、彼女はピースサインをこちらに向けていた。どうやら彼女に一本取られたようだ。

「それにしても奈々瀬の焦り方…面白かったなあ」

普段は無表情な麻衣子が愉快そうに声を出して笑う。

滅多に感情を表に出さない彼女の笑いの琴線は人の恥ずかしい姿らしい。あまり褒められた趣味ではない。その横でアルマも口元を押さえて肩を震わせながら笑っていた。

「ちよつと、こっちは本当に死ぬかと思っただからね！」

笑われて悔しくなった奈々瀬がアルマと麻衣子に突っかかって行くこうとする。すると間に入って来た紗季が「はいはい、さっさと掃除終わらせちゃおう」と奈々瀬の背中をぼんぼん叩いて薬品棚へ促す。

机に置いてあった瓶を手にとって憎々しげに睨む。ちくしょう、  
アンタの所為で恥かいたじゃないの。奈々瀬は薬品瓶に心の中で文句を言ってから薬品棚に戻した。

固体、液体別に五十音順に薬品を並べ終わった。こうして並べると改めてまだまだ知らない薬品が多かった事に気付く。特に奈々瀬の視線の高さから外れていて、普段なかなか目にしない一番上の段

に見覚えのない薬品が多い。

…何だ、あれ。

一番上の棚の奥、炭酸カルシウムの薬品瓶の後ろに何かが挟まっている。紙切れだろうか。奈々瀬は背伸びをして棚の奥に手を伸ばす。ほぼ手探り状態で瓶を倒さないように慎重にさつき見た紙を探す。

…あ、あった。

奈々瀬がその紙を引き抜くと埃も一緒に落ちてきた。咳払いをしながら肩に掛かった埃を払っていると、隣の書棚の整理をしていたくるみがやってきた。

「どうしたの、何その汚い紙？」

彼女はペットボトルに口を付けたまま質問する。奈々瀬の手にあるのは折り置まれたノートの切れ端だった。よくあるキャンパスノートなのだが、相当古い物らしく全体的に変色しているし端もぼろぼろに朽ちかけて柔らかくなっていく。

「ああ、何か棚の奥に挟まってたんだけどね。何だろう」

「もしかしてラブレターとかかな？」

何故かほんのり頬を赤らめているくるみ。見ちゃおうよ、と奈々瀬に寄って来る。

「何言ってるのよ。女子高でラブレターなんか落ちてる訳じゃないでしょ」

「いやいや分かんないよ。別の学校の男の子から貰ったのかもしれないし。あ、ウチの学校生徒は女子しかないけど…もしかして生徒と教師の禁断の愛とか？ それか女同士の、もっと禁断の愛かなあ？」

くるみは自分で言うておいて興奮したのか、またウーロン茶をがぶ飲みする。二リットルのペットボトルが空になってしまいそうだ。そんな大量の水分がこの小さな身体の、いったいどこに入っているのだろうか。

「ホント想像力が豊かな事。くるみは恋愛小説でも書いてみたらど

う？ それだけ空想妄想が働くなら面白いのが出来るんじゃないかな」

まさか本当にラブレターな訳がないだろう。

それでも奈々瀬の頭には「もしかしたら」という事が植え付けられていて、ラブレターではないにしろ、ゴシップの類のものを少し期待してしまっていた。

奈々瀬は畳んである紙切れを開く。

…何なの、これ。

その中を見た瞬間、彼女の頭に電流が走った。それはラブレター以上に刺激的な内容だった。

ねえ何なの？ と背伸びしたくろみの手元を覗き込んでくる。すると他の三人も奈々瀬達の様子に気づいたようだ。

「ちよつと、みんな見てよ。何か面白い事書いてあるよ」

奈々瀬は草臥くたひれた紙を机の上に広げた。五人はノートの切れ端を取り囲むようにして、机の周りに集まった。しわしわの黄ばんだ紙を丁寧に手で伸ばす奈々瀬。力加減を間違うと破れてしまうどころか風化してしまいそうだ。

「科学部サバイバルゲーム？」

首を伸ばして目を細める紗季が一行目の文字列を口にした。

「今まで私達がやってた遊びより面白そうじゃない？」

それぞれの顔を奈々瀬が見回すと、四人は真剣に文字を追いながらもこくりこくりと首肯している。

そこに記されてあったのはサバイバルゲームのルール表。雑な箇条書きで表されているだけだが、シンプルでいて面白味があつて彼女達の心を掴むには十分だった。

#### 科学部サバイバルゲーム

？ 日常生活中、参加者同士で毒を仕掛ける（ワサビでもタバスコでも何でも可）。

？ 自ら降参を表明しない限り何度でも復帰できる。

? 一度降参した者への攻撃は禁止する。

? 参加者以外への攻撃は厳禁とする。

? 開始から三ヶ月を経つても参加者が二人以上残っている場合は引き分けとする。

? 万が一のため、参加の際に「自殺」という旨の遺書を直筆で用意する。

「へえ、さっきみたいにわざわざ場を設けずに、常に勝負が続いてるって事か。私達が今までやってたのと全然違うじゃん」

紗季はその紙切れを手に取って興味深そうに頷きながら眺めている。

彼女の言うとおり、このルールならロシアンルーレット方式にしないで済む。期間中ならいつでもどこでも勝負ができる。

裏を返せば家でも学校でも二十四時間気を抜けないという事になる。

「じゃあ、スタートから三ヶ月の間なら、予告なしで食べ物に変な物を入れても良いって事だね。例えば後でこっそり誰かさんのペットボトルに辛子を入れるとか」

丸椅子に座って頬杖をつく麻衣子はくるみを見て薄く笑う。ぴくりと反応したくるみはウーロン茶の蓋を固く閉ざして背中に隠した。それにしても…と、顎に人差し指を置いて難しそうに顔をするアルマは、紗季の持つ紙切れを覗き込んでいる。

「随分古い紙だけど、これって誰が書いたんだろうね」

「さあ。でもタイトルで『科学部』って書いてあるし、きっと昔の科学部の先輩なんだろうね。私と紗季がやってたタバスコロシアンルーレットにしても、去年の先輩がやってたんだし」

先人の知恵、とでも言うべきだろうか。

くじ引きのようなゲームばかりしていた彼女達にとって、この発想は目から鱗だった。とてもではないがこのサバイバルゲーム方式のルールは思いつかなかっただろう。

紙町女子の科学部は昔からこんな遊びばかりしていたのかと思うと、奈々瀬は会った事もない先輩達にどことなく親近感を覚えた。くるみが何か言いたそうな顔で口をぱくぱくさせている。どうしたの、と奈々瀬が尋ねると彼女は「ここ」と言っつて？を指差した。「遺書つて、何で要るんだろっ…ね」

それは全員が引つ掛かっていた事らしく、くるみの言葉に五人とも黙り込んだ。さらには「自殺」という物々しい言葉の存在感が、高校生同士の遊びにしてはあまりに大き過ぎる。奈々瀬は何も答えられない。

まさか、死者まで想定したゲームなのだろうか。

「雰囲気作りでしょ？」

アルマが軽い口調で答えた。彼女は続ける。

「やっぱりこういうゲームって入り込まなくちゃ感じが出ないでしょ。遺書を書くって事はゲームに参加するって意思表示と儀式の意味があるんじゃないかな」

彼女の言うとおりで。部活メンバー同士の遊びが殺し合いに発展するなどあり得る筈がない。それでも遺書を書くという行為自体が不思議なりアリティを生み、よりゲームへのめり込むことが出来るきっかけとなる。

アルマの言葉を借りると、まさしく儀式だ。

「ちょっと、麻衣子…何してるの？」

麻衣子は机の上にノートを出してボールペンで何やら書き始めていた。ふと手を止めて奈々瀬の顔を見上げる。

「何って、遺書書いてるの。みんなもやるでしょ、科学部サバイバルゲーム」

眼鏡の奥の虚ろな瞳は真剣そのものだ。どうやら冗談ではないらしい。

「よし、私も」

「紗季！」

麻衣子に後れを取るまいと紗季までノートを取り出して遺書を書



き始める。それに続いてアルマまで机の上にノートを開いた。三人は黙々と、架空の死の理由を考えて文字にしてゆく。

お父さんお母さんごめんなさい。もう生きてゆけません。全てが嫌になりました。辛いです。悲しいです。苦しいです。さようなら。

三人は思い思いの文面を綴ってゆく。後ろ向きで絶望的な言葉を書いているにもかかわらず、その顔は妙に生き生きしていて気味が悪かった。

… 毒を仕掛けるサバイバルゲーム、か。

… アブナイ遊びだなあ。

奈々瀬は三人の様子を窺いながら迷っていた。仲の良い科学部メンバーの全員が敵になり、どこからともなく自分に毒牙を向けてくる。ゲームが始まれば、今の自分達の関係が崩れてしまつかもしいない。

良くない事だ。そう思いながらも奈々瀬の手が疼く。目の前に極上のスリルがぶら下がっているのだ。

… まあ、ちよつとぐらい。

奈々瀬は鞆から英文法のノートを取り出して一枚千切り、机の上に置く。

「私が一番になるから、よろしく」

「やつぱり乗ってきた。奈々瀬にはさっきの借りを返さなきゃね」と紗季。

あつ、と隣でくるみが声を漏らしたと同時に、先に遺書を書き始めていた三人が奈々瀬の方を見て微笑んだ。

「仲間外れは嫌だよ！」

全員参加するような空気に炙り出されたように、くるみも鞆からノートを取り出して机の上に力強く置いた。

科学部三年の全員がサバイバルゲームに参加する事になった。

… ちよつくら、やってみようかな。アレの練習だと思って。

… そう。これは練習。

かりかりと鉛筆の音だけが響いていた時、紗季が口を開いた。  
「思ったんだけどさ、科学部サバイバルゲームって名前ダサくない？」

確かにヒネリがないよね、とアルマもそれに同調した。くるみと麻衣子は別に気にしていない様子だったが、紗季とアルマは「何か他に良い名前はないのか」という目で奈々瀬に催促してくる。

「奈々瀬、何か思いつかない？」

何で私に振るの、と思いつながらも奈々瀬は腕を組んで考えていた。  
∴ 毒を仕掛け合う科学部の私達、でしょ？

最近の流行語で、インドア派の女性を家ガールと言ったりアウトドア派の女性を山ガールと言ったりするのを思い出した。そして今、英文法のノートの切れ端を使っていた事から一つ思いついた。

奈々瀬は書き慣れた筆記体でノートにペンを走らせる。

P o i s o n   G i r l

## 正義から悪へ

何とか戦隊、何とかレンジャー。

名前などすっかり忘れてしまったが、幼い頃の悟は戦隊物ヒーローが大好きだった。確か金曜日の夕方に放送されていたような気がする。

幼稚園から帰ってきて手洗いうがいを済ませるなり大急ぎでテレビを点けた。幼い悟は番組が始まる十分以上も前からテレビの前で正座して待っていた。その姿を見た母親は呆れたように笑っていたが悟自身は真剣そのものだ。ブラウン管の中のヒーローの活躍を応援する事が悟の一週間の中で最も大切な時間だった。

街に現れた悪の怪人と五人のヒーローが戦い、最後には巨大化した怪人を合体ロボに乗ったヒーロー達が力を合わせて打ち倒す。毎週そのパターンの繰り返しだった。

強きを挫き、弱きを助ける。そして正義は必ず勝つ。

ありきたりな展開だが、そのヒーロー達は幼い悟に正義のなんたるかを教えてくれた。悟にとってまさに正義の教典だった。

おかげで彼は意味もよく分からないのに「正義」という言葉が好きになり、「正義」に憧れるようになった。正義とは良い事、そして強くて正しい事。それが幼い彼なりの正義の認識だった。

世界を征服しようとしている怪人は見紛う事なき完全な悪。それと戦う五人のヒーローは疑う余地のない純潔で完璧な正義。完全なる勧善懲悪の構図がブラウン管の中にはあった。

そして幼い悟は思った。

世界の全ては正義と悪で出来ているのだろう、と。

警察が正義の味方で、警察に捕まる人が悪者。世界中で起こっている戦争も正義の国と悪の国が戦っていると思っていた。悟の中には白と黒しか存在しなかった。

そして幼い悟は思った。

僕は正義の味方になりたい、と。

迫りくる悪を倒し、困っている弱い人達を守りたい。その為に少しでも強くなりたいと願って、ヒーロー達の活躍を毎週食い入るように観ていた。正義のヒーローはいつも孤独だった。正義の味方はたった五人しかない、しかし悪の怪人は大勢の戦闘員を連れて来る。リーダー格の怪人を倒しても、次の週にはまた別の怪人が現れる。倒しても倒してもきりが無い。悪の怪人が現れ続ける限りヒーローは戦い続けなければならない。

そして幼い悟は思った。

この世界には悪が多過ぎる、と。

いくら正義のヒーローが強くても、たった五人しかないのでは世界中の悪を懲らしめる事は出来ない。悪者の数だけ、いやその何倍もの人が悪者に苦しめられている。そう思うと悟は自分が何もできない事を歯痒く思った。

そして幼い悟は思った。

心の底から悪が憎い、と。

悟は運転席に座るなりクーラーをつけた。

真夏日のピークは越えたらしく、日が沈んでからは少し涼しくなってくる。しかし日中は車内でもエアコンをつけていなければ汗が噴き出るほどの暑さだ。夏の名残はまだまだある。

助手席に鞆とサマージャケットを投げ置いてネクタイを緩める。

煙草をくわえてアクセルを踏み、陽炎の揺らめくアスファルトの上を走り出した。

…今日はあと二件回ったら終わりだな。

赤信号で手帳を確認して今日回る営業先を確認する。予定通り順調にいくと今日は七時には家に帰れそうだ。煙草の火を消して窓を開けて換気をする、外から熱気が入り込んできて悟の背中に汗が滲む。

しばらくして窓を閉めると煙草の匂いはある程度消えたが、染み

ついた薬品の鼻を衝く臭いは消えなかった。

悟は、企業相手の医薬品の営業をしている。オフィスの薬箱の中身の補充のルート営業だ。彼は毎日同じ時間に起き、同じ道を運転して、同じ営業先を回って、同じように頭を下げるという判で押しつけたような生活を送っていた。

そんな生活が退屈だと思つ人もいるかもしれないが、野心もなく刺激を求める事もない悟には全く苦でなかった。

煙草も二十歳になってから吸い始めたし、酒も付き合いでしか飲まない。ギャンブルなど、もつての外だった。真面目が服を着て歩いているような彼の事を退屈で面白味のない人間だと評価する人間も少なくない。しかし大きな喜びはないが、深い悲しみもない穏やかな毎日が悟は好きだった。

こうして人生がのんびり過ぎていけば良いのに。

悟はそう思っていた。

やがて海が見えてきた。太陽の光を反射させてきらきらと光る波の眩しさに悟は目を細める。カモメかウミネコか知らないが、灯台のすぐ傍の水面の上で群れを成している。その下に魚が沢山いるのだろうか。

臨海都市部のオフィス街を車で走るのは気持ちが良い。ふと外の空気が吸いたくなって窓を開けると海鳥の鳴き声と一緒に潮風が吹き込んでくる。そう言えば今年も海水浴に行かなかったな、などと考えながら彼は胸一杯に潮風を吸い込んだ。

気分が良くなってスピードが上がっていたらしい。スピードメーターを見て法定速度を少し超えていた事に気が付くと、悟は静かにアクセルを緩めた。

海に面したビル、七階のオフィスに注文されていた薬を持っていく。その窓からも眩しい海が見えた。こんな所で働けたら良いな、とは思わなかった。良い眺めだとは感じるが現状に満足している悟に欲はなく、いつも通りフロントで解熱剤と頭痛薬を三箱ずつ置いて領収書を切つてビルを後にする。

手の届く幸せがあればそれで良かった。

大型ドラッグストアで缶コーヒーを買って喉を潤す。医薬品の販売営業をしながらドラッグストアに立ち寄るのは何か変な気分だったが、いつもの事なので気にならなくなっていた。国道沿いにある上に駐車場が広くて車を止めやすいのでちょうど良い。

エアコンの効いた車内で冷たい微糖のコーヒーを飲みながらのんびりと休憩していた。煙草は一日五本までと決めているので、後は仕事が終わるまで吸わない。いつも通り、ここの駐車場でダッシュボードに置いていた携帯電話を確認する。

このメールを見てるって事は休憩中かな？ 残りのお仕事頑張つて！

恋人の香那からのメールだった。

いつもこのタイミングでメールチェックをすると香那からのメールが入っている。彼女も悟の生活リズムを把握しているらしく、今の状況をぴたりと言い当ててくる。それが嬉しく思えた。営業マンの顔になっていた悟も、つい表情を緩めてしまう。それもいつも通りの事だった。

いつも通り仕事を続けられていて、いつも通り香那からメールが届く。

いつも通り…。

それが悟の幸せだった。

昨夜、その幸せは血塗れちまみの危機に晒された。しかしその翌日も悟と香那のいつも通りは穏やかな小川の流れのように変わらずに続いている。

悟は幸せを守れたのだった。

陽は随分傾いていた。

昼の時間もだんだん短くなっているらしい。

最後の営業先に着いたのは夕方六時を回っていた。大きなオフィス街にある小さなビルの小さな事務所。何台かの事務机に何台かの

パソコンが並んでいる。商社を営んでいるらしいが、どんな仕事をしているのかまで悟は知らない。

受付で声を掛けると、いつも通り人の良さそうな中年男性が出てくる。縁なし眼鏡を掛け、草臥れたワイシャツを着ている白髪混じりの男性は、典型的な「おじさん」と呼ばれる人種だ。確か山崎さんという名前だった。

「ああ、笹中さん。いつもありがとうね」

「いえいえ。こちらこそいつもありがとうございます」

悟は愛想の良い笑顔を見せて頭を下げる。

「ええと、今日は湿布が三ケースと胃薬が一箱でしたね」

悟が持参した薬箱を開くと、つんと鼻を衝く臭いが漂う。薬品の匂いにもすっかり慣れてしまった。

注文の薬を山崎さんが持って来た薬箱に詰めてゆき、ついでに他の薬の使用期限も確認する。齢を取った社員が多い所為か、悟が回っている他のオフィスよりも薬の消費量が多いような気がした。

薬を詰め終わると今度は山崎さんが深々と礼をした。

仕事ですからお気になさらず、とは言えなかった。色々なオフィスを回っていれば色々な人がいる。山崎さんのような人もいるが、中には悟のような営業マンをぞんざいに扱う人もいる。悟は、気さくで礼儀正しい山崎さんがどことなく好きだった。

「ところで笹中さんは車で通勤してるのかい？」

話好きの山崎さんはいつも何かと話しかけてくる。若い人と話す機会が少ないので、悟の事を珍しく思い興味を持っているのかもしれない。

「はい。営業は社用車で回っていますけど、いつも会社までは自分の車で通勤していますよ」

悟も領収書を切りながら答える。

「事故には気を付けなよ。先月すぐその工場の近くでも事故あったの知らない？」

「先月ですか」

領収書を受け取った山崎さんは小さく頷いた。

「そうそう、交通事故があったんだよ。しかも轢き逃げらしくてね、轢いた方はまだ見つかってないらしいよ。逃げたっていつかは警察に捕まるのに：全く悪い奴もいるもんだねえ」

：先月の交通事故、轢き逃げ。

悟は冷静を取り繕いながら薬箱を整理している。今自分がどんな表情をしているのかと心配になった。

「まあ、笹中さんは真面目な人だから轢き逃げなんてしないだろうけど、くれぐれも安全運転でね」

そう言っつて山崎さんは目じりにしわを寄せて笑った。

「ええ、気を付けます。ありがとうございます」

悟は愛想の良い顔で頭を下げた。

少し胸が痛んだ。

全ての営業を終えて営業所に戻る頃には暗くなっていた。

デスクに座って今日販売した薬の書類をまとめてから「お疲れ様でした」と残っている社員に一声掛けてから営業所を後にした。

社員同士の関わりは極めて希薄だ。

しかし人付き合いがそれ程得意ではない悟にとってそれぐらいがちょうど良かった。決して彼の務めている会社が人間関係の悪い職場という訳ではない。ただ悟が必要以上の関わりを避けているだけだった。

職場で悟が嫌われている訳でもない。営業成績も良く、何でも器用にこなす彼の評価は社内でも低くはない。愛想も良く上司からも気に入られているし、同僚や後輩からも頼りにされている。

ただ、付き合いは悪い。仕事が終わってから同僚や上司に飲みに行こうと誘われても何かと理由をつけて断ってきた。いつも通りが崩れる予定を入れるのが堪らなく厭だったからだ。

イレギュラーな誘いはすべて断ってきたが、前もって予定されている社内の飲み会には参加している。それでも飲みすぎる事なく、



かと言って飲まない訳でもなく、無難に制御して飲んでいた。

今日はちよつと…。この後予定が…。言葉を上手く濁しながら飲みの誘いを断っている内に、誰も悟を誘わなくなっていた。

それで良かった。

いつも通りを守れるのなら、それで良かった。

目立たず、嫌われず、好かれず。誰も目に留めないアスファルトの隙間に生える植物のような穏やかで静かな生活が好きだった。

誰よりも幸せになりたい。

そんな事は一度たりとも思った事がない。

仕事をして、いつか結婚して、子供を育てて、齢をとつて。そして安らかにベッドの上で人生の幕を下ろす。

そんな普通の人生が彼の幸せだった。

会社が契約している月極の駐車場に停めてある自家用車に乗った悟はネクタイを外して助手席に置いた。

エンジンをかけた時、デジタル時計には七時と表示されていた。

いつもより少し遅い時間で、悟は少し不愉快な気分になる。胸ポケットから携帯電話を取り出して「ちよつと遅くなっただけど今仕事が終わったよ」と香那にメールを送ってからアクセルを踏んでゆつくりと車を走らせ始める。

ラジオをつけるとニュースが流れていた。どうやら総理大臣が交代するらしく、新しい首相の名前が告げられている。

「おいおい、また代わるのか」

独り言でラジオに話しかける悟。

そうは言っても政治にはあまり関心がない。どうせ名前を憶えても、どうせまたすぐに交代するのだらうとつんざりしていた。半年ごとに総理大臣が代わったりする変化の激しい政界に、悟はどうもついてゆけない。

変わらないのが一番良い。心の中でそう呟いた。

窓を開けると昼間とは違って変わって涼しい風が入り込んできた。もう夏が終わるのだと実感できる。淡い紺色の空を見上げると、こ

の前と少し形の変わった月が雲の間から顔を出していた。

暗くなってきた所為で、行き交う通行人の姿も随分見えにくくなってきた。部活帰りの高校生の自転車が高車道にはみ出して走っていて危ない。

くれぐれも安全運転でね。

山崎さんの言葉を思い出して、悟はスピードを落とした。

その時、ふと耳障りなエンジンをふかす音が後方から聞こえた。そして一台の原付が凄いスピードで悟を追い越して行った。

悟の眉間にしわが寄る。

後続車を挑発するように蛇行する原付に二人乗りをした少年達。

彼らはヘルメットも被らず品のない茶色い頭を見せていた。さらに後ろに乗っている少年が火の点いたままの煙草を道路に投げ捨てる存在悪。

そんな言葉が悟の頭に浮かんだ。

別に悟は警察官でも裁判官でもなんでもない。それでも悪という存在が嫌いだ。知性もない、モラルもない醜い悪。見ていると嫌悪感を覚える。

「ゴミめ。さっさと死ねよ」

思わずそんな事を呟いた。

総理大臣が交代するよりも、法律が改正されるよりも、そんな人間が同じ社会にのうのうと生きている事の方が悟にとって大問題だった。

クラクションを鳴らされる少年達は、下品で間の抜けたエンジン音と共に次々と車を追い越して行く。

悟は彼らの後姿を睨みつけていた。

街のいたる所、どこにでも不良はいる。それも必ず群れで行動している。彼らがコンビ二の前でたむろしている姿をただで苛々する。

害虫駆除だ。

ふと、そんな言葉を思い出した。

大学の空手部時代、悟と同じような考えを持っている仲間がいた。ある日、部員五名で「町の掃除」という名目の下、不良狩りを行う事になった。不良が嫌いな悟は興味本位で不良狩りに着いて行く事にした。悟達は皆、体も大きく胸板も厚い。中には有段者も混じっている。

今から悪の巣窟に乗り込んで悪者を一扫する。自分達は悪の怪人と戦う正義の戦隊ヒーローだ。不意に子供の頃の淡い記憶が蘇った悟は少し胸が躍った。悟は何度も手を閉じたり開いたりして拳の感覚を確かめた。

深夜のコンビニへ行くと案の定、駐車場で不良が三人たむろしていた。

この人種はまるで灯りに集まる蛾のように夜のコンビニで群がる習性があるらしい。しかし蛾と違って食べかすや吸殻を散らかす分さらに始末が悪い。その姿を見た瞬間から、悟の胸の中は濁った泥水で溢れ返るようになっていた。

ここで害虫共に正義の鉄槌を下すのかと思った。

しかし、そんな綺麗なものではなかった。

空手部仲間の一人が雑貨屋で売っているようなニット製の覆面を被った。覆面と言っても何とかレンジャーや何とかライダーのようなヒーローの物とは程遠い。どちらかと言うと泥棒やテロリストのような悪者が被っている物だ。すると他の仲間も彼に続いて顔を隠す。悟にも覆面を手渡された。

これから社会の為になる良い事をするのになぜ顔を隠す必要があるのだろうか。そう思っていると、仲間の一人が座り込んでいる不良達に向かって駆け出して、その中の一人の顔面に思い切り跳び蹴りを入れた。

アスファルトの上に倒れ込んだ不良は鼻と口から血を噴き出して立っている。前歯も何本か無くなっていた。他の二人が何かを喚いて立ち上がろうとしたとき、こちらの仲間がその二人に不意打ちを仕掛け

る。残った不良の一人は腹を蹴られ、もう一人は髪を掴まれて顔を殴られていた。

「害虫駆除だ」

誰かがそう言った。

そこからはまさしく袋叩きだった。

逃げようとバイクに向かって這う不良の頭を踏みつけて、顔面をアスファルトに押し付ける。一人が羽交い絞めにしてもう一人がサンドバッグを叩くように腹を殴る。頭を抱えて丸くなった不良をサッカーボールのように蹴る。

冷たいアスファルトに転がる不良達の事を、誰ももう人間とは思っていない。不良達は日頃の鬱憤を晴らす為のおもちゃになっていた。

悟はその様子を見詰めてただ立ち尽くしていた。

憎々しく思っていた不良も、よく見ればまだ高校生ぐらいの年の頃で、自分達よりも年下だ。そんな彼らが泣きながら「勘弁して下さい」と許しを乞うている。それでも悟の仲間達は聞く耳を持たず少年達を殴り、蹴り、暴行を続けている。

以前、悟の知人の誰かが「不良は健康保険証を持っていないようなもの」と言っていたのを思い出した。普段は反社会的に傲慢に振る舞っているが、いざと言うとき何の保護もなく誰も守ってはくれない。

その通りだと思う。

彼らを助けられる者はいない。当たり前の事だろう。彼らは悪だ。正義の味方に倒されるべき悪者を助ける神様などいない。

悪い不良に制裁を下している自分達は正義だ。世間に迷惑をかけるのが悪で、それを誅するのが正義だ。その筈だ。

正義の対義語は悪。幼い頃からずっとそう思っ生きてきた。

しかし目の前の光景を見ると自分の考えが正しいのか少し疑ってしまった。辺りには飛び散った血や折れた歯が転がっている。

悟の仲間は無抵抗の少年達を殴って蹴って引き摺り回す。覆面に隠

されたその顔は、きつと笑っているのだろう。

これは正義の鉄槌などではない。ただの暴力だ。悟の目の前に正義の味方は一人もいなかった。

悪だ。

どつちも、悪だ。

もう悟は何が正義で、何が悪か分からなくなった。真の悪を見極める目を手に入れるしかない。そう考えた。

それ以来、悟が「町の掃除」に参加する事はなかった。

仲間達が空手部の打ち上げなどの酒の席で、不良狩りの事を自慢げに後輩に語っている場面も時々目にした。粗野な身振り手振りを交えてその時の状況をわざわざ再現する同輩にも眉をしかめたが、その話に目を輝かせている後輩にも嫌悪を覚えた。

悪だ。

正義の味方に憧れて、強くなる為に幼い頃から武道を続けている。しかし正義を求めて門を叩いた空手部の中にも微細な悪が混じっていた。悟が求めているものは絶対的で完全な正義。汚れのない純白。幼い頃に見た、ブラウン管の向こうで戦っていたヒーロー達のような真の正義。

偽物などいらぬ。

いつのまにか完全な夜になっていた。

都市部から離れるほど車の数も疎らになり、気が付けば悟の前には一台の車も走っていないかった。赤信号で止まっても後続車は来ない。

静かな夜だった。

この後、家に帰って風呂に入って夕食をとる。それから香那と電話で喋ってから煙草を一本だけ吸ってベッドで眠る。それが悟のいつもの通りだ。

眠りに就く前に香那の声を聴くのは本当に気持ちが落ち着く。電話越しでも透明で癖のない澄んだ声。彼女の声には悪の色が全くな

い。街に出ると下品で私の強い女性も少なくないが香那は全く違う。毎晩何気ない事を香那と話してから眠り、毎朝同じ時間に起きて仕事へ行く。そして同じ時間に帰ってきて電話越しに香那の声を聴いてから眠る。

この単調で穏やかなサイクルが死ぬまで続くのだと悟は思っている。

悟のマンションまでおよそあと十五分。

胸ポケットから煙草を取り出して火を点ける。箱の中にはあと一本だけ残っていた。一日五本、まるで医者から処方された薬のように決まった時間にだけ吸うので、いつも悟の煙草はちょうど四日でなくなる。今日がその四日目だった。

窓を開けて換気をする、冷たい夜の空気が入って来る。秋の匂いがした。

ラジオからは爽やかなクラシック音楽をバックミュージックにした天気予報が流れている。明日の降水確率は〇パーセントで一日中晴れが続くらしい。明日もいつも通り晴れらしい。

天気予報が終わり、アナウンサーの声が神秘的なトーンに変わった。この声の調子からすると、小学生の福祉活動の様子や動物園のパンダの話題などではないだろう。

何があったのだろうか、悟は耳をそばだてた。

昨夜、市の高架下で男性が仰向けに倒れているのが発見されました。

同日午後十時頃、付近に住む女性から「若い男同士が喧嘩をしている」との通報があり、警察が駆けつけたところ、同市在住の鮫島翔平さん（二十九）が頭から血を流して倒れていました。

警察によりますと、鮫島さんは近くにあった鈍器で何度も頭を殴られていたという事です。

鮫島さんは病院に搬送された後、間もなく死亡が確認されました。通報した女性は「もう一人の男が走って逃げていった」と証言し

ており、警察は殺人事件として逃げた男の行方を追っています。

悟の息が止まった。

… 鮫島。

ラジオから流れるその名前を聞いて悟は愕然とした。それはまさしく昨日悟と会った男、そして悟が正義の鉄槌を下した男の名前だった。

あの後、鮫島は死んだという。

… 僕が、殺したんだ。

悟の手がみるみる震えだし、今夜は随分涼しいというのに額から大量の汗が流れ始める。全て冷や汗だ。悟は車を路肩に停めて、ハンドルを握りしめたまま項垂れた。肌の表面が凍るように冷たいのに内側は焼けるように熱くなっている。

警察は殺人事件として逃げた男の行方を追っています。

逃げた男の行方を追っています。

追っています。

アナウンサーの言葉が悟の頭の中で何度も跳ね回る。

警察は正義の味方で、悪者を捕まえるのが仕事だ。そんな事は小さな子供でも知っている。だから警察が追うのは悪者だ。悪者は警察から逃げる。

… それなら、

… 僕は、悪なのか。

悟のいつも通りは、少しずつ崩れ始める。

煙草の灰がぼとりと落ちた。

夏川奈々瀬が麻衣子の家を訪れたのは六時前だった。

「遅いよー。言ってた時間より三十分も遅れてるじゃない」

先に着いていた小宮くるみは口唇を突き出して文句を言う。そし

て座卓の上にはお決まりのペットボトルが置いてあった。

「ごめんごめん。仕方ないでしょ、特進クラスは毎日七限まで授業があつて、場合によつちやその後に補習まであるんだから」

「あんまり遅いもんだからウーロン茶全部飲んじゃうところだったんだよ」

お茶は関係ないでしょ、と胸の中で呟いて苦笑する奈々瀬。彼女も鞆を置いてカーペットの上に腰を下ろした。

昨日始まったサバイバルゲーム、ポイズンガールはまだ大きな動きを見せていない。ただ科学部の五人は昨日と比べてどこかよそよそしくなつたような気がする。相手がどう出るか、お互い探り合つているような緊張感があつた。

「あれ、麻衣子は？」

「麻衣子なら台所。奈々瀬がさつき『もうすぐ着く』ってメールくれたときに、紅茶用意してくるつて言つてたよ」

随分気が利くのね、と言つて奈々瀬は胸元のボタンを一つ開けて手で扇ぐ。九月になつて少し涼しくなつたものの、ここまで走つて来たので汗ばんでしまつていた。

「飲む？」

くるみがいつものウーロン茶を差し出ししてくる。もう直ぐ紅茶が入るんだから我慢するよ、と言つて奈々瀬が断ると、彼女は差し出した手を引つ込めて自分でがぶ飲みした。くるみの喉の音がリズム良く聞こえる。

「それよりこの部屋で一人にされる身にもなつてよ。麻衣子は『可愛い可愛い』つて言つてるけど、流石にちよつとキツイつて」

くるみは膝を抱えて小さく丸まり、辺りをきよるきよると見回す。「確かに。麻衣子の趣味はちよつと強烈だからね」

奈々瀬の背後で物音がする。

部屋の中の気配に集中すると、物音がするのは背後だけではない。この部屋のいたる所から物音がする。

麻衣子の部屋には大きささまざまな水槽が所狭しと並んでいる。



彼女はその中の生き物達と共同生活を送っている。水槽と言っても飼っているのは金魚や熱帯魚ではない。金魚が入っている水槽もあると言えばあるのだが、決して金魚をメインとして育てているのではない。あくまでも金魚は他の住民の餌として生かされているだけだ。

カエル、カメ、トカゲ。

果ては一メートル近くあるへびまで。

多種多様な爬虫類が水槽の中で蠢うごめいている。毒々しい極彩色をしたカエルやとぐろを巻いたへびを目の前にすると小心者のくるみが怯えるのは勿論、それなりに胆きもの座つた奈々瀬でさえ尻込みしてしまう。

一般的に忌避される事が多い動物だがこれが麻衣子の趣味で、彼女はホルマリン漬けのカエルの瓶に頬擦りするほど爬虫類を愛好しているのだ。

「流星は爬虫類レイイこと水谷麻衣子。強烈だわ」

蠢く黒い影たちに囲まれた奈々瀬は苦笑せざるを得ない。

しばらくしてドアが開く音が聞こえる。麻衣子が部屋に戻ってきた。

「いらつしゃい奈々瀬、遅かったじゃない。あまりに遅いもんだから、くるみがずっと文句言ってたんだよ」

いつも通りの抑揚のない声でそう言った。

まだ制服を着たままの彼女はポットと三つのカップを乗せた盆を両手で持っていた。麻衣子はテーブルに盆を置くと、機械のように全く無駄のない動きでカップを奈々瀬達の前に置いて紅茶を淹れる。仄かに甘いジャスミンの香りがした。

「それにしてもさ、麻衣子も女の子なんだからもっと可愛い物とか置かないの？」

最初に口を開いたのはくるみだ。彼女は小さな爬虫類動物園を見渡して苦い顔をしている。

「可愛い物って？」と麻衣子が返す。

「たとえばクマのぬいぐるみとかさあ、色々あるじゃん」

「ぬいぐるみじゃなくてもカエルとか可愛いじゃない。ぶくぶく顎の下膨らましてる姿とか癒されるよ」

麻衣子は奈々瀬の隣にある水槽に視線を向ける。

六十センチ規格の水槽の中から、紫色の身体に黒い斑点のあるカエルが虚ろな目をして奈々瀬を見ていた。対して奈々瀬も顔を顰めて極彩色のカエルを凝視する。

「何、このカラフルなカエル？」

「ああ、その子？ コバルトヤドクガエルって種類なの」

ヤドクガエル！ と驚いたくるみは座ったまま後ろに飛び退いた。彼女の反応を見た麻衣子は満足げに表情を緩める。一方の奈々瀬は興味深そうに水槽に顔を近付けていた。カエルと奈々瀬の顔は、ガラス越しにくつつきそうになっている。

「何かテレビで聞いた事あるよ、その種類。確か毒があるって……」

「そう。皮膚から分泌される体液にアルカロイド系の神経毒を持つ有毒生物。少量でも血管に入れば大人も死んじゃうの。南米産のカエルで、鏝やじりにその体液を塗って狩猟に使われてたからヤドクって名前が付いたんだよ」

麻衣子は何やら難しい事を言っているが、要するに危険な生物だという事らしい。ヤドクガエルがそうであるように、キノコにしても昆虫にしても、自然界で派手な色をしているものに毒があるという事は定説のようだ。

「そつだ毒で思い出したけど……。麻衣子はそつ口にして奈々瀬達に向き直った。」

「もう始めてる？」

「始めてるって、何の話？」

奈々瀬は首を傾げる。

「ポイズンガールだよ。今日で二日目だけど早速もう誰かに毒を仕込んだりしたのかなって思ってたね」

「そつ言つて麻衣子は僅かに目を細めた。すると奈々瀬はうーん、

と唸って座椅子の背もたれに体を預ける。

「とりあえず様子見だね。他のメンバーがどう出るか見てから動くと思う。だからまだ派手な行動はしてないよ」

奈々瀬は人差し指でこめかみをとんと敲いた。すると隣でくるみも、うんうん頷いてポニーテールを揺らしている。穏健派というか小心者の彼女は、奈々瀬のように攻撃の様子を窺っている訳ではなさそうだ。

「麻衣子はもう動き出してるの？」

秘密、と言った麻衣子は湯気の立つカップに薄い口唇を付ける。カップに隠された口元は笑っているようにも見えなくない。眼鏡の奥の瞳からは内面を読み取る事が出来ず、麻衣子という存在がいやに遠く感じた。

もうポイズンガールは始まっている。

今までのロシアンルーレット形式とは違って、日常のありとあらゆる物にハズレが仕掛けられている可能性がある。つまり二十四時間気が抜けない。自分が口にしようとする物、触れようとする物すべてに仕掛けがあるような気がしてきて、ゲーム開始二日目にして早くも気疲れしてきた。

それにしても上手く出来たルールだね、と麻衣子。彼女はカップをテーブルに置いてから続ける。

「まず一度ハズレを引いても、自分で降参を認めない限り何度でも復帰できるって所が良いよね」

それに対して顔を顰めたのはくるみだった。

「なんで？ 何回も復活してくるんだったら、そんなのいつまで経っても決着が着かないじゃん」

「そう、チマチマやってたらその内飽きてくるよね。そこで三ヶ月って期限があるのよ。三か月以内に他の参加者を降参させるには、いつも通りタバスコやワサビなんかでやってる場合じゃないでしょ。このルールには参加者をエスカレートさせる仕掛けが張り巡らされているってワケよ」

奈々瀬は科学部五人の顔を順々に思い浮かべた。幸か不幸か、今回のポイズンガール参加者は、自分を含めて負けず嫌いが揃っていた。誰一人として自ら負けを認める姿を想像出来ない。これは間違いないくエスカレーターする事が予想される。

「激辛系じゃいつまでも勝負がつかないって言うけど、じゃあ麻衣子はどついう物を使う気なの」

そうねえ、と呟いた麻衣子はヤドクガエルの水槽に目を向ける。

彼女の視線に気付いた奈々瀬とくるみの表情が警戒を示した。麻衣子の冷たい瞳を見ていると首筋が冷たくなる。

「アンタ何考えてんのよ」

奈々瀬が咎めると麻衣子は小さく息を漏らして微かに笑む。普段、鉄仮面のように表情を変えない麻衣子が少しでも口元を綻ばすと妙に幼く見える。

「冗談よ。いくらなんでもアルカロイドは流石にやり過ぎって事ぐらい私にだつて分かるよ」

「当たり前でしょ！」

奈々瀬が顔を顰めて声を荒げてても、麻衣子は飄々として片眉を上げた。するとペットボトルを握りしめたくるみが口を開く。

「でも確かにいつも通りの毒じゃ誰も降参なんてしないよね。だからつて本物の毒物を使わないにしても、いつものよりもキツイ仕掛けをして病院に運ばれたりなんかしたら…大事になるじゃん」

「だから、その為の遺書でしょ」

麻衣子が無機質に言い放った。

彼女の解釈と無味乾燥な考えに奈々瀬達は寒気を覚えた。しかし麻衣子の言うとおりに解釈すると、遺書の意味が表れてくる。昨日アルマは、遺書は雰囲気作りだと言いつ切っていたが、やはりその他にも遺書の役割はあるらしい。

ゲームがエスカレーターして、たとえ病院に運ばれるような毒を飲んでしまったとしても昨日書いた遺書があれば自殺未遂として片付けられる。そしてゲームは続行される、という事だ。

たとえ誰かが死んでもゲームは止まらない。

「ポイズンガールとは、奈々瀬もまた上手く名付けたものね」

麻衣子は感情のない瞳を奈々瀬に向ける。

麻衣子は友達だ。

しかしここからの三ヶ月に限っては危険な敵の一人だ。麻衣子だけではない、隣にいるくるみにしても同じだ。これからは科学部五人の一挙手一投足に注意を払わなければならない。

仲の良い友達が敵になる。奈々瀬はこのポイズンガールというゲームの本当の意味を知ったような気がした。

「ところで、誰が最後まで残ると思う？」

ふと麻衣子の瞳から冷たさが消えた。つい今まで機械のような冷徹な印象だったのに、もう普段の表情に戻っている。声に抑揚がないのは変わらないが……。彼女の切り替えの速さにはいつも驚かされる。

「奈々瀬なら『優勝は私だ』って言いそうだけど、もし自分以外が最後まで勝ち残るならって考えてね」

腕を組んだ奈々瀬は、再び自分を除いた科学部の顔を思い浮かべる。

ふと隣にいるくるみに目を向けた。

正直くるみが最後まで勝ち残る可能性はないだろうと考える。小心者の上に優しすぎる彼女が、負けず嫌いの他の四人をギブアップさせるような強烈な仕掛けを盛る事は出来ないだろう。

もしくるみが最後の二人まで残るとしたら、逃げて隠れて生き残るパターンが考えられる。彼女の危機察知能力と危機回避能力は小動物並みに発達している。それでも攻撃を仕掛けられない彼女は、やがて畏にかかり負ける。もしくは最後まで逃げ切って引き分け。とにかく彼女が最後の一人になるイメージが出来ない。

「くるみは誰だと思う？」

そう麻衣子に促されたくるみは、しばらく考えた末に口を開く。

「何となくだけど…アルマのような気がする」

奈々瀬と麻衣子は同時に頷いた。

奥山アルマ。

理数科在籍の彼女は、普通科や特進クラスとはまた違った雰囲気を持つている。

さらに別世界の雰囲気を際立たせているのはその美しい容貌だろう。人形のように整った目鼻立ちに、雪のように白い肌。淡い栗色の髪をした彼女はハーフで、母親がドイツ人らしい。

父親が医者で、彼女自身も幼い頃から医者を志して医者になる為の教育を受けてきた。科学部の中でも最も薬学に精通しているのは彼女で、薬品の扱いにも慣れている。もし、このポイズンガールがエスカレートして本物の薬物まで使用し始めたとしたら間違いない。彼女は脅威になるだろう。

何よりアルマが長けているのは心理戦の強さにある。

従来のロシアアンルーレットで勝負している時も、常にポーカーフェイスで全く感情を表に出さない。そして色素の薄い茶色の瞳でこちらをじっと見ているのだ。勝負の時、アルマの考えている事が全く読めない。

きつと彼女は表情一つ変えず食べ物に仕掛けをして、それを誰かが食べる様子を何食わぬ顔で見ているのだろう。いや、確実な勝利を確信した最後の瞬間だけ上品に笑うかもしれない。

普段は気さくで冗談もよく言う普通の女子高生なのだが、そういった心理戦の時に限って全てが一変する。敵に回すと恐ろしい。

アルマが最後まで残る可能性は十分ある。

「確かにアルマは侮れないね。今までのロシアアンルーレットでもかなり戦績良いし、勝負掛けてくる時のプレッシャーが普通じゃないもん。奈々瀬もアルマが最後まで残ると思うの？」

アルマは強敵だ。しかし奈々瀬は首を横に振る。奈々瀬にとって

の一番の脅威はアルマではない。

「紗季…」とぼつりと呟く。

「やっぱり。奈々瀬はそう言うと思った」

ライバルだもんね、と麻衣子は付け足す。

彼女の傍らにある水槽の中で白いヘビが音もなくオブジェの木に巻きついて、血のように真っ赤な目をこちらに向けた。水槽のヘビは様子を窺っているように奈々瀬の方をじっと見ている。

篠原紗季は蛇の化身だ。

彼女は奈々瀬と同じ特進クラスで、学力テストでも体育の運動能力テストでも、そして科学部のゲームでも全てにおいて奈々瀬と互角だった。周りからはライバル同士と言われ、奈々瀬も紗季の存在をいつも意識していた。しかし紗季はそれ以上だった。

奈々瀬には負けたくない。

その執念が彼女を動かしていた。何かにつけて紗季は奈々瀬と競おうとする。奈々瀬に勝つ事だけを意識して生きていると言っても過言ではない。紗季のような執念深い女は油断ならない。

ふと昨日のゲームで紗季を下した時の事が脳裏を過る。長い黒髪を床に散らばらせて這いつくばる紗季の目を思い出して鳥肌が立った。

それは蛇そのものだった。

紗季は間違いなく奈々瀬を執拗に狙ってくる筈だ。虎視眈々と期を窺って、油断した途端に彼女の毒牙の餌食となってしまうだろう。仮に今度も彼女に勝てたとしても、こちらも無傷では済まないかもしれない。

「紗季は奈々瀬に勝つまで絶対に降参しないだろうね。私達も三年でもう卒業だし、こんなふうゲームするのも最後になると思う。だから奈々瀬には死んでも勝ちに来ると思うよ」

…死んでも、か。

蛇は首を千切られても、まだ牙を剥いて襲いかかって来ようとする。死んでもという言葉が比喻には聞こえなかった。

「ところで、麻衣子は誰が勝ち残ると思うの？」

話題を進めたのはくるみだった。

自分達の事ばかり話していて、麻衣子の優勝候補者の事を聞いて

いなかった。奈々瀬は甘い香りのジャスミンティーに口を付けて、上目遣いに麻衣子の顔を覗いていた。

麻衣子は、奈々瀬がお茶を飲む様子をじっと見ていた。

「あれ、今日はお砂糖入れないの？ 奈々瀬っていつもならアップルティーでもピーチティーでも、お構いなしにお砂糖入れまくるのに」

「うん。だってポイズンガールは始まつてるんだからね」

奈々瀬がカップを置いて麻衣子の目を見据える。

すると麻衣子の顔が一気に強張った。平和だった部屋は突然空間が歪んでしまったかのように緊張感が溢れる。何が起こっているのかよく分からない様子のくるみは不思議そうに二人の顔を見比べていた。

奈々瀬は湿った口唇を指で撫でる。

「もともとカップには何も入ってなかったし、同じポットから淹れたのを麻衣子も飲んでるから、このお茶はまず安全なんだよね」

でもね……。奈々瀬がそう付け足そうとすると麻衣子の表情が険しくなった。取り繕おうとしているが、顔の筋肉がびくりと引き攣るのを隠しきれしていない。

奈々瀬は砂糖の小瓶を爪で弾く。

「このお砂糖はちょっと信用できないなあ。麻衣子はお砂糖入れてないし。だいたい麻衣子ってさっきからこの瓶ちらちら見過ぎなんだよね」

指摘された麻衣子はぎこちなく瓶から視線を逸らす。すると、くるみが横から手を伸ばして砂糖の小瓶の蓋を開けた。

「奈々瀬、これ普通のお砂糖じゃない？」

二人の顔を窺うようなくなるみの声。奈々瀬は麻衣子の目をしっかりと捕らえたままくるみに答える。

「この瓶に仕掛けをするなら、ぱっと見た感じではお砂糖じゃないってバレないものにしてある筈だよ。だってお砂糖を入れるのは私だし、見ただけでバレるような物なら仕掛ける意味がないからね」



くるみは瓶の中にある粉末を手にとって恐る恐る舐めてみる。

「塩だよこれ！」

やっぱりね、と漏らした奈々瀬は溜息を吐いた。

「こんな事だろうと思っただよ。危ない危ない、気付かずにも通りの量を入れてたら海水みたいになっただね……」

そう言っただけ鋭く麻衣子を睨みつける奈々瀬。

すると麻衣子は開き直ったように笑顔を見せた。もともと表情の乏しい彼女がこんなに笑うのは珍しい。

「もうちょっとで上手く引掛かると思ったんだけどな。やっぱり奈々瀬はただ者じゃないね。まるで野生動物みたいに常に警戒を解かないもん」

一頻り笑うと彼女はまるで電池が切れてしまったように無表情に戻る。そして麻衣子は静かに口を開いた。

「最後まで勝ち残るのは夏川奈々瀬。あなただと思っただよ。不意に名前を呼ばれた奈々瀬の耳がぴくりと反応する。」

「誰が何と言おうと私は奈々瀬が残ると思う。インパクトでは紗季やアルマの方があつかもかもしれないけれど、きつと奈々瀬は爪を隠してるんですよ。いつも私達と一緒にいるけれど奈々瀬だけは別の次元の生き物のような気がする」

「何訳わかんない事言ってるのよ」

苦笑して首を傾げる奈々瀬だが、一方の麻衣子は真剣そのものだ。「奈々瀬。あなた私達に言えない事……あるでしょ」

……言えない事。

思わず奈々瀬は口籠った。

一瞬強張った奈々瀬を、くるみと麻衣子は見逃さなかった。そして麻衣子は機械のような声で言った。

私は奈々瀬が一番こわい。

冗談で言っているのではないようだ。麻衣子は至って真面目な表情で奈々瀬を見据えている。

「こわいって、どういふ事よ」

「何となくそう思うの。奈々瀬は私達とゲームをしている時、本気じゃないのに本気のふりをしてる。大人が子供相手に遊んでいるよな…そんな気がする」

「馬鹿な事言わないでよ。負けたらタバスコだよ、本気に決まってるじゃん。私は常にいっぱいいっぱいだよ！」

しかし麻衣子は怪訝な顔をしていた。うそつき。彼女の目はそう訴えかけているようだった。

三人はふと黙り込んだ。

紅茶が冷めてゆく。

いつまで続くか分からないその気まずい沈黙を破るようにドアが開く。三人は一斉にドアの方を見た。

「あ、お姉ちゃん」

第一声を発したのは麻衣子だった。

「奈々瀬ちゃんとかくるみちゃんが出来たのね」

お姉ちゃんと呼ばれた女性は胸の前で小さく手を振った。奈々瀬とかくるみは軽く会釈をして、おじゃましてますと答える。

麻衣子の姉は、彼女と同じく眼鏡を掛けていて麻衣子よりも少し長い髪型をしている。麻衣子がそのまま大人になったような感じだ。「職場の人のお土産でクッキー貰ったんだけど、みんなで食べなよ」そう言った麻衣子の姉はにんまりと表情を和ませた。

彼女が麻衣子と大きく違う点は、表情が豊かだという事だけだろう。麻衣子の姉はゆっくりとした動作でテーブルにクッキーの缶を置いた。細身のジーンズに包まれたすらりと長い脚、薄手のニットに浮き上がる胸の形。大人の身体だ。

奈々瀬はこっそり自分の胸を触って、少し落胆した。

「アーモンドが乗ってるのは数が少ないから早い者勝ちだよ」

麻衣子の姉が缶の箱を開けると、様々な種類の高級そうなクッキーが詰まっていた。くるみは真つ先にアーモンド入りのクッキーを手に取った。今度は麻衣子が用意したものではないので何の仕掛け

もされていないだろうと、奈々瀬も一つ手を伸ばした。

全員がクツキーを口を含むと、また沈黙が始まった。その静けさに居心地の悪くなった麻衣子は、リモコンを手に取ってテレビをつける。

たとえ誰にも相手をされなくても、テレビは勝手に喋り続けて沈黙を作らないようにしてくれる。奈々瀬は普段あまりテレビを見ないのだが、こういう時テレビもそれなりに便利だと思った。

夕方のニュースが放送されていた。

「あれ？」

頓狂な声を上げたのはくるみだった。

「これって結構近所じゃない？」

調子外れなくなるみの言葉で、他の三人もテレビに注意を向ける。

画面に映し出される場所には奈々瀬も見覚えがあった。

「学校の裏手の鉄工所だ。ほら、隣に高速道路もあるから間違いないと思う」

人気のない通りを五人程の警察官が何やら調べている映像とキャスターの重々しい口調から、良いニュースでない事は容易に想像出来る。やがてキャスターは殺人事件という言葉を口にする。

「最近物騒になったもんだよね」

クツキーをかじりながら、ブラウン管を見詰めて顔を顰める麻衣子の姉。

昨日の真夜中、工場前の通りで男性が鈍器で殴られて、搬送先の病院で死亡した。通報者の話によると、被害者の鮫島という男が何者かと激しく言い争っていたという話だ。

そこで被害者である鮫島翔平の写真が表示された。

「うわあ、チンピラだねえ」

実にどうでも良さそうな感想を述べたのは麻衣子だ。

「チンピラ同士の喧嘩で死人が出るなんて。平和そうなこの街でも夜はやっぱり危険なんだね」と、麻衣子の姉。

眼鏡の姉妹はテレビに向かってこくりと頷いている。

犯人はまだ捕まっておらず、依然逃走中であるらしい。警察も評判よりは優秀らしく、国内で殺人を犯して時効をむかえた例は極めて少ない。犯人はそのまま逃げ切れると思っているのだろうか。

奈々瀬は興味なさそうにテレビを見ていた。

## 想定された死

形の悪い月は更に高く昇った。

悟はマンシヨンの近くにある駐車場に車を停めた。しかしエンジンを切ってシートベルトを外しても、まだ車から降りようとしなない。彼はそのままハンドルに突っ伏して頭を抱えていた。

…どうしよう。

…どうすれば良い。

先程のニュースを頭の中でしつこいぐらいに反芻する。

あの後、鮫島は死んだ。自分が殴ったから死んだ。自分が殴り殺したのだ。殺した、殺した、殺した。

殺した。その言葉の持つ事実が死神のように悟の両肩にまとわりつく。少しでも気持ち落ちつけようと深呼吸をするが、吐くその息は弱々しく小刻みに震えていた。

鮫島は悪い奴だった。

自分を強請り、さらには香那にまで手を出そうとした。あの男は真正銘の悪だ。真面目に生きている人達に害をもたらす事はあつても、益をもたらす事は断じてない。だから鮫島がこの世に存在する価値などなかった。

殺して何が悪い。

害虫駆除だ。

いつか誰かが言った言葉をふと思い出した。

鮫島は自分の弱みにつけ込んで寄生して金をせびろうとしていた。まさに害虫、悪そのものではないか。鮫島をあのまま放っておけば香那にも手を出したに違いない。自分は香那を守った正義だ。正義の味方が悪を成敗した。その何が悪いのだろうか。

悟は必死に自分自身を正当化しようとした。

しかし彼も良識のある大人だ。いかなる理由があろうと殺人は許されないという事ぐらい解っている。

もし本当に自分が正しいと思っていたのだったら、あの時なぜ逃げたのだろうか。自分が正義なのだったらこそと逃げる必要などなかった。目撃された時に「悪者をやっつけた」と堂々と言えば良かったのだ。

それが出来なかったという事はやはり悟自身にも悪い事をした自覚があったのだ。そもそも鮫島に脅されていたネタが先月の轢き逃げの一件。

罪を重ねてしまった。一つの罪を隠すのにもう一つの罪で塗り潰したのだ。

悪人。

頭に浮かんだその言葉が自らの胸を貫いた。

荷物を持って車から降りると、外は思っていた以上に肌寒かった。寒く感じるのは気温の所為だけではないだろう。

マンションに帰る道のある自動販売機で煙草を買おうと立ち止まる。自動販売機が放つ明るさに悟は思わず身を竦めた。自分はなぜ光に怯えているのか。本来、明るい場所を嫌うのは悪者の筈だろう。自分は悪者を成敗した正義だ。それなのになぜ光から顔を背けようとするのか。

悟は自らにそう語った。

しかし小銭を取り出そうとする悟の指は小刻みに震えていた。

買った煙草をポケットに入れて、悟は足早に夜道を歩いてゆく。

無意識に街灯の下を避けながら歩き、マンションの前に着くと鞆から部屋の鍵を取り出した。

エレベーターもない三階建ての小さなワンルームマンション。この二階の角部屋で悟は生活している。

鍵を開けてドアを開けると、身に馴染んだ空気を感じる。帰って来たのだと実感して、ようやく肩の力が抜けた。鞆を床に置き、ネクタイを外すと悟は電気も点けずにそのままベッドに仰向けに倒れ込んだ。

男の一人暮らしにしては整然としている部屋だ。時々来てくれる

香那が整理整頓を手伝ってくれているおかげもあるが、もともとこの部屋には物が少ない。ベッドとテーブルと小型冷蔵庫。それと十匹の四型の小ぶりなテレビぐらいしかなかった。

悟はベッドに倒れたまま、ぴくりとも動かないが目は開いている。まるで死体のようだ。それでも頭の中はどす黒い暴力の記憶が目まぐるしく回転していた。冷たいコンクリートブロックの感触、鯨島の肉の感触がその手に蘇る。

台所の蛇口がリズム良く水滴を零す音を奏でていた。ひたひたひた、と。

真つ暗な部屋の中でデジタル時計の無味乾燥な光がいやに眩しい。悟は恐ろしくて目を閉じる事が出来なかった。目を閉じてしまうと自分の身体を暗闇に飲み込まれてしまうような気がした。闇に染まると悪になる。それが何よりも恐ろしかった。

舌の上がざらざらに乾き出す。

悟は大きな体をのそりと起こして電気を点け、冷蔵庫から麦茶を取り出してコップに注ぎ、それを一気に飲み干して無理矢理喉を潤した。

空になったコップをシンクに置いて、またベッドに戻ってくる。

…香那。

不意に彼女の声を聞きたくなった。普段なら彼女と電話している時間なのだが、どうしても携帯電話に手を伸ばせない。香那の声を聞きたくて堪らないのだが、今日は何も話せないような気がする。

何かあったの？ そう尋ねられるのが恐かった。

悟は再び体を起こしてベッドに腰掛ける。そして本日最後の煙草に火を点けて、肺の深くまで不健康な煙を吸い込んだ。赤く燃える火種から立つ紫煙が真つ直ぐ上に昇り、天井にぶつかって散ってゆく。

一本吸い終わると、ポケットから買ったばかりの煙草を取り出して包みを剥がす。そわそわと落ち着かない手つきでさらに一本取って火を点けた。一日に五本と決めていたにもかかわらず、それはそ

の日六本目の煙草だった。

また少し、いつも通りが崩れた。

煙たくなつた部屋を換気しようとガラス戸を開けてベランダに出ると、相変わらずの見晴らしの悪い風景。

洗濯物は今朝仕事前に取り込んでおいたが、エアコン室外機の上に革靴を干したままだった。ベランダにぼつんと靴だけが置いてあると、飛び降り自殺の現場みたいになってしまっている。駐車場から悟の部屋のベランダを見た人も、もしかすると同じような事を思ったのだろうか。

隣のコインパーキングが見える。停めてある白い乗用車のボンネットの上で二匹の野良猫が月光浴をしている。どこか微笑ましい光景に悟は久しぶりに笑顔を見せた。

その時、甲高いインターフォンが鳴った。

突然の音にぎくりとした悟は急いで部屋に戻り煙草の火を消す。

「はい」と返事をしてモドアの向こうからは何の反応も返って来ない。

…こんな夜にいったい誰が。

時間的に新聞の営業や宗教の勧誘とは考え難い。そうかと言っても連絡もなしに突然訪ねて来るほど仲の良い友人もいない。

「香那かい？」

もしかすると彼女が驚かそうとして訪ねて来たのかもしれない。

ここしばらく会っていなかったので、悟はドアの向こうの相手が香那である事を期待していた。

しかし彼の呼び掛けに返事なかった。代わりにインターフォンをもう一度鳴らされる。急かされているようで気分が悪かった。

玄関で恐る恐るドアノブを回し、悟は開きかけた扉の隙間から様子を窺う。そこには背広を着た中年男性と、もう一人若い男が立っていた。二人とも体格が良く、背も悟より少し高い。香那だと期待していた分、気持ちの落差は激しかった。

「笹中悟さんですね」



「ええ、そうですが…何か」

男達は軽く頭を下げると、中年の男の方が「ちよつと宜しいですか」と尋ねてきた。悟は「はあ」と気のない返事をする。そして男達が胸ポケットから取り出した物を目にした悟は心臓が止まりそうになった。

警察手帳だ。

「少しだけ笹中さんにお伺いしたい事がありましたね」

何でしょうか、と冷静を保ちながら応答しているが既に悟の目の前は真つ白になっていた。刑事たちは自然な動作でドアを開け切つて玄関に入つて来た。

ベテラン風の中年刑事が指に唾をつけて手帳を捲る。その間も後ろに控えている若い刑事が悟に睨みを利かせていた。この二人には隙がない。

「ええと。鮫島翔平という男を知っていますか？」

…鮫島！

中年刑事は首を傾けて悟の顔を覗き込む。まるで悟の表情の変化を観察しているようで居心地が悪い。悟は一瞬たじろいだ。

焦るな、まだ僕を捕まえに来たと決まった訳じゃない。悟は自分にそう言い聞かせて自らを落ち着かせる。

「確か…さつきニュースで聞いた名前ですが。近所で殺人事件があつてんですよね。ブロックで殴られた人でしたっけ」

悟が答えた途端、後ろの若い刑事がびくりと反応するが、それをベテラン刑事が目で制した。

「ええ、そうです。その高架下で起きた事件の被害者の方です。その事で近隣の方に聞き込みを行っているんですよ」

まだ自分の的を絞られていた訳ではなさそうだと悟は胸を撫で下ろした。上手くあしらは切り抜けられる。そう思っていた時、中年刑事はさらに踏み込んだ質問をして悟を揺さぶってくる。

「笹中さんは直接鮫島さんと面識はないのですか？」

「ありませんね」

堂々と答えると、中年刑事が難しそうな顔をして眉を寄せた。それに連動するように悟の胸の中にも靄がかかる。

「あれ、おかしいですね」

わざとらしい声で言った中年刑事は手帳を睨みながら首を傾げる。

「おかしいって…何がですか？」

「いや、実はですね。被害者の鮫島さんの携帯電話を見たら、最後の発信記録が笹中さんの番号になっていました。それで少しお話をと思ひまして…」

…しまった。

もう目星を付けられていたのか。そう確信した悟の背中にじわりと汗が浮かぶ。ふと顔を上げると二人の刑事がじつくりと悟の顔を観察していた。

「間違い電話でしょ…」

「ちよつと、それは無いと思うんですがね」

「なぜですか？」

「鮫島さんの電話にあなたの番号が登録されていたんです、笹中悟というフルネームでね。だから番号の押し間違えで笹中さんの電話に掛かってしまったというのはちよつと考えられないんです」

…余計な事をされた。

脅迫しようとしていた相手の番号をわざわざフルネームで登録するなよ、と悟は内心で叫びたかった。刑事の責めはさらに続く。

「鮫島さんはあなたの番号を登録しているんですよ。番号登録するような人と、本当に面識がないんですか？」

これは聞き込みではなく尋問に変わりつつある。

ベテランの詰問と若手のプレッシャー掛けに晒され続けて、悟の精神力もかなり摩耗してきた。

「少なくとも僕の知り合いに鮫島という人はいません。僕の番号だつて、仕事で一方的に登録していたんじゃないですか。例えば販売営業のテレアポとか」

我ながら見え透いた言い訳になってきたと悟は内心で落胆する。

案の定ベテランの耳を誤魔化す事は出来ず、逆に憐れむような目を向けられた。

「ニュースでも流れてたから言いますけど、鮫島さんは無職だったんです。だから仕事で番号を登録というのは、ちよつと…」

形勢はさらに傾いてきた。何も言い返す事が出来なくなってきた悟はぐつと言葉を飲み込んだ。

刑事は眉にしわを寄せたまま続ける。

「ああ、それとね。鮫島さんは何で殴られたんですって？」

「ブロックでしょ。仕事帰りに車のラジオでニュース聞いていたんですよ。さつきも言いましたけどね」

返答した瞬間、その場の空気が固まった。

誰も口を開こうとしない。すると中年刑事がぎょろりと目を剥いて悟の顔を下から覗き込んだ。

「おかしいですね…笹中さん」

中年刑事が演技臭い困った顔をしている。まるで笑いを堪えているかのような表情に悟は酷く困惑する。

「違うんですか？」

「いえいえ、凶器は間違いなくブロックです。ちょうどマンションの下の駐車場の塀に使われているようなコンクリートブロックですよ。それは間違いありません」

ただね…。

中年刑事は間を開けてからそう呟いた。しかしその続きは勿体ぶったようになかなか言わない。彼らはまた悟の顔を観察している。

後ろの若い刑事が一步前に詰め寄ろうとする。先程は若手の行動を止めた中年刑事だったが、今度は若手の動きを止めようとはしなかった。分からない所で何かが展開してゆくような事態に悟の冷汗が止まらない。

やがて刑事が口を開く。

「ただ…凶器は、鈍器としか報道されていない筈なんです。ニュースでもブロックとまで詳しく言っていないんですよ、ねえ」

そんな…。と、声を漏らした悟。二人の刑事が、無言のプレッシャーを掛けて迫ってくる。二人の屈強な男にじっと見詰められている悟は思わず顔を伏せた。

「間違いありませんよ。凶器に関しては警察が報道規制をかけていますから。テレビ、ラジオ、新聞、インターネットでも報道されていないんですね。だから凶器の事を知ってるのは警察関係者と…」

現場にいた人間だけです。そう刑事は付け足した。

…もうお終いだ。

これ以上言い逃れは出来ない。

悟は絶望に打ちひしがれた。冷たくなった体は感覚が麻痺してもう何も感じる事が出来なくなった。

このまま自分は悪のレッテルを張られた殺人犯として、刑務所に入れられて過ごす事になる。最悪のヴィジョンを思い描いた悟は目の前が真っ白になった。

悟の絶望をあざ笑うように、台所の蛇口がひたひたと水滴を垂らしている。

全てが終わった。

「下に車を停めてますんで、続きはそこでお話ししましょうか」

中年刑事は若い刑事に目配せして合図を送る。すると若い刑事は悟に出てくるように促した。

「ちょっと、待ってくれませんか…」

悟の声に、手を伸ばそうとした若い刑事の動きがぴたりと止まる。まだ言い訳をしようと思ったのだろうか、彼は厳しい顔をさらに強張らせる。

「部屋の鍵、ジャケットの中なんです」

今更抵抗して逃げるつもりはない。悟はベッドの上に脱ぎ捨てられてあるジャケットを力なく指差した。

「取って来ても、良いですか」

悟の言葉に難渋を示した若い刑事を無言で窺<sup>たしな</sup>めた中年刑事。彼は「どつぞ」と言って手のひらを上に向ける。

「ありがとうございます…」

目を閉じて頭を下げた悟は部屋の中に戻り、大きく息を吐いた。その吐息は酷く疲れているようで、なお且つ震えている。

…僕はもう、悪者だ。

これから長い取調べがあつて、酷い言葉を沢山浴びせられるのだろう。その手に掛けた鮫島も悪人とは言え家族も友達もいた筈だ。これからは彼らに償う為に生きていかなければならない。

おもむろにジャケットを羽織つて覚悟を決める。

その時、テーブルの上の携帯電話が震え出した。

電話が掛かつて来たのだ。待たされて苛立っている様子の若い刑事の視線を気にしながら悟は携帯電話を手に取った。

…香那。

愛しい香那からの着信だった。

悟の大きな手の中で、携帯電話はぶるぶると振動し続けている。早く出て、と願うように悲しそうに震えている。

悟はちらりと刑事達の方を見た。

「恋人からです。ちょっとだけ…ほんのちょっとだけ、出ても良いですか」

険しい顔をして何か言おうとする若い刑事を制したベテラン刑事は、低くて優しい声で「出てあげて下さい」と言った。

悟は目に涙を浮かべて受話ボタンを押して電話を耳にあてた。そして電話の向こうの香那が何かを言い出す前に、一言だけ呟いた。

香那、ごめんね。

愛してるよ。

それだけ言つて悟は電話を切った。

ポケットに携帯電話をしまった悟は呆然と立ち尽くして今までの半生を思い返す。思えば不器用な生き方ばかりしていた。この世の全てを正義と悪に分けて、徹底的に悪を忌み嫌って生きてきた。

悟の中に白と黒は存在しても、灰色という中途半端なものは存在しない。

そんな不器用で真っ直ぐ過ぎる悟を苦手がって離れてゆく者も少なくなかった。自分の考え方が極端に偏っているというのは悟自身も分かっていて。理解されないのなら、されなくても構わないと悟は思っていた。

しかし、それでも香那だけは一緒にいてくれた。

香那は等身大の悟を愛してくれて、不器用な悟の全てを包み込んでくれる。香那の柔らかい身体を抱き締めていると、死んでもこの人を守りたいという気持ちになる。自らの正義の全てを賭けて。愛してるよ。

最後の電話でそう言ってから、さらに香那への思いが強まった。自分は香那の傍にいて彼女を守り続けなければいけない。自分は香那を守る正義のヒーローでいたい。香那の前では悪の怪人になり下がる訳にはいかない。正義のままではないなければならない。

絶対的な正義のままです…。

また携帯電話が震え始める。

着信は勿論香那からだ。口下手で照れ屋の悟から突然「愛してる」などと言われて困惑しているのだろう。その取り乱した様子で電話を掛け直している香那の姿を想像して、悟の表情が微かに綻んだ。

…香那を、失いたくない。

「おい、早くしなさい！」

若い刑事がとうとう痺れを切らして声を荒げた。

悟は玄関の刑事達に向かって深々と頭を下げる。そして静かに頭を上げると、二人の刑事は怪訝な顔をして悟を見ていた。

「刑事さん…ごめんなさい」

悟は満面の笑顔でそう言った。

…まだ捕まる訳にはいかない。

素早く振り返った悟は弾かれたようにベランダに向かって駆け出した。背後で中年刑事の言葉にならない驚嘆の音が聞こえる。

悟はそのまま室外機の上に干してあった革靴を手にとって、躊躇

なしに勢い良くベランダから飛び出した。

ふわりと宙に浮く身体。

真っ暗な闇の世界に飛び込んだ悟。真っ黒な悪の世界に飛び込んだ悟。

駐車場に停めてある車の白いルーフがゆっくりと近付いてくる。

驚いて逃げようとする猫、後ろで聞こえる若い刑事の怒鳴り声。全てがスローモーションに感じた。

悟はルーフに着地した。その衝撃で耳が割れるような大きな音が夜の住宅地に響く。上手く受け身を取った悟は身を翻して地面に降りた。そして靴も履かないまま一目散に駆け出す、さらなる暗黒が待つ世界に向かって。

待て！

絶対に逃がさねえからな！

背後から中年刑事のしゃがれた声でした。それでも悟は振り返る事もせずに、がむしゃらに走り出した。

何も見えない暗闇に向かって、目的地もないままただ全力で走る。とにかくこの場から一歩でも遠くに行かなければならないと本能が言っている。夜の空気が、溶けたバターのように悟の身体にまとわりつく。それを振り払うように必死で走った。

自宅の方から階段を駆け下りる騒がしい物音が聞こえる。

その音を聞いて悟の心臓は破れてしまいそうな程に鼓動する。血相を変えた刑事達がもう真後ろまで迫ってきているのかも知れないと思うと、恐ろしくて振り返る事が出来なかった。

走れ！

頭の中で誰かが叫んだ。その声に従って悟は走り続ける。素足に石が食い込んでみたら走る。

悟は走る、自らの愛を貫く為に。

悟は走る、自らの正義を守る為に。

同じ制服を着た少女の群れの中に奈々瀬とくるみもいた。

河川沿いの堤防が通学路になっていて、朝のこの時間は紙町女子高校の生徒が行列を作って歩いている。

奈々瀬は歩きながら大きく息を吸う。水と河原の草が混じり合った匂いが爽やかな朝を演出してくれていた。

おはよう。

何気ないあいさつの言葉が周りで交わされている。それで昨日と同じように、今日が始まってゆく。おはよう、その言葉は昨日と変わらない退屈で平和な一日が、今日にも訪れるようになる魔法なのかもしれない。

しかし奈々瀬達にその魔法は効かなかった。

「くるみ、あれから何か変化は？」

するとくるみは目を細め、苦い顔をして答える。

「昨日はねえ、細かいのは色々あったんだけど、サンドイッチに大量ワサビが一番きつかったかな。悶絶しちゃったよ」

「うわぁ、強烈だね。でも犯人、私じゃないからね」

分かっているよ、と言ったくるみは口唇を尖らせた。

「犯人は多分アルマだよ。あの子、理数科のくせに昨日はなぜか普通科の教室ウロウロしてたんだもん」

ポイズンガールは確実に動き始めている。

ここ数日で奈々瀬もかなりの仕掛けをされた。勘の良い奈々瀬は毒が口に入る前にある程度察知出来ていて、被害を最小限に抑えられている。しかしくるみに関してはかなりの被害を受けているらしい。

それでも降参しないくるみには感心させられる。

「アルマは手加減知らない子だからねえ、仕掛ける毒の量も無茶苦茶でしょ」

「そうそう、ホント死ぬかと思ったからね。だから今日からお弁当は持参しない。昼休みまでずっと見張ってなきゃならないもん」



「じゃあお昼どうするの？」

「学食で買ってその場ですぐに食べる！」

くるみは無駄に気合の入った声で言った。

「ルールでは参加者以外への攻撃は禁止ですよ。だから最初から学食のパンに仕掛けをしておくような無差別攻撃は出来ないじゃん。」

つまり、その場で食べてしまえば確実に安全なのだー」

一気に喋って喉が渴いたのか、彼女は鞆からいつものペットボトルを取り出した。食べ物を持って来ないようにしたがウーロン茶は持参しているらしい。

自信満々の表情で鼻を鳴らすくるみを見て奈々瀬は溜息をついた。

「何だよ奈々瀬。この作戦にケチつける気？」

「いやいや、その作戦は良いと思うんだけどさ、そんな事もう誰だつて気付いてるよ。私だつて初日からそうしてるし、麻衣子なんか昼ごはん食べないぐらいだよ。」

そうだったの、と呟いたくるみは眉尻を下げて固まった。

奈々瀬達は消耗していた。今までのロシアンルーレット形式とは違って「どちらに」「どれに」ではなく、「何に」「毒が入っているか」分からない状況が彼女達の精神を大きく削り続けている。

「ところで、奈々瀬はもう動いてるの？」

「うーん。今の所とりあえず様子見かな。仕掛けようにも皆なかなか隙がないし、今までみたいに一緒にいる時間も減ったしね。」

奈々瀬は空を見上げて目を細める。

科学部メンバー同士の関わりは希薄なものになっていた。廊下ですれ違ったりしたときには話したりもするが、今までのように一緒に遊んだりはしなくなっていた。

仲が悪くなったり関心がなくなつた訳ではない。むしろ今まで以上にお互いを意識するようになっていく。奈々瀬自身も今、目の前にいない紗季とアルマと麻衣子の事が気になって仕方がない。こうしている間にも何か仕掛けられていたらと考えると気が休まらない。彼女達が今どこで何をしているのだろうと頭の中で想像と予想が膨

らむ。

お互いが敵。

仲が悪くなつた訳ではないが、お互いに敵同士だ。

ゲーム開始から三日が経った。今まではお互いに探りを入れていて、特に目立った行動はしていなかった。しかしそれぞれの警戒心も高まり、ガードも固くなつた所でそろそろ新しい展開が起こるかもしれない。

「くるみ。今日からは本当に気を付けた方が良いと思う」

「分かつてるって。だから今日から学食のパンしか食べないって言つてるじゃん。私の口に毒が入るって事はもうないよ」

「甘いよ、くるみ」

奈々瀬はくるみの言葉に割り込んだ。くるみは目を丸くして顔全体に疑問符を浮かべている。彼女は分かっているようにだ。

「くるみも含めて私たち全員、食べ物には気を付けてるでしょ。極端な話、このまま全員学校で何も食べないようになつたらどうする？」

それは、と呟いたくるみは難しい顔をして腕を組む。

「決着が着かないまま全員引き分けとか？」

面白くないよー、と眉を寄せるくるみ。その様子を見ていた奈々瀬は重たい口調で呟いた。

「それで引き分けなら、良いんだけどね」

くるみは怪訝な顔をして奈々瀬の顔を覗く。

「引き分けになるどころか、もつとエスカレートするパターンもあるよ。むしろそっちの方が起こるかもしれない。私が思い付いたんだから他の誰かも思い付いてる筈だよ、実行するかどうかは別としてね」

「なになに、もう。真剣な顔しちゃって。何か知ってるならもったいぶつてないで早く教えてよ。だいたい誰もご飯食べないんじゃない仕掛けようないって」

くるみは妙に早口になっている。奈々瀬はゆっくりとくるみの目

を見た。そして彼女は静かに口にする。

「毒つてさ、別に口からじゃなくても良いんじゃない？」  
目を丸くするくるみ。

その瞬間、二人の耳には周りを歩く他の女生徒達の喋り声が全く届かなくなつた。まるで別世界に隔離されたようだった。

「ルール思い出してみてよ。一つ目に『日常生活中、参加者同士で毒を仕掛ける』ってあつたでしょ。食べ物にしか仕掛けられないってって決まりはないんだよ」

「え、じゃあご飯食べなくても危ないじゃん！」

小さく頷く奈々瀬は続ける。

「皮膚の上から、傷口から、粘膜から。ルールで禁止されていないって事は、体に毒が沁み込めばどこからでも良いって事なんだよ」  
「でも口からじゃないと、あんまりダメージなさそうだね」

「何言つてんの、逆よ。口からだとは消化器を通るからある程度まで無毒化できるけど、口以外はそうはいかない。場合によっては口以外の方がはるかにダメージ大きいよ」

納得いかなそうに首を傾げるくるみ。いまいちイメージが湧かないのだろう。くるみに想像しやすいように説明してやる必要がある。  
「確かくるみってコンタクトしてたよね」

「してるよ。それがどうしたの？」

「って事は疲れ目用の目薬も持つてるよね。もしその中にタバスコでも入れられてたらどうする？」

その言葉を聞いた途端くるみは竦み上がった。そんな目薬が目に入つた場面を想像しているのか、彼女はきつく目を閉じて激しく顔を振る。それに合わせて彼女のツインテールも勢いよく跳ねる。

「ルールに付け加えがあつたでしょ。ワサビでもタバスコでも何でも可』って。何でも使つて良いんだよ。タバスコがちょっと目に入つても失明まではしないかもしれないけど、仮にこれが漂白剤とかだつたら……」

「そんな…死んじゃうよ」

くるみの幼い顔が歪んでゆく。

「目に漂白剤で死んだりはいらないと思うけど、もし仮に死んじゃったりしても…私達、遺書書いちゃったじゃん」

奈々瀬がそう言うのと、くるみはみるみる青ざめてゆく。

あの時書いた遺書はポイズンガールへの参加表明書であり死の同意書でもある。ゲームの先にある死という可能性がちらりとくるみの脳裏を過つたのだろう。彼女は恐ろしいイメージを振り払うように再び頭を振って、そしてウーロン茶をごくごくと飲む。

やがて紙町女子高校が見えてきた。堤防を歩く生徒達の列は砂糖菓子を目指す蟻のように真っ直ぐ正門をくぐってゆく。

あの門をくぐれば今日もいつもと同じ校舎が見える。しかし、あの門を過ぎれば今日も何が起こるか分からない。

門の前で一瞬立ち止まったくるみの肩を励ますように優しく叩いた奈々瀬は「行こう」と耳元でささやいて促した。

そろそろゲームは動き出すだろう。

特進クラスの教室はくるみ達普通科とはフロアが違う。

一緒に階段を上がっていて三階でくるみと別れる時、彼女はどこか寂しそうな顔をしていた。心細そうと言った方が正確かもしれない。くるみは別れ際に細い声でこう言っていた。

じゃあまた昼休みにね、と。

各学年に二つずつある特進クラスの教室は四階に集められている。つまり四階には特進クラス以外の生徒はいない。

普通科の生徒はそんな四階の事を「天上界」と呼ぶらしいが、奈々瀬は自分が天上人のような存在だと思った事などは一度もない。だから嫌味に聞こえるのでその呼び方が好きではない。

四階に上がった途端に真面目そうな生徒しかいなくなるのは確かだ。他のフロアと雰囲気が違うというのは間違いない。

おはよう夏川さん。

廊下を歩いていると奈々瀬と同じ特進クラスの生徒達が上品な声

で朝のあいさつをしてくる。奈々瀬も「おはよう」と返す。奈々瀬はすれ違う生徒みなに声を掛けられていた。他学年の生徒まであいさつしてくる。

しかし全員が彼女の事を「夏川さん」と呼ぶ。

誰も「奈々瀬」とは呼んでくれない。

特進クラスで奈々瀬は浮いていた。

度のきつい眼鏡を掛けていて、趣味は読書、運動は苦手だが勉強はできる。それが普通科から見た特進クラスのイメージだった。実際そのイメージは的中していて、四階には絵に描いたような真面目少女がごろごろいる。

しかし奈々瀬はそのイメージに該当しない。

視力は両目とも2・0あるので当然眼鏡の世話になる事はない。本を読むのも好きだが、基本的に外に出て活動する方が好きだ。

奈々瀬は中学時代、陸上部に所属していて県大会でも好成績を残している。陸上以外でも、球技も器械体操も何でもそつなくこなす事が出来る。基本的な身体能力では同い年の男子の平均を超えるほどであった。

勉強が出来るという点においては奈々瀬も特進クラスの例に漏れていない。それどころか彼女の成績は学年でトップだった。

奈々瀬は浮いている。

クラスで奈々瀬は一人でいる事が多い。しかしそれは嫌われて避けられているのではなく、何でも出来る奈々瀬に皆近付き難いのだ。特進クラスの生徒達はいつも遠くから羨望の眼差しを向けている。

奈々瀬本人は勉強や運動が出来るからと言って気取ったりはしないのだが、どうしても周りは「特別な子」という目で見てくる。結果、奈々瀬とは皆一歩退いて接するようになっていた。彼女はそれがあまり好きではなかった。

特進クラスは「S?」と「S?」というクラス分けになっていて、奈々瀬はS?の象徴として他学年からも憧れられている。

しかし何も奈々瀬だけが抜けている訳ではない。一学期末は

学年トップを取った奈々瀬だったが、中間では二位だった。

一学期末で二位、中間で一位だったのが、紗季。

彼女と奈々瀬が常に一位二位争いをしている。あまり奈々瀬はこだわっていないようだが、紗季は何かと奈々瀬に張り合ってくる。

いつの間にか「S?の篠原紗季」「S?の夏川奈々瀬」という構図が完成していて、何かある度に比較されて話題になった。奈々瀬はあまり注目されても恥ずかしいので少し迷惑に思っていた。

紗季だけは彼女の事を「奈々瀬」と呼ぶ。紗季だけは奈々瀬を特別扱いしない。特進クラスに友達と呼べる者は紗季しかいなかった。教室に入り、自分の席に鞆を置いた奈々瀬。

近くの席でお喋りしていた三つ編みのクラスメイトが「おはよう」と声を掛けてきたので、奈々瀬もあいさつを返してにっこり笑った。もう一人のショートヘアの子も小さく手を振ってくる。

「ちよつと寒くなってきたね」

「うん。いよいよ夏も終わりって感じかな」

「確かにそんな感じ。夏川さんも風邪ひかないようにね」

「ありがとう」

何て無機質なのだろう。

何て形式的な会話なのだろう。

奈々瀬との会話はそれでお終い。三つ編みとショートヘアは再び自分達の会話に戻っていった。彼女達は昨日のテレビ番組の話をしているが、奈々瀬はその話題には入る事が出来ないらしい。奈々瀬が会話を許されているのはあいさつとお座なりの世間話だけ。本当にそれだけだった。

なぜなら奈々瀬はあくまでもS?の象徴だから。

象徴である彼女には人格を与えられていない。皆の中で奈々瀬に私的な事など存在しないのだ。奈々瀬という存在は崇拜すべき偶像だった。

奈々瀬は席に着いて鞆を開けた。一時間目の準備をしようと英文法の教科書を取り出している所で、彼女はぼつりと声を漏らした。

「あ、しまった…」

彼女が顔をしかめて紙をかき上げていると、隣の席にいたショートヘアが心配そうに声を掛けてきた。

「どうしたの？」

「いやあ、ノート持ってくるの忘れちゃったんだよね」

やっちゃったよ、と苦笑する奈々瀬を見て三つ編みが目を丸くしていた。

「へえ…夏川さんでも忘れ物する事あるんだね」

…あるよ、人間なんだから。

「じゃあ一枚あげるよ」

そう言っつて三つ編みは自分のノートのページの一枚破ろうと手を添えた。すると奈々瀬は慌てて「いいからいいから」とれを制した。「気持ち嬉しいんだけど、破ったらノートが解ほれちゃうじゃん。

それは流石に悪いよ。確か理科準備室に新品のルーズリーフ置きっぱなしだったから、ちよつとダツシユで取って来るわ」

奈々瀬は二人に両手のひらを向けて立ち上がった。

「いいの？」と三つ編み。

「気にしないで」

「何か困った事があつたらまたいつでも言っつてよ」とショートヘア。

「うん、ありがとう」

お決まりの締め言葉。毒にも薬にもならない言葉で彼女の会話は締め括られた。

やはり距離を感じる。

奈々瀬はせかせかと歩き始めた。

勉強出来る事は悪い事なのだろうか、運動神経が良いのも避けられる要素なのだろうか。もし自分も普通の女の子だったら、クラスの皆ももつと気軽に話しかけてくれるのだろうか。ぎこちなく視線を逸らされたりしないだろうか。

もし…普通だったら。

…普通って何だろう。

奈々瀬は普通という意味が分からなかった。皆と同じような物を好み、皆と同じような平均的な成績で、皆で同じルールを守り、皆と同じような人生を歩む。それが普通というものなのだろうか。そうだとすれば、奈々瀬は普通にはなれない。

今から五年前、中学一年の秋。彼女の身に起きた惨劇を目にした時から、奈々瀬は普通に生きられない運命になっていた。

奈々瀬は廊下ですれ違う生徒の顔をちらりと覗いてゆく。この紙町女子高校の、特に特進クラスの生徒は皆純粹そんな瞳をしている。汚い物や穢きたない物を一度も見た事のないような澄んだ瞳だ。まるで曇りのないガラスのようだ。

きつと「見た事」がないのだろう。しかしそれも当たり前だ。普通に生きていけば、滅多に目にするような事ではないのだから。

人が死ぬところなど…。

奈々瀬は普通に生きている。しかし奈々瀬の中での普通は他の人と比べて大きく歪んでしまっていた。

あの日から…。

階段を下りて、三階フロアの突き当りに理科準備室はある。三階を特進クラスの生徒が歩いていると目立つ。しかもそれが「S?の夏川奈々瀬」ならなおさらだ。無数の視線がちくちくと奈々瀬に突き刺さる。

普通科の生徒の視線は、特進クラスの控えめなそれとは違う。奈々瀬に向けられているのは純粹な好奇の視線だ。

足早に、半ば小走りに廊下を進んで、廊下突き当りにある理科準備室の扉を開いた。

ゲームが始まって以来、科学部同士で集まる事もなくなっていたので久しぶりに入る準備室だった。掃除をした日が最後だっただろうか。

外の世界から切り取られたように静かだ。

見慣れた準備室は整然としていて、三日前に整理整頓した時のままになっていた。カーテンを開きっぱなしの窓から射し込む朝日に、



きらきらと舞う埃が光っている。

だれも使わなくても埃は溜まるのか、いやむしろ誰も使わないからこそ埃が溜まっているのだろう。

…確かルーズリーフは。

奈々瀬は背伸びして本棚の一番上の段を調べている。並ぶ本の背を指先で触れながら探していくとルーズリーフを探していると直ぐに見つかった。フィルムに包まれたままのそれを取り出して、教室に戻ろうとする。

ちらりと部屋全体を見回した時、奈々瀬は微妙な違和感を覚えた。  
…何だろう、何か違う。

自分達が掃除した後、授業で理科室を使用したクラスは全学年で見てもなかった筈だ。つまり自分達科学部が最後にここに入った人物だという事になる。だから三日前、最後に視たこの部屋のレイアウトが変化する筈はない。

しかし妙な違和感がある。

ちらりと薬品棚に目を向けた奈々瀬は凍りついた。

…ここは私が掃除したから良く覚えてる。

硫酸、そして水銀。

その二つの瓶が、なくなっている。

二つとも劇薬だ。場合によっては人の命すら奪いかねない危険な薬品だ。三日前は確実にあったが、今はなくなっている。そんなに一気に使い切る薬品でもないのです、もしかすると誰かが持ち出した可能性もある。

自分以外の四人の顔が脳裏を過る。

四人の不敵な笑みを想像した瞬間、奈々瀬の心臓はばくんと鳴って跳ね上がった。もし科学部の誰かがそれらの薬品を持ち去っているのなら、このゲームで油断するとんでもない目に遭うかもしれない。

少なくとも薬品を持ち出した人物は、殺す気でゲームをしている。握りしめていたルーズリーフのフィルムが、いつの間にかくしゃ

くしゃによれてしまっている。その手にじつとりと汗をかいていた。そして一時間目の始業ベルが鳴り響いた。

午前の授業は特に問題なく終わった。

問題というのはもちろん授業内容が難しいなどという事ではない。誰からの攻撃を受ける事がなかったという意味で「問題」なかった。昼休みはくるみと一緒に昼食をする事になっていたので、約束通り学食の購買部の前で待っていると、彼女は人混みに流されるようにしてやって来た。

奈々瀬の姿を確認すると背の低いくるみはジャンプしながら手を振っている。奈々瀬も彼女に向かって手を振って応えた。

「遅いよ、くるみ！」

そう声を掛けると彼女はペットボトルを握りしめて一生懸命奈々瀬のもとに駆けてきた。その姿がまるで懐いたウサギのようでどこか微笑ましい。くるみは息を切らしながら奈々瀬の前に立った。ごめんごめん、と言い終わらない内にくるみはペットボトルに口を付ける。

すでに学食は込み合っていた。食券機には長蛇の列が出来ていてテーブルもほとんど埋まってしまっている。僅か五分出遅れただけでこの有り様だ。

奈々瀬は背伸びして奥の方まで見渡す。

「うわあ、混んでるね。中で食べたかったんだけど、これは中庭コースかな」

「ええ、そんなあ。私、完全にハンバーグランチのお腹になったのに」

遅れてきたのは誰かな、とくるみを睨むと彼女はおずおずと首を竦めた。

「じゃあおにぎりでもいいや……」

くるみは小さい身体をさらに小さくしてそう呟く。

誰が言い出した訳でもないのに、学食のテーブルは学年と学科別、

部活別に分かれていた。まるでそれぞれの縄張りが決まっているようだ。上級生になるほど奥のテーブルに座っている。

どうやら科学部の三年は自分達以外には誰もいないらしい。

いつもなら科学部五人で一番奥の円卓を囲んで昼休みが終わるギリギリまでお喋りしているのだが、それももう出来ないようだ。

…そうだ、みんな敵なんだ。

ゲームの緊迫感が彼女達の中を少しずつ裂いている。

奈々瀬は購買で玉子サンドとパックの牛乳を買い、くるみは梅のおにぎりを買ってから食堂のおばちゃんにウーロン茶を補充してもらっていた。

各々の昼食を持って中庭に出ると、昼休みはいつも賑わっている筈の中庭に全く人がいなかった。池で泳ぐ鯉以外に生命の気配がない。

「あれえ。誰もいないよ」

くるみは難しい顔をして中庭を見渡している。

「あー！」

くるみがベンチの横にある立札を指差した。それには「ハチに注意 近付かないように」と書いてある。

「なるほど、誰もいない訳だ」

ふと辺りを探すと隅にあるプレハブの物置の軒に大きな蜂の巣があり、その周りを数匹の蜂が飛び回っていた。もう夏が終わって蝶や蛾もあまり見なくなつたのに、彼らはせつせと巣を守ろうとしている。

生きようとしているのだ。

巣の下の地面には無数の蜂の死体が転がっている。彼らは食べ物の有る無しに関係なく、冬を越せない体の仕組みだというのに、それでもまだ生きようとしているのだ。

もしかすると、もう長く生きられない事は彼ら自身も良く分かっているのかもしれない。それでも必死にあがいて生きようとしている。

自らの運命に抗うように。

「場所変えよつか、刺されても嫌だし」

うん、と返事したくるみはいつの間にか奈々瀬の背後に回っていた。どうやら蜂が恐いらしい。

二人は中庭を後にして運動場脇のベンチまでやって来た。

ここにも誰もいない。どの時間帯でも校舎の影になって日の当たらないこの場所は心なしか他より肌寒いような気がした。昼休みの寂しい運動場には二人の足音以外には何の音もない。耳を澄ますと校舎から生徒の笑い声が仄かに聞こえる程度だ。先程の中庭よりもずっと寂しい。

奈々瀬は金網フェンスにもたれて座り、膝の上に玉子サンドと牛乳を置いた。彼女の隣にくるみもちよこんと腰掛ける。

ほとんど言葉を交わさないまま奈々瀬は玉子サンドの包みを剥がして一口齧ると、乏しい食感の後にマヨネーズの酸味がじわりと口の中に広がる。不味くはないが特別美味しいという訳でもない。値段相応の味だ。

「ところでさ、くるみもこのゲームに参加してるんだよね？」

そうだよ、と返事したくるみは大きく口を開けて梅のおにぎりを齧る。しかしおにぎりは、ネズミに齧られた程度ぐらいしか減っていない。もちろんおにぎりが大きいという事ではなく、彼女の口が小さいのだ。

「分かってるの？ じゃあ私も敵なんだよ」

「だから分かってるって」

無防備な表情でおにぎりを齧るくるみは、さも当然のように答える。彼女の小さな手の中でようやく梅が見えてきた。

あまりに警戒心がない彼女に奈々瀬は少し苛立った。

「じゃあ何で私と一緒にいられるのよ」

するとくるみは口唇の端にご飯粒を付けたまま、丸い目で不思議そうに奈々瀬を見ている。

「何でって、私と奈々瀬は昔から友達じゃん」

くるみは当然でしょうという顔を奈々瀬に向けている。

「アンタ、まさかそれだけの理由で……」

「そうだよ。だって奈々瀬とは幼稚園からずっと一緒でしょ。中学だって三年間ずっと同じクラスだった」

「まあそうだけど、さ」

奈々瀬は怪訝な顔でくるみを見詰めている。

それに対してくるみは相変わらず無害な笑顔でおにぎりを齧り、梅干しの酸っぱさに肩を震わせていた。彼女はせわしなくペットボトルのキャップを開けて、学食で補充してもらったばかりのウーロン茶を喉に流し込む。

そしてくるみは幸せな溜息を吐いた。

「私は奈々瀬と違って頭も良くないし運動神経もないけどさ、それでも奈々瀬は私と一緒にいてくれた。私はそれがすごいいいんだよ」

「何なのよ。急に……」

「中学の地区総合体育大会の時、奈々瀬はハードル走で優勝したよね。私、競技場まで一人で観に行ってたんだよ」

「マジで！」

奈々瀬の頬が少し赤らんだ。

「マジだよ。恥ずかしいから来ないで良いつて奈々瀬は言ってたけど、どうしても気になったからこっそり観に行っただ。他の中学のエースがいっぱい出てる中で奈々瀬はぶっちぎり一位でゴールしたんだよ。確か大会新記録だった。あの時の奈々瀬はホントに力ツコよかったなあ」

「やめてよ、照れ臭いから」

奈々瀬の手の中で玉子サンドが温かくなっていた。

「奈々瀬がカツコいいのはその時だけじゃないよ。小学校の運動会でも大活躍だし、私が男の子にチビって言われてからかわれてた時もいつも守ってくれた。奈々瀬は私の親友で、私の憧れ」

奈々瀬は私の正義のヒーローだよ。くるみはそう結んでまたおに

ぎりに口を付けた。いつの間にか彼女は半分以上食べてしまっていた。

いつの間にか自分の方が食べるのが遅くなっていると気付いた奈々瀬は残っていた玉子サンドを口に放り込んで咀嚼する。

「正義のヒーローって…。馬鹿の事言わないでよ」

…正義？

…私が一番似合わない言葉でしょ。

「だからゲーム中でも私は奈々瀬と一緒にいるつもりだよ。今回のゲームも私は奈々瀬が優勝すると思ってるしさ。奈々瀬が優勝するように協力するつもりだよ」

くるみは手に残ったおにぎりを一気に口に放り込んだ。それを胃に流し込もうとペットボトルのキャップを開けたが、彼女の小さな手からキャップが零れ落ちた。あっ、と声を漏らして前屈みになったくるみだったが、キャップは彼女から逃げるように地面を転がってゆく。

二人はキャップの行先を目で追ってゆく。ころころ転がるキャップはやがて誰かの足にぶつかって止まった。

奈々瀬はゆっくりと視線を上げてゆく。

そこに立っていたのは篠原紗季だった。

薄く微笑んだ紗季は音も無くゆっくりとした動作でキャップを拾い上げる。屈み込んだ動きに合わせて、彼女の長い黒髪がはらはらと肩から零れてゆく。

「紗季！」

奈々瀬は身構えた。彼女は蛇だ。紗季はこのゲームで最も危険になる人物だと奈々瀬は考えている。

紗季は下目遣いに二人を見比べた。

「やだなあ、そんなに警戒しなくても良いじゃん。私だってまだこのゲームの事は探り探りなんだからさ」

目を細めた紗季は拾ったキャップを差し出してくる。するとくるみが奪い取るようにしてキャップを取り返し、慌てて蓋を閉めた。

その態度に一瞬顔を歪めた紗季だったが、すぐに不敵な笑みに戻った。

「あら、つれないのね。くるみったら」

紗季はくるみの目をじっと見ている。

くるみは即座に紗季から距離を取って、奈々瀬の隣に戻ってきた。普段は楽観的なくなるみも、まるで蛇を恐れるネズミの本能のように、紗季の発する禍々しい瘴気のようなものに警戒したようだ。

奈々瀬も警戒態勢を取る。

「何の用なの…」

「用？ 別に何も無いけど。ちよっと見かけたから話し掛けただけ。友達なんだから別に普通じゃん。紗季はそう続けて口唇に人差し指を置いた。

「奈々瀬。アンタ楽しんでる？」

「何を？」

ゲームに決まってるでしょ、と答えた紗季は軽く両手を広げた。それは不吉をもたらす凶鳥が両翼を広げているようだ。

「それにしてもドキドキだよ。生きてるって感じを改めて実感するわ。準備室で例の紙切れを見付けてくれた奈々瀬には本当に感謝してるんだよ」

「何言ってるんだよお！」とくるみが言った。

「今アンタ達ご飯食べてたでしょ。美味しいよね、ご飯。私もポイズンガールを始めてからご飯が美味しいんだよ。お皿を見て、もしかしたらこの中に自分を死に追いやる程の毒を入れられてるかもって思いながら食べるでしょ」

恍惚の表情を浮かべる紗季は湿った舌で唇を舐める。

「もしかしたら私これで死んじゃうかもって考えながら口に運んでね、良く噛んでも何も変な味がしなかったとき、ああ私って生きてるんだって味がするんだ」

生命の味だよ、と紗季は強調した。

「生きてるって、ちよっと言い過ぎじゃないの」と奈々瀬は首を傾

げる。

すると紗季はさらに不思議そうな顔で奈々瀬達を見た。

「どうして？ みんなそういう覚悟でやってるんじゃないの？」

「覚悟って？」

「殺される覚悟じゃん」

紗季が言葉を発した瞬間、奈々瀬の背筋が凍った。

紗季は平然と言つてのけたが、冗談で言っている訳ではない。彼女は死を当然のように受け入れている。

「だってみんなである時書いた遺書ってそういう意味でしょ？ 今私達がやっているのは死を想定したゲームなんだよ」

そう言つて紗季は奈々瀬に顔を近付けた。紗季の顔は近くで見ても整つていて肌も陶器のようにきめ細かい。その綺麗さが今はどこか怖ろしげだ。

奈々瀬も一步も退かずに紗季の目を見据える。

「私はアンタと殺し合いをする為にゲームに参加したんじゃない」「確かに殺し合いが目的じゃないよ。でも結果的に死が付きまとうつて事なの。どんなスポーツでもそうでしょ。試合中でも練習中でも常に死は直ぐ隣り合わせ」

紗季は奈々瀬の目元に掛かった髪に息を吹きかけて、じつと瞳を覗き込んでくる。そしてゆっくりと身を引いた。

「これは非日常の環境の中で生命の大切さを再確認する為のゲームなの。その結果、誰かが死んじやっても仕方ない事なんだよ。私はみんなにもその大切さを味わつてほしい」

そこまで言つた紗季はくるみに視線を向ける。

「あと、やらなきゃ自分がやられる弱肉強食の自然の摂理もね。くるみもいつもみたいに逃げてるだけじゃ全員の餌食になっちゃうよ。くるみの身体がぴくりと引き攣る。彼女が警戒態勢を取つたのは隣に座っている奈々瀬にも分かった。

「二人は正義の味方って信じる？ 馬鹿馬鹿しいよね。この世には正義も悪もありやしないんだよ。あるのは強者と弱者の違いだけ」



そして紗季は口元だけで薄く笑う。

「ねえ奈々瀬。アンタは勝って強者として生を噛み締めたい？ それとも負けて弱者として生を惜しみたい？」

「はあ、ワケわかんないよ。」

そう言つて紗季を遮つたのはくるみだった。

「くるみ……」

奈々瀬が心配そうに彼女を窺う。

不愉快そうな顔をして思い切つて口を挟んだのは良いが、どうも落ち着かないようだ。紗季の発する緊張感に耐え切れなくなったのだらう。その証拠に彼女の呼吸は僅かに震えている。

「さ、さつきから黙つて聞いてたら意味わかんない事ばかり言っちゃつてさ。なにゲームにマジになつてんのよ。それに誰が餌食になるつて？」

刹那、顔を歪めた紗季だったが直ぐに穏やかな表情に戻ってくるみに答える。

「くるみは直ぐに降参しちゃいそうなんだけどねえ」

「しないよー！」

そう言い放つてくるみは少しだけ奈々瀬に身を寄せた。虚勢を張つていても内心では怯えているのが手に取るように分かる。恐らくそれは紗季にも伝わっているだらう。

「チビだからって馬鹿にするなつづのー！」

くるみは落ち着かない手つきでキャップを開けてウーロン茶をがぶ飲みした。彼女の喉が脈動する様子を紗季はじつと見ている。

またあの蛇のような目だ。

すると紗季はその目を細めた。

「ああ、そうそう。そう言えばさつき、くるみのキャップ拾つた時に殺鼠剤仕込んでおいたんだけど、大丈夫かな？」

紗季の顔が邪悪に歪む。

奈々瀬は弾かれたように立ち上がつてくるみのペットボトルを払い落とした。アスファルトの上に転がるボトルの口から、泡だった

茶色い水がとくとくと流れ出している。くるみはその場に蹲すまって酷むせく咽むせている。

「痛い！ 口がヒリヒリするよお！」

目に涙を浮かべるくるみは乱暴に口唇くちんを擦こする。

「吐き出しなさい！」

奈々瀬はくるみの背中を激しく擦こすって彼女に胃の中の物を吐かせ  
る。くるみは喉に指を突っ込んで今飲み込んだ毒物を吐き出そうと  
する。彼女の手は袖口まで涎よだれでべとべとに汚よごれていた。

愉快そうに二人を見下ろしている紗季を、奈々瀬は鋭く睨にらみつけ  
た。

「紗季！ アンタ何て事するのよ！」

取り乱した奈々瀬達を見ながら紗季はまるで絵本に出てくる悪い  
魔女のようにけらけらと笑っている。

「大丈夫大丈夫。本当は香水ちよつと振り掛けただけだから。死に  
はしないよ」

ちよつと苦かったかもしれないけどね、と言って紗季は両手のひ  
らを上に向けた。くるみはまだ少し咽むせながらハアハアと息を整えて  
いる。涙目になった彼女の口唇から涎よだれがつつと糸を引いて垂れ下が  
っている。

紗季がくるみの隣に屈み込むと、くるみは怯おそえたように身を引き  
攣くわらせた。そして紗季は愛おしそうにくるみのツインテールに指を  
絡める。

「そんなに怖がらないでよ」

紗季はくるみの口唇に人差し指をあてて、べとべとの涎よだれを拭ぬって  
やった。

「くるみにも分かったでしょ。ね、美味しいでしょ、生きてるって  
事は。これからはくるみの大好きなウーロン茶がもつと美味しく感  
じられるんだよ」

紗季！ と奈々瀬は叫んだ。

すると紗季はゆっくりと立ち上がって、くるみの唾液が絡みつい

た人差し指を口に含んで、それを味わうように舌で撫でた。

その様を見た奈々瀬は金縛りにあったように動けなくなった。

…紗季は、異常だ。

「勝つ事だけが、私は生きてるんだって実感させてくれる。勝たなきや私は死んでるのと一緒なのよ」

紗季は自分とくるみの唾液が混じった舌を奈々瀬に見せつけて、恍惚とした表情を浮かべる。

「奈々瀬。私はあなたに勝って生命を味わいたい。極上の生命をね…」

そう言い残して毒蛇は去って行った。

運動場脇の寂しい空間にはくるみのえづく音だけが弱々しく聞こえている。奈々瀬は紗季の背中に目を向けながら軽く口唇を噛んだ。

…死ぬ覚悟が出来てるんだったら、本当に殺してあげようか？

…ついでに。

蝉が鳴いている。

悟は小豆色のドアの前に立っていた。

薄いドアの向こうから数人の声が聞こえる。大人にしては甲高く、  
どうやら中学生ぐらいの少年の声のようだ。

その声は愉快に笑っている。

その声は言う。

うげえ、ホントに取れたよ！

えっぐいなあ、きゃはは！

蝉が鳴いている。

少年達の声は楽しげで、テレビゲームでもしているかのようだった。夕闇に包まれた閑静な住宅地にその笑い声が響く。

けらけら、と。

吐き気がする。ドアの隙間から生臭い臭いが漏れ出してくるような気がした。悟は息を飲んで立ち尽くした。

…この中で、何が。

蝉が鳴いている。

こみ上げてくる胃酸を無理矢理に嚥下して額から垂れる冷や汗を拭う。意を決した悟はインターフォンを鳴らす。すると少年達の楽しげな声で賑わっていたドアの向こうは、まるで蝋燭の火が消えるように静まり返った。

悟はドアを叩いて叫ぶ。

警察だ！ ここを開きなさい！

すると、ごそごそと何かが動くような音が聞こえたが直ぐにまた静まった。ドアを隔ててお互いの緊張感が高まる。

階段を上ってくる音がした。大柄な制服警官が階段を駆け上がったきたのだ。警官は悟の顔を認めるや否や直ぐに表札の部屋番号を確認した。

笹中。ここか、苦情があつた部屋は。

はい。でも何か様子がおかしいんです。

悟はもう一度インターフォンを鳴らしたが、今度は一切反応がない。

蝉が鳴いている。

留守じゃないのか？

いえ。先輩が来る前は中で子供の声が出ていたんです。一度僕がインターフォンを押してからコレですよ。

悟は憎々しげにドアを睨んで溜息を吐いた。

その時、部屋の中からボトリと床に物を落とす音が聞こえ、続いて「やべっ」という声があった。少年の声だ。

居留守使つてやがったのか。

舌打ちをした先輩は激しくドアを叩く。

警察だ！ いるんだつたら開けなさい。お宅の部屋がいつもうるさいって苦情が出てるんですよ！

反応はない。

このまま居留守を使つて出て来ないつもりだろう。悟は諦め半分にドアノブを回してみる。

すると、鍵が開いていた。

悟はゆっくりとドアを引く。ぎいぎいと錆びた音を立ててドアが開くと、凝っていた空気が一気に外に逃げ出してきた。

食べ物が腐つたような臭いがする。

ゆっくりとスローモーションのようにドアが開き、外の夕日が薄暗い部屋の中流れ込んだ。汚れた畳の上に散らかるテレビゲーム機や漫画。そして三人の少年の姿が暗闇の中に浮かび上がってくる。黒い世界が徐々に露わになる。

悟は目を見開いて固まった。

蝉が鳴いている。

奥に座っている二人は無表情に、無感情に悟を見ている。そして一番手前で玄関に背を向けて立っている少年は右手に黒く汚れた糸のこぎ

鋸を握っていて…。

左手には…左腕を握っていた。

手前の少年は静かに振り返り、他の少年と同じような瞳を悟に向けた。彼は切断面からだらだらと茶色い液体を垂れ流す腕を持って溜息を吐いた。

戦慄する悟はおそろおそろ少年の足元に目を遣った。畳の上に青いビニールプールが広がっている。その中に肌の変色した幼い子供が打ち捨てられたように全裸で横たわっていた。

恐らく男の子だろう。げっそり痩せて手足もマッチ棒のように細く、全身に青痣と火傷痕がある。

そして左腕がない。

あ、あ…。

悟は震えて声も出せない。

その代りに、蝉が鳴いている。

先輩も悟と同じようにただ立ち尽くしているだけで、部屋の中に広がる異世界を見詰めている事しか出来ないようだった。すると手前にいた少年が左腕の断面を眺めながら、困った顔をして鼻で笑った。

見つかつちやっとなあ。

少年はけらけらと無邪気に笑い出す。すると他の二人も釣られて笑い出した。惨殺死体を前にして無邪気に笑う少年達の姿はまさに異常だった。

ホント、もうちょっとで上手く隠せたのに。

でも実験成功したんだし良いんじゃないね？

まるでテレビゲームで負けた時程度の軽さだ。彼らの清々しい表情には全く罪の意識はない。

悟の手がぶるぶると震える、歯もがちがちと鳴る。

…悪だ。

…醜い悪だ。

胸の中にどす黒い憎しみの水が溢れ返る。悪だ、こいつら全員悪

だ。生かしておく訳にはいかない。今すぐ退治しなければ。

殺せ、殺せ、殺せ。

クソガキ共があ！

金縛りから解き放たれた悟は咄嗟にガンホルダーに手を掛けて拳銃を引き抜いた。悟の怒声にたじろいで笑うのを止めた子供達はびっくりと肩を引き攣らす。

きつと今も、罪の意識を感じたから怯えたのではない。ただ悟の怒鳴り声が恐くて怯えたのだ。彼らに怒りは微塵も伝わっていない。悟は糸鋸の少年に銃口を向けた。

笹中あ！

怒りに身を任せる悟を、先輩が体を張って押さえ込んで手から拳銃を奪い取った。それでも悟は獰猛な獣のように呻って少年達に飛びかかるうとしている。

それを見ていた少年達は引き攣った笑みを浮かべている。

大人って馬鹿だねえ、彼らの光を宿さない冷めた目はそう言っていた。

やめる笹中、落ち着け！ 今、署から応援を呼んだから俺達はここで見張ってるだけで良いんだ。だから余計な事はするな！

悟はそれでも暴れ続ける。そして悟は目を剥いて少年達を指差す。お前ら自分が子供だからって何でも許されると思ってたんだろ。

ふざけんな、僕が絶対に許さないからな。お前らみたいな悪者こそ死刑台に送られるべきなんだよ！ そうだ死刑だ！ お前ら全員死刑だ！

死刑だ！ と声を嚔らして叫ぶ悟を先輩が更に強い力で抑える。

それでも法律がお前らを守るなら、僕がお前らを殺してやる…。いい加減にしる笹中！

先輩大きな拳が悟の頬に叩き込まれた。あまりの衝撃に意識が飛びそうになった悟だったが真っ赤に充血した目で少年達を睨んで叫ぶ。

お前らなんか地獄へ落ちてしまえ！

蝉が鳴いていた。

歪いびつな月は高く昇る。

息を切らず悟は本能的に人気のない通りを選び、気が付けば導かれるようにして川沿いの堤防を歩いていた。額に汗を滲ませながら、右手に革靴を提げて裸足のまま砂利道をとぼとぼと歩き続ける。

青白い月明かりが眩しい。

自分の姿が照らされるのを嫌った悟は月から顔を背け、堤防を下って河原を歩くようにした。湿った土が素足に伝わる。気持ち悪い。目の前には彼岸花の群生地が広がっていた。

…ああ、もう秋なんだな。

こんな時になって初めて季節の移り変わりを感じた。月光に照らされた赤い花の群れが悟を誘っている。

膝の高さまで伸びた彼岸花達をかき分けながら悟は歩いた。

見渡す限りの赤の真ん中に立つてぼんやりと夜空を見上げた悟はポケットから携帯電話を取り出す。七件の着信があり、その内六件は香那からでもう一件は知らない番号からだった。恐らく自分を追う警察からだろう。

市街地とを結ぶ紙町大橋の下に身を隠すように腰を下ろした悟。

コンクリートが冷たい。品のない落書きだらけの暗い橋の下で悟は膝を抱えている。日の当たらないこの空間は悪がいるべき場所だ。悟は頭を掻きむしった。

どうして僕はこんな場所にいるのだろう。

悟は煙草に火を点けてから今までの経緯を反芻した。殺人犯として自分が追われているのは鮫島を殺害してしまったからだ。鮫島を殺したのは、彼が自分を脅迫してきて香那にまで手を出されそうだったから。鮫島が脅迫してきたのは、自分が轢き逃げをしたのを見られたから。



結局は自らの過ちの所為だ。

…やはり僕は、悪なのか。

今の自分にこの薄汚い橋の下が似合っているような気がして吐き気がした。今の自分はどんな顔をしているのだろう。見たくはなかったが知りたかった。

その時、悟の携帯電話が振動した。

突然の事に驚き、慌てて青白く光るディスプレイを確認すると電話が掛かってきている。発信先は香那からだった。

煙草の火をもみ消して受話ボタンを押すと、愛おしい声が悟の名前を呼んだ。

『悟君？ あ、やっと繋がった。今まで何してたの』

いや別に、と悟は口籠った。電話の向こうで、怪訝な顔で首を傾げている香那の姿が容易に想像出来る。

『それよりさ、さっきの電話何だったの。今日の悟君ちょっと変だよ』

「いや、何ていうか、その…急に言いたくなってるさ」

愛してるってね、と悟が言うと電話口の向こうで香那のクスツと笑う声が聞こえた。声の感じで分かる。彼女は今ベッドに寝転がっているのだろう。二人並んで寝ていた時と同じ質の声だ。

やっぱり変なの。そう言って香那はまた吹き出した。悟も同じように「変だろ」と言って笑った。

『もう家にいるの？』

悟が答えるまで少し間が空いた。

「まあ、ちよつと外に出てるよ」

そうなんだ。そう答えると香那は黙り込んだ。沈黙を埋めるように、肌寒い風が河原に吹き抜けて彼岸花達を揺らす。

『もしかして、私に隠し事してない？』

「ごめん、ちよつとだけしてるかな…」

悟は小さく苦笑する。

『悟君の事だから浮気なんかしないと思うからまあいいか。コソコ

ソされるよりそうやって堂々と隠し事される方が気持ち良いよ』

「おいおい、堂々と隠し事って何だよ」と悟は顔をしかめた。香那はこうして時々変な言い回しを使う。

『堂々と隠し事：確かに変だね』

香那は電話の向こうでうんうんと頷いているのだろう。その様子を想像して悟の胸は温かくなった。確かな日常がここにはある。しかしこの日常にも、もう別れを告げなくてはならない。そう思うと言葉が続かなかった。

『何か言いたい事があつたんじゃないの？』

黙り込んでいた悟を促すように香那が問い掛ける。

「あはは、やっぱり香那は鋭いな」

悟君の考えてる事なら九割は分かるよ、と香那は言う。

…言いたくない。

悟の頭にある言葉を口にしてしまうと、いつも通りの生活が更に遠い所へ行ってしまう事になる。それでも言わなければならぬ。

「あの、さ。実は…しばらく会えなくなる、かもしれない…」

沈黙。

黙り込んだ香那が何を思っているのか悟には分からない。怒っているのか、驚いているのか、それとも悲しんでいるのか。今回はやはり彼女の表情を想像できない。風に吹かれた河原の草がざわめき悟の胸を騒がせる。

『ああ、何となくそんな気がしてたんだ』

香那は溜息を漏らした。

しかし怒っているようでも呆れているようでもない。彼女の真意は読み取れないものの悟は少し安心した。泣かれるのが一番辛い。

「理由はあんまり聞いてほしくないんだけどさ、決して香那の事が嫌いになっちゃったわけじゃないよ」

『分かってるよ、そんな事ぐらい』

彼女はいつも通りの口調で言った。そのいつも通りが悟にとっては愛おしかった。

「電話もメールもしばらく出来なくなるかもしれない。また落ち着いたらこつちから連絡するよ」

『分かった。待ってるよ悟君』

「迷惑ばかりかけてごめん。今度美味しいパスタでも食べに行こう…」

愛してる。

最後に二人は同時に言った、まるで合言葉のように。

闇にも目が慣れてきた。

月明かりが眩しいくらいだ。

携帯電話をしまった悟は身体に破損個所が無いか確認する。二階から飛び降りた上に、素足のままここまで駆けてきたのだから、知らない内にどこか怪我をしている可能性も十分ある。

怪我があるとしたら足だろう。

ぼろぼろに破れた靴下を脱いで両足を確認すると、案の定ガラスや小石が食い込んでズタズタに切れていた。とりあえず突き刺さっていた異物はすべて指で取り除いたが、赤黒い血液がじわじわと滲んでいる。放っておいて化膿してしまつては厄介なので直ぐにでも消毒する必要がある。

靴下の汚れていない部分で血を拭って、形だけの処置は施しておいた。

ジャケットとスラックスのポケットを探つて持ち物を確認する。

家に帰ってきたままの格好で飛び出したのでろくな物が入っていない。

財布の中には一万円札が二枚。あと使えそうな物は銀行のキャッシュカードくらいだ。確か口座には八万円程残っている。ジャケットの胸ポケットには煙草とライター、そして携帯電話と仕用の名刺。キャッシュカードや携帯電話は使えば自分の位置が特定されてしまう。使えそうな物どころか、持っていてはまずい物が多い。

悟は血の滲んだ足で無理矢理革靴を履いて重い腰を上げた。

遠くでパトカーのサイレンが聞こえる。自分を追ってきているのだろうか。念入りに辺りを確認しながら堤防の上に登った。

これからの生活の準備をしなければならぬ。

橋の近くにあったコンビニに入った悟は電燈の明るさに目を細める。店内に設置された監視カメラがじろじろと視ている。一人暮らしの悟にとつて親しみ深いコンビニが、こんなにも居心地が悪いものになるとは夢にも思わなかった。

カメラから顔を背けるようにして店内を進み、ATMで口座にあるだけの現金を引き出した。これで手持ちの金は十万円。これだけあれば贅沢しなければ逃亡資金として一か月は持つかもしれない。

次に新しい靴下と包帯と消毒液、それと菓子パンを棚から取ってレジに並ぶ。いらっしやいませと形式的に言つて客の顔も見ようとしない無愛想なバイトがレジを打っていたが、逆に今はそんな店員の方が都合が良かった。

トイレ借りて良いですか。そう悟が言つと店員は「どうぞ」と愛想なくトイレの方を指差した。

トイレに監視カメラが無い事を確認し、個室の鍵をかけた悟は水道で足を洗つて買ったばかりの消毒液で傷口を念入りに消毒する。トイレットペーパーで血と泥の混じつた消毒液を拭き取つて新しい靴下を履いた。こまめに消毒して通気性を保つていればその内傷も塞がるだろう。

他に怪我をした箇所がないかと鏡に向かつて改めて確認する。

明るい所で見るとジャケットが随分汚れている事に気が付いた。脱いで確認すると幸い破れはなかったが、所々埃ほこや砂が付いて白く汚れている。汚いジャケットを着ていては逆に目立ってしまう。悟はジャケットの汚れを手で払い、落ちにくい所は軽く水を付けて拭き取った。

綺麗になつたジャケットを羽織り直して再び鏡に向かう。

他に汚れや怪我はないかを探していたが、一番変わった部分は自身の顔だった。ファッションに無頓着な悟は普段から鏡を見る事が

少ないのだが、流石にこの変化には気が付いた。

目は落ち窪んで頬も少しこけたような気がする。老けた、痩せた、そのどちらとも言えない。とにかくこの二日で急激に顔立ちが変わっていた。何より大きな変化は瞳から光がなくなっている事だ。

…誰だよ、お前。

洗面台に手を突いた悟は力なく笑った。すると鏡の中の男も同じように笑う。それで、ああ自分なのだとな得する。

あまりの変化に悟自身も鏡の中の人物が誰なのか直ぐに理解できなかった。少なくとも、どこからどう見ても正義の味方には見えな事は確かだ。

ありがとうございますと言われる事なく悟はコンビニを出る。

…これからどうしよう。

まだ遠くでサイレンが聞こえる。悟は逃げるように元いた川の方へ歩いてゆく。暗い方暗い方へと歩いてゆく。

夜の紙町大橋は車通りも少ない。

行くあてはないが、今すべき事は一つ。一刻も早く自分が笹中悟であるという事を捨てなければならぬ。

悟は橋の上から免許証の入った財布と携帯電話を川に投げ捨てた。これで自分が笹中悟と証明するものはない。

河原から一面の真っ赤な彼岸花がこちらに向かって手を振っている。彼らは笹中悟を弔う花だ。

…笹中悟はもうこの世にいない。

どこか遠くへ逃げよう。

悟は一人川面を見詰めていた。反射した青い月がゆらゆらと形を歪めて浮かび漂っている。悟はコンビニで買った菓子パンを齧った。安っぽい蔓ジャムとマーガリンの油っこい味が口の中に広がる。味などどうでも良い。ただ、動ける程度に腹を満たせば良い。

ふと東北の山奥へ逃げようかと思ったが、以前テレビで「犯罪者は北に逃げる傾向がある」と言っていたのを思い出して却下した。逆に南西諸島の方へフェリーで行こうかと考えたが、それ程の資金

もない。

菓子パンを口の中に放り込んで包み紙をポケットに入れる。

腕時計を見ると時間は十時を回った所だった。まだ十分電車も動いている時間だ。早く行先を決めてしまった方が得策だ、と考えたが直ぐに思い止まった。

恐らく駅には警察が張っている筈だ。だからと言って一旦戻って車を取りに行くのもあり得ない。それこそ家の周りには厳戒態勢が敷かれているだろうし、仮に上手く車に乗れたとしても周辺の道路には検問が設けられている可能性が高い。交通機関を使つての移動はあまりに危険過ぎる。

それでもいつまでも橋の下に隠れている訳にもいかない。こんな所にいるのを見つかれば間違いなく職務質問をされる。

それで、お終い。

それならば人の中に身を隠して様子を見れば良い。悟はゆっくりと川の向こう岸の方に目を向ける。もう夜も更け始めているのにも関わらず、橋の向こうはぼんやりと明るかった。

橋を渡れば夜も眠らない繁華街。

木の葉を隠すなら森の中。下手に遠くへ行くよりも多勢の中に隠れてしまう方が安全だと判断した悟は誘われるように橋を渡り、夜の繁華街にやって来た。

仕事用のスーツで飛び出してきたのは正解だった。同じような服装をした同じような年代の人間が大勢いるおかげで悟の存在も漠としている。森の中で迷彩服を着ているように、夜の街で黒い色のスーツを着ている事は有効だった。

自分が生活していた住宅地とはまるで別世界のような夜の歓楽街。夜でも明るいネオンの街を悟は顔をしかめながら夜の街を歩く。

酔ったサラリーマンの上品な叫び声、コンビニの前にたむろする家出少女、性風俗のキャッチ、道の真ん中を闊歩するヤクザ風の男達。

…悪の巣窟だ。

悟は街自体に嫌悪感を覚えた。どうしてこの街には悪が堂々としているのだろう。悪というものは本来、正義に怯えてびくびくしながら生きている害虫のようなものではないのだろうか。

この街では悪が当たり前のように存在する。

どんな人間でも容易に受け入れてくれる腐った街。そんな中でも悟は肩身の狭い思いをしていた。

この中で、人を殺した事のある者は何人いるだろうか。

悟は肩を落として眠らない街を歩く。途中、風俗の案内所の前を通ると、キャッチにしつこく声を掛けられたが無愛想に無視して通り過ぎた。その度に舌打ちされる。いちいち不愉快な街だ。

この街は自分には合わない。品のない連中に声を掛けられるのが煩わしくなって人通りのない路地に出た。そこはさらに深い暗黒に満ちていた。

街灯もない汚く細い道にはゴミが散乱している。雑居ビルがひしめき合い、壁には刺青スタジオや脱法ドラッグの張り紙がべたべたと貼られていた。雑居ビルのネオンサインには風俗の看板が並んでいる。どれも非常に黒に近いグレーの匂いがした。

時々すれ違ふ人間もまともな者がいない。ゴミ袋かと思って良く見たらホームレスだったり、酒の瓶を持ったアジア系外国人の二人組がたむろしていたり、大通りより悪の匂いがさらに増している。

気分が悪くなった悟は道の脇に唾を吐いた。

「なあ、背広の兄ちゃん」

黒塗りのワゴン車の隣を通り過ぎた時、背後から声を掛けられた。最初は無視していたが、続けて「アンタだよ、アンタ」と投げ掛けられた。

振り返るとガラスの悪そうな若者がワゴン車から降りてきた。悟と同年か少し年下ぐらいだろう。だぼだぼの上下セットアップの黒いジャージを着ているその男は誰がどう見ても悪人だった。

悟は反射的に身構える。

「おいおい、そんな恐い顔すんなよ兄ちゃん」

妙に友好的な笑顔で男は近付いてくる。馴れ馴れしく肩を組んできた男は「何探してんだよ」と言った。

「探してるって、何の事ですか？」

「隠さなくって良いんだぜ。この時間こんなところ歩いてるって事はコイツを買いに来たんだろ？」

男の口からは仄かに大麻の匂いがする。そして男はポケットから錠剤の五粒入ったジップロックを取り出した。

…ドラッグか。

「最近じゃ高校生だつて使ってるけど、コイツはそんな安モンじゃねえよ。ブチ上がるぜ。女に飲ませてセックスするのもアリだ。今日は特別にトモダチ価格で安くしとくよ」

男はにやにや笑いながら悟の目を凝視している。

…誰が友達だよ。ふざけるな。

「悪いけど興味ありません」

悟は男の腕をすり抜けて立ち去ろうとする。しかし「まあそんな事言うなって」と男は悟の肩を掴んだ。

「じゃあ大麻とかはどうだ。こつちもなかなか上物だぞ」

…悪だ。

なぜ自分がこんな人間と言葉を交わさなければならぬんだ。悟の胸の中で正義の血が拒絶反応を示し出す。

「要らないって」

悟は男を突き飛ばした。男はワゴン車に背中をぶつける。すると一瞬の内に男の形相が怒りに染まった。

「おいコラ、調子乗んなよ」

男は太い腕で悟の胸ぐらを掴む。それを合図にワゴン車のドアが開いて、同じような格好をしたガラの悪い男がもう一人降りてきた。悟はそのままワゴン車のボディに押し付けられて二人の男に囲まれた。

「ナメたマネしてくれてんじゃないぞ。事務所行くかオイ」

暴力団と思しき組織名を口にしたが、悟は知らない。どうやら彼



らの背後には暴力団関係者が付いているようだ。

群れなければ何も出来ない連中。

悪は必ず群れを作りたがる。

やはりこの世界には、悪が多過ぎる。

「害虫が…」

ぼつりと呟いた悟は男達が反応を見せる前に相手の腕を振り払い、怯んだ黒ジャージの男の鳩尾みそおちに鋭い前蹴りを突き刺した。

呼吸が止まり悲鳴さえ上げられない男は目を見開いて腰を曲げる。悟は前に一步踏み込んですかさず顎に膝を見舞い男の顔をかち上げた。苦しげに呻いた男は後ろにのけ反って顔を押しさえる。

もう一人の男が反応する前に、悟は素早く体を回転させて男の側頭部に後ろ回し蹴りを叩き込んだ。

遠心力の乗った蹴りをまともに受けた黒ジャージの男は後ろの壁に背中を打ち付けて、そのまま崩れ落ちて気を失った。

ゆっくりと足を引き戻して体勢を整えた悟は深く呼吸をついた。

「お前、ぶつ殺すぞ！」

ようやく動き出したもう一人は懐からナイフを取り出して悟の首元に突きつけた。その切っ先は弱々しく震えている。

「殺す？ そつか、僕を殺すんだな」

悟は一切身じろぎしない。

「こんなものを突き付けて殺すなんて言うって事は、逆に殺される覚悟もあるって事だよな」

悟は震えるナイフの刃を左手で掴んで男の目を真っ直ぐに見詰める。悟の手のひらからひたひたと血が流れる。

「試しに僕に殺されてみるか？」

薄く笑った悟の顔を見て男はみるみる内に青ざめてゆく。

今の悟の表情は、彼が子供の頃に憧れた正義のヒーローとは程遠い。怯えた男はナイフを手放してその場にへたり込んだ。そして化け物を見るような目で悟を見上げて震えていた。

「ホント、下らないよ」

男の足元にナイフを投げ捨て、悟は立ち去る。

悟は歩きながらハンカチで血を拭う。

…出来るだけ目立った事はしたくなかったのに。

近くにあつた寂しげな駐車場に身を潜めて、出来たばかりの切り傷の治療を始める。幸いさつきコンビニで買った消毒液と包帯も残っていた。

傷口を確認すると、出血の量の割には思ったよりも傷は深くなかった。消毒して清潔にしておくで直ぐに傷は塞がるだろう。

すると駐車場の前を巡回している制服警官の姿が目についた。

…ヤバイ！

悟は素早く身を屈めて車の陰に隠れる。息を潜めて警官が立ち去るのを待つ。しばらくして人の気配がなくなると恐る恐る顔を上げた。

悪はこの街に溢れているのに、どうして僕だけがコソコソしなければいけないのだろうか。悟は溜息を吐いた。

僕は悪じゃないのに。

いつまでこんな事を続ければ良いんだろう。

…香那に会いたい。

彼女の顔を思い出した悟は頭を抱えて少しだけ泣いた。

手のひらから流れる血は手首まで滴っていた。腕時計を外して流れた血をハンカチでごしごしと拭き取る。いつの間にかハンカチは悟の血で真っ赤になっていた。

「あー。こんな所にいた」

屈み込んでいる悟の頭上で軽い声があった。男の声だ。不意に声を掛けられた悟は身を引き攣らせる。冷たい汗が背中に滲んだ。

警察か。

そうだとしたらお終いだ。

恐る恐る声の主の足元に目を配る。革のブーツにブラックデニム。どうやら警察ではないようだ。しかしまだ警戒を解く訳にはいかな

い。

ゆっくりと視線を這わせてゆく。黒いライダーズジャケットを気怠く着崩した長髪の若い男が人懐っこい笑顔を見せていた。彼は夜の街がよく似合っている。

「飲みなよ」

男は缶コーヒーを悟に投げ渡した。悟は反射的に手を構えて受け取った。温かい缶が悟の傷に当たる。

「おっとおめんよ。そう言えば怪我してたよな、手」

にこにこ柔らかな表情のまま男は悟の隣に屈み込んで、自分の缶コーヒーを開けて一口すすする。そして男は、悟も飲むように顎で缶を指し示す。悟は難渋を示しながらも小さく頷いて飲み口を開けた。悟はじろじろと男の全身を見回している。視線に気付いた男が「ん？」と言って悟の方を見たので、悟は意識して視線を外した。

男は身を乗り出して悟の顔を覗く。

「見たぜえ。アンタ、ケンカめっちゃ強いんじゃないか。あんな三段蹴り見た事ねえよ。こっちまで興奮しちゃってさあ、それで付いてきたってワケ」

悟は溜息を吐いた。

「見てたんですか…」

まあね、とおどける男は少年のような表情になっている。

「それよりさっきの蹴りって空手？ キックボクシング？ めっちゃめっちゃカッコイイじゃん。俺にも教えてよ」

悟は苦笑して誤魔化した。それでも男は気にする事無く続ける。

「実はさ、俺もアイツら気に入らなかつたんだわ。不健康な薬ばらまいて金儲けするなんてクソだからな」

男は快活に笑う。

「俺な、タカトって言うんだ。ツシマタカト」

九州の対馬に尊敬する人と男は説明した。対馬<sup>つしま</sup>尊人<sup>たかと</sup>。

「ところでアンタの名前は？」

悟は「笹中悟」と答えそうになったが口籠った。笹中悟は死んだ

のだ。今の自分に名前などない。黙り込む悟を見て尊人は察したように頷く。

「なるほどね。ワケありって事か…」

ますます気に入ってたぜ、と言って尊人は嬉しそうにしている。何が良いのかよく分からないが悟も苦笑して彼に合わせておいた。

「なあ、ナナシさん」

「ナナシ？」

「アンタが名乗らないんだから名無しって呼ぶしかねえじゃん。仕方ねえよ。それよりさ、腹減ってるだろ。今日は気分が良いからゴってやるよ」

確かに腹は減っている。

しかし逃亡生活である身であり人と関わるべきではない。いつ尽きるとも分からない資金の中、食事を奢って貰えるのは魅力的だが顔を知られてしまうというリスクは大きい。

「いや、いいよ。コーヒーだけで十分だ」

すると尊人の表情はしょんぼりと萎れた。まるで子供の用に表情が豊かな男だ。悟からしても不良っぽい見た目はともかくとしてこの男の第一印象は悪くないし、出会い方が違えばもう少し仲良くしても良かったと思う。

「遠慮すんなよ、全部俺が出すから軽く飲もうぜ」

「いやあ、そんな事してくれなくても大丈夫だよ…」

マジかよ、と駄々を捏ねるように長い髪を掻き毟る尊人。その左手首に何か文字が覗いた、マジックで書いたような記号が。

「ちよつと君！」

悟は尊人の左手を掴んで引っ張った。「わわわ、いきなり何すんだよ！」と尊人は驚いている。そして尊人のライダーズジャケットの袖を捲る。

「これは…」

尊人の左手首内側にはアルファベットと数字が印字されていた。

『D-00021』

…この番号は、もしかして…。

「あちゃー。見られちゃったね」

不審そうな顔をする悟に足して、悟は笑って誤魔化そうとする。

「仕方ねえ。じゃあ俺のヒミツを教えてやるから、気に入ったら仲良くなってくれよな」立ち上がった尊人はポケットからおもむろに安全ピンを取り出した。露わにした針先が月の光を反射させている。

そして尊人は大きく口を開いたかと思うと、自らの舌に針を突き刺した。悟は咄嗟に顔を背ける。突き出した舌は確かに安全ピンが貫通している。それでも尊人は呼吸を乱すどころか、笑顔すら絶やさずにいる。

尊人が安全ピンを引き抜くと、刺さっていた穴からじわりと赤い血が滲んだ。尊人は眉を寄せて赤い唾を地面に吐き捨てる。

「実は俺、痛みを感じない体なんだよね」

無敵のスーパーマンさ、と尊人は歯を見せて笑った。その歯にも少し血が付いていて痛々しい。

…この症状は。

悟は立ち上がって彼の目をじつと見る。

「やっぱり少しお腹減ったかな。」

すると尊人はガッツポーズをして喜んだ。

「それじゃ俺のとっておきの店にごあんなーい！」

尊人は半ば強引に悟と肩を組んで元気な声を上げた。

…痛みを感じなくなる体。

…そしてあの手首に印字されたナンバー。

悟にはその両方に心当たりがあった。

二人はネオンの街に溶けてゆく。

毒物。

法医学によると毒物とは、生体に摂取された時に化学的作用によ

って健康を害し、あるいは死に至らしめる化学物質と定義されている。

毒の代表格である青酸カリでなくとも、海水をがぶ飲みすれば塩分過剰摂取で死に至るし、ウイスキーなどの度数の高い酒を一気飲みして急性アルコール中毒で死亡する例も良くある事だ。

つまり量によってはあらゆる物質が毒物になる。

生体に影響を与えるという点では医薬品も十分に毒になる。「どれだけ飲んでも死なない物は薬と呼べない」と提唱する学者もいるぐらいだ。

例えば市販されている風邪薬でもそうだ。井ぶり一杯分も飲めば含有されている睡眠促進成分の影響で死に至る。これがいわゆる睡眠薬自殺の方法だ。ただし人体は悪影響を及ぼす異物を反射的に体外へ押し出そうとするので、睡眠薬で自殺する場合は薬品に蜂蜜やヨーグルトを混ぜて消化器に馴染み易くする必要がある。

「ホント、何でもある部屋だよ」

奈々瀬は読み終わった薬物関連の本を本棚に戻した。

昼休み。学食でいつも馴染みの玉子サンドを買ってきた奈々瀬は一人で理科準備室に籠っていた。

「要するに分量次第で準備室にあるような薬品でも危険ってワケだ

……」

薬品棚には教科書にもよく載っている薬品が並んでいる。比較的危険な硫酸と水銀は既に何者かに持ち去られているのだが、それ以外の薬品でも危険なものも十分にある。例えば硝酸は銅を溶かしてしまう程の強酸性を持っているし、硫黄も農薬に使われているのだから気体になると危険な筈だ。

学食の前にある自動販売機で買った缶紅茶を開けて喉を潤す。

ほぼ砂糖の味しかないようなロイヤルミルクティーだが、奈々瀬はまだもう少し甘いぐらいが好みだった。

奈々瀬は温まったスチールの缶から口唇を離した。

中世のヨーロツパでは葡萄酒が親しまれていて、王侯貴族は鉛製

のコップにそれを注いで飲んでいたと言う。しかしコップの鉛成分が酒に溶け出し、それを飲んでいた者は鉛中毒に罹り健康を害した。金属ですら毒物になり得るのだ。

しかし同じ金属成分が体内に入ると言っても、裁縫針を飲み込んで死亡するのは訳が違う。それでは金属成分が体に浸透するのではなく、金属の形状によって直接的に体内器官を傷つけられ死亡しているだけだ。これはただの異物の混入であって、毒物とは呼べない。

何より美しくない。

毒は神秘的で華麗でなくてはならない。

人は様々な形で死ぬし、様々な方法で殺される。絞殺、刺殺、撲殺、銃殺と本当にバリエーションに富んでいる。

しかし人を殺すのには直接的な腕力が必要な場合が多く、どれも男性に有利だ。たとえ拳銃を使うにしても、相手と対面しなければいけない訳だし銃自体の重さも非力な女性にとって負担だろう。だが毒殺は違う。

毒殺の一番の特徴は物理的接触を持たずに相手を殺害できる事だ。知識と計画性があれば相手と一切の接触を持たずに予定通りの時間に殺人を遂行する事も可能だ。毒殺ならば腕力に勝る男性に、女性が不利になる事もない。方法によっては筋肉隆々の巨漢を、か細い女性が音も無く証拠も無く殺害する事も可能なのだ。

奈々瀬はマヨネーズと胡椒のきいた玉子サンドを口に運んで咀嚼する。いつも通りのシンプルな味だ。

…言うなれば毒殺は女性の特権。

…毒物は女の武器。

ミルクティーを飲み終えて缶をゴミ箱に捨てた所で準備室のドアが開いた。音のした方を振り向くと、爬虫類レディこと水谷麻衣子がいた。

「あら奈々瀬か。びっくりした」

とは言っているものの麻衣子の声にも表情にも驚きの色は一切な

い。いつも通りの無表情だ。

「今日はおくみと一緒じゃないの？ 珍しいね」

「くるみなら学食に昼ごはん買いに行つたよ。さつき窓から、中庭を走っていくのが見えたから、そのうち帰ってくると思う」

指に付着したマヨネーズを奈々瀬は舌先で舐め取る。

「で、奈々瀬は何してたの？」

準備室のドアを締め、麻衣子は眼鏡を押し上げて奈々瀬を見た。

昼休みの理科準備室に科学部のメンバーがぞろぞろと集まってくるのはいつも通りの事だった、ポイズンガールが始まる前までは。

「ちよつと一人で調べ物してた所」と答える奈々瀬。

調べ物？ と麻衣子は抑揚のない声で聞き返してきた。残った玉子サンドを口に入れて頷く奈々瀬は、パンくずを掃って水道で手を洗う。

「うん、薬品について調べてたのよ。実はこないだ紗季が宣戦布告してきてね、あの妖怪蛇女は何しでかすか分からないから防衛策も考えておかないと」

蛇女という言葉に麻衣子は珍しく口元を緩めた。確かにあの篠原紗季を形容するにはこれ以上ない表現だった。

机の上に開かれた植物図鑑にはトリカブトをはじめとする様々な有毒植物が載っている。それを見た麻衣子は僅かに顔をしかめて口を開く。

「いくら紗季でもここまでではないんじゃないの…」

麻衣子の言葉に「いやいやいや」と苦笑して首を横に振る奈々瀬。

「麻衣子も紗季の執念深さを知らない訳じゃないよね。多分、どんな手を使っても勝ちに来ると思う。薬品研究所や工場じゃなくても、こんな天然毒なら山の中にちよつと入れれば簡単に手に入るでしょ」

奈々瀬は青い花を咲かせたトリカブトの写真に手を乗せた。

一言で毒と言っても、英語圏では毒に対する呼び方が三つもある。  
トキシソム、ヴェノム、そしてポイズンだ。アルカロイド系



神経毒のトリカブトやフグ毒などの天然毒を toxin。ヘビやサソリが獲物を仕留めるために使用する毒液、いわゆる動物毒を venom。そしてダイオキシンやサリンなど人間が作り出した合成有機化合物を poison と分類してある。

図鑑を覗き込む麻衣子は眼鏡のブリッジに手を当てた。

「トリカブト…。LD50値が1mg以下の神経毒なんて、ちよつとでも体に入ったら死んじゃうレベルだよ」

「え、エル・ディー・ファイファイって何？」奈々瀬は首を傾げる。「S?の夏川奈々瀬にも知らない事ってあるんだね。人間らしいところを見て何かちよつと安心したなあ」

この手の話は麻衣子やアルマの方が詳しい。麻衣子は奈々瀬の隣に座って図鑑の中の写真を指差す。

「ほら、有毒植物の一つひとつの説明書きにLD50値って書いてあるでしょ」

麻衣子の言葉に奈々瀬は頷いた。

「リーサル・ドース・ファイファイ。簡単に言っちゃえば毒の強さや致死量の目安になる単位だよ。薬物を投与した実験動物の五十パーセント、つまり半数が死ぬ薬量で、それを体重1kgあたりに換算して表すの」

「ふうん。じゃあ数値が低いほど強い毒って事なんだね」

そういう事、と答えた麻衣子は二度深く頷いた。

「例えば体重20gのネズミで実験して半数が死ぬ量が5mgだったとすれば…」

「解った。キログラム換算してLD50値250mg/kgって事だね。じゃあ同じ薬で体重60kgの大人を殺そうと思えば少なくとも15g以上必要って事か」

一人で納得したように頷く奈々瀬を見て、麻衣子は薄ら寒さを感じていた。理解の速さも普通ではないが何より彼女が恐ろしく感じるのは、致死量を瞬時に人間に換算していた所だ。

今得た知識は彼女の中で人を殺める方法の一つとして抵抗なく浸

透した。

体重60kgとは誰を想定しているのだろうか、と麻衣子は口に出さずに思った。一般的な成人の平均体重の例として考えていたのだと思いたい。

「で、トリカブトは…」

奈々瀬はトリカブトの毒性を確認する。するとそこにはLD50値0.3mg/kgと記されていた。その数値をじっと見詰めている奈々瀬を遮るように麻衣子が口を開く。

「それこそ大人でも18mgで死んじゃうような猛毒よ。いくら紗季が加減知らずでも、そんな葉一枚ですら危険な物を持ち込んで来るかな」

「その為の遺書なんでしょ」

奈々瀬の乾いた声に麻衣子の言葉が詰まる。

「この前、麻衣子も言ってたじゃん。全く同じ事を紗季も言ってたよ。このゲームは参加者の死まで想定されてる。危険な毒を使うかどうかは良心次第、ブレーキを掛けるかアクセルを踏むかは自分次第」

ちなみに紗季にはブレーキなんてないよ、と奈々瀬は言い切る。

「ところでさ、LD50値が一番低い毒って何なの？」

「そうねえ。とりあえず一番低いのはボツリヌス菌って食中毒源体が持つてるボツリヌス毒素かな。確かLD50値0.0000011mg/kg」

何それケタ違いじゃん、と奈々瀬は目を丸くしている。

「LD50値だけで考えるなら地上最強の毒素だよ。単純計算すればたった1gで二千万人が死ぬぐらいの力があるんだからね。でもあくまでも病原体だから推理小説のトリックの毒みたいな使い方は出来ないけど」

すると奈々瀬は溜息を吐いた。

「扱いが難しいんじゃないよね。それに入手方法が難し過ぎても駄目だし、だからと言って効果の弱い物だったら量が必要になる

のか…」

奈々瀬は腕組みをして考え込んでいる。誰にも聞こえないような小さな声でぶつぶつ何かを呟いているのか、彼女の口唇が僅かに動いている。目を閉じて眉間にしわを寄せる彼女は何かのシミュレーションをしているようだ。

その姿を見ていた麻衣子が表情を曇らせた。

「何考えてるの、奈々瀬」

静かに目を開けた奈々瀬は麻衣子の方を向く。彼女と目があつた瞬間、麻衣子は微かにたじろいだ。

「別に…。色んな毒があるんだなあつて思ってただけだよ」

嘘でしょ、と麻衣子は言う。そして彼女は思い切つて言葉を続ける。

「本当は人の殺し方を考えてたんじゃないの？」  
ぱたんと音がする。

奈々瀬が図鑑を閉じた音だ。彼女は何も答えずに立ち上がり図鑑を本棚に戻しに行こうとする。麻衣子の後ろを通つた時、彼女の肩がぴくりと引き攣つた。麻衣子には奈々瀬が何を考えているのか判らない。

奈々瀬は背伸びして最上段の棚に図鑑を戻す。

そして奈々瀬は麻衣子に向かって微笑んだ。

その笑顔を見た麻衣子の背筋が凍りついた。奈々瀬のような整つた顔の笑みは本当に絵になるが、このような状況の場合は本来の微笑みの効果とは真逆に働く。まさに氷の微笑だった。

「奈々瀬はポイズンガールにあまり興味ないでしょ」

「いや、そんなワケないじゃん」

他にも読んでいた本を一冊ずつ本棚に戻しながら奈々瀬は答えた。「ポイズンガールに乗つたふりをして、本当は裏でもつと恐ろしい計画してるんじゃないの？」

「私は科学部メンバーに隠し事なんてないよ。ポイズンガールだつて正々堂々勝負するつもりだしさ。それに恐ろしい計画っていった

「い何よ？」

「例えば…」

例えば？ と聞き返した奈々瀬。

彼女は本を五十音順に並べ直しながら本棚に収めている。その様子を横から見ていた麻衣子はごくりと唾を飲み込んでから言う。

「誰か、本当に殺すつもりなの？」

奈々瀬の手が止まった。

彼女は何も答えない。麻衣子もそれ以上踏み込むことが出来ない。居心地の悪い冷たい沈黙が準備室に満ち始める。すると奈々瀬は細い小指に髪を絡めて耳に掛けた。そしてゆっくりと音も無く麻衣子の方に再び顔を向ける。

彼女の瞳を見た途端、麻衣子の呼吸が止まった。奈々瀬の顔には一切の表情がなくなっている。まるで魂を持たない人形のような。ひみつ…。

そう呟いてから奈々瀬は冗談ぽく笑った。

「私、五時間目が美術なんだ。教室移動とかあるからそろそろ行くね。くるみももう直ぐ戻って来ると思うからヨロシク言っといて！」

奈々瀬は元気良く手を振って準備室から出て行った。

ぴしゃりとドアが閉まると、彼女の圧力から解放された麻衣子は大きく息をした。随分呼吸も乱れている。まるで喉元に包丁を突きつけられているような緊張感だった。

そして麻衣子は思う。

やっぱり、私は奈々瀬が一番こわい。

七時間目が終わる頃には空も赤くなっていた。

下駄箱でスニーカーに履き替えた奈々瀬は急いで校門に走る。夕暮れの冷たい風が頬を撫でていった。

誰もいない中庭を走り抜ける時、弱々しい羽音が聞こえる。ふと音の方に目を遣ると一匹の蜂が寂しげに飛んでいた。彼の仲間は物置小屋の軒にある巣に群がって家族を守ろうとしている。その下に

は無数の蜂の死骸が転がっていた。死骸は以前見た時よりも増えていた。夏は、完全に終わろうとしている。

門の前には小柄なシルエツト。くるみだ。

通学鞆を肩から下げた彼女はペットボトルを握りしめて走ってくる奈々瀬を見据えている。

「遅いよ、奈々瀬」

膨れたくるみはいつも通りの文句を言う。ごめんごめん、というも通りの言葉を掛けた奈々瀬。笑顔に戻った二人は門をくぐった。

川沿いの通学路にはもう蜻蛉とんぼが飛び交っている。真っ赤な空の下で踊る彼らを見ていると今年も秋が来たのだと改めて実感できる。

しばらく堤防を歩くと紙町大橋が見えてくる。橋を渡ると高層ビルの立ち並ぶ大都会になっていて、奈々瀬達も休みの日には繁華街によく買い物に行く。川を挟んでこちら側は打って変わったの閑静な住宅街。この河川が世界を分け隔てているようだった。

紙町大橋の手前に差し掛かった時、くるみが川の方を向いて立ち止まった。

「うわあ、綺麗な花！」

くるみは子供のようにしゃいで、転げるように堤防の斜面を下りて行った。川のほとりには気の遠くなるような数の彼岸花が咲いている。目が眩むほどの真紅に染まった光景はともこの世のものとは思えなかった。

「ちよつと、くるみ！」

奈々瀬も彼女を追って堤防を下ってゆく。無数の彼岸花に囲まれたくるみはツイントールを揺らしながらくるくと回っている。彼女の黒い髪が真っ赤なキャンバスによく映えていた。

背の高く伸びた彼岸花の花弁が奈々瀬の太腿をくすぐる。くるみは愛おしそうに赤い花を愛でていた。

「あのさあ、確かに綺麗かもしれないけれど彼岸花だよコレ。分かってんの？」

分かってるよー、と言ってくるみはその場に寝転んだ。真っ赤な

花の中に彼女の姿が隠れてしまった。どうやら彼女は綺麗だったら何でも良いらしい。

彼岸花。別名、曼珠沙華<sup>まんじゅしゃげ</sup>。俗称、幽霊花そして地獄花。秋の初めに咲く事から彼岸花と呼ばれているが、これを食べた者は死ぬと言われている事から彼岸花と名付けられたという話もある。

彼岸花は有毒植物だ。

全体にアルカロイド系神経毒であるリコリンを含み、口にした場合には眩暈や吐き気などの症状が表れて、酷い場合には意識が昏倒して死に至る。

くるみは上半身を起こして花の中から顔だけを出した。すると彼女はけけほと咳込んだ後、ぶるっと身震いした。

「どうしたの、風邪？」

「うん…。何か熱っぽいんだよね」

眉を寄せた彼女は喉を擦ってから立ち上がる。

「何だか懐かしいよね」とくるみ。

「何が？」と奈々瀬。

「昔はこうやって泥んこになって遊んだじゃない」

くるみは彼岸花の真っ赤な花弁を一枚一枚愛おしそうに撫でながら言った。確かに幼い頃はよく外で遊んでいたが、いつの間にか公園で走り回ったり転げ回ったりする事は少なくなっていた。大人になるという寂しさをふと感じた。

「奈々瀬は昔から運動神経が良かったから、鬼ごっこだと男子でも追いつけなかったよね。一輪車に乗れるようになったのも奈々瀬がクラスで一番だった？」

そうだったと奈々瀬は照れ臭そうに鼻を擦る。

「今も楽しいけれど、小学生の頃もめっちゃめっちゃ楽しかったなあ。定期テストとかも無くて気楽だったしさ」

「結局くるみは勉強が嫌いだけじゃん」

そう言って奈々瀬は呆れたように笑った。くるみはペットボトルのウーロン茶を一口飲んで大きく背伸びした。

「小学校の頃は皆が帰っても、いつも最後まで三人で遊んでたよね  
…」  
三人。

くるみが発したその言葉に奈々瀬の表情から笑みが消える。その変化に気付かなかつたくるみは構わずに続けた。

「あの頃は本当に楽しかったなあ。最後まで公園にいたのはいつも決まって私と奈々瀬と、それから直弘君…」

…直弘。

その名前を聞いた奈々瀬の顔がびくびくと引き攣り出す。

「そう言えば、あの頃は直弘君もいつも一緒に遊んでたんだよね。誰もいなくなっても私たち三人だけはいつも最後まで公園にいたもんね。懐かしいなあホント」

くるみ…。

冷たい秋風が吹き抜けて彼岸花達をふわりと揺らす。

まるで彼らが一齐に頭を垂れたようだった。奈々瀬はぼつりと彼女の名前を口にした。その瞬間くるみの口から止めどなく流れ出る言葉がびたりと止まった。

その話、やめなさい。

そう言ってくるみの目を冷たく見据えると、彼女は涙目になって「ごめんなさい…」と謝った。奈々瀬は機械的に頷いて彼女から目を逸らす。

奈々瀬には直弘という弟がいた。

直弘は今年で十六歳になる、もし死んでいなければ。

消防署の前の交差点でくるみと別れた。

一人になった奈々瀬はぼんやりと夕焼け空を見上げながら商店街を歩いてゆく。気の早い店はもうシャッターを下ろし始め、引き潮のように徐々に活気が失せていった。その様は一日の終わりの雰囲気漂わせて、寂しい感じがした。

駄菓子屋の角を曲がり、更に人通りの少ない住宅地の区画に入っ

た。まるで打楽器のようにローファーの踵がこつこつとリズム良く鳴る。ここでは自分の足音が一番大きな音で、それさえも近所迷惑になるのではないかと感じるほどだった。

公園の前を通る時、自転車で跨った小学生の男の子達が「じゃあな、バイバイ！」と互いに声を掛け合って手を振っていた。

彼らも家に帰るのだ。

子供達の自転車が奈々瀬を追い越してゆく。泥だらけになったサッカーボールを前かごに入れて先頭を走る少年を目にした時、奈々瀬はふと懐古的ノスタルジックな気分になった。

…あの子も、これぐらいの齢だったっけ。

立ちこぎで去ってゆく小学生の背中を見送る奈々瀬は、逆光になっている夕日に目を細めた。

弟の直弘は小学五年で時間が止まっていた。

奈々瀬の家は中流の住宅地にある中流の家で、いわゆる典型的な中流家庭だ。金銭的余裕が特別ある訳でもないが、切羽詰まった生活をしている訳でもない。二階建ての瓦屋根で、申し訳程度の庭がある一般的な家屋。「健康で文化的な最低限度の生活」という水準は十分満たしていた。

ただ一般的な幸福があるかという点、そうではない。

奈々瀬の家庭の幸せは一般的な水準よりも下だった。

家の扉には案の定鍵がかかっている。

通学靴から鍵を取り出して扉を開ける奈々瀬。「ただいまー」と家の奥に向かって呼び掛けてみるが、薄暗い居間からは思った通り返事がない。家に誰もいない事は最初から分かっていた。

玄関で靴を脱いで居間に向かう途中、奈々瀬が歩く度に床がみしみしと軋んだ。この家も随分の齡らしい。そして奈々瀬は居間のカーペットの上に通学靴を置いて奈々瀬は柔らかいソファーに身を沈める。深く息を吐いてそのまま猫のように丸まって横になり、ブラウスのボタンを一つ外した。胸元から白い下着が見え隠れしているが、奈々瀬は気にしていない。



ガラステーブルに乗っているリモコンに手を伸ばしてテレビを点けると夕方のニュースが流れていた。相変わらず先日の鯨島翔平殺人事件のニュースを放送している。やはりまだ犯人は捕まっていらないらしい。

奈々瀬は部屋の隅にある仏壇に目を遣った。そして直ぐにテレビに視線を戻してから浮かない声で呟いた。

ただいま…。

この仏壇には直弘と、そしてかつて母と呼んでいた女性が入っている。

今日もニュースは同じ事ばかり言っていた。どうやら事件に進展がないらしい。本当は進展しているのに、もしかすると報道規制を掛けているのかもしれない。警察はいつも本当の事を教えてくれない。

…どちらにしろ警察は信じられない。

…だって「あんな簡単な事」も解らなかったんだから。

奈々瀬は心の中で毒づいた。

テレビは淡々と同じ事ばかり言う。苛々する、苛々する。黙っていると仏壇の存在感が大きくなる、大きくなる。「姉ちゃん」と呼ぶ直弘の声が頭の中で重なるように繰り返される。彼の声を最後に聞いたのは五年前だったのに、どうしてここまで鮮明に再生されているのだろうか。

直弘が最期に言った言葉も「姉ちゃん」だった。

そして、そのひとつ前の言葉は「死にたくない…」だった。

不意にその時の光景が脳裏を過る。瞳孔の開いた目は焦点が合っていないかった。床に這いつくばった直弘は助けを求めるように、震える指先を奈々瀬の方に伸ばしていた。そして直弘は何度も言っていた、苦しい、苦しいと。

記憶の中では直弘は生きている。

そして記憶の中の直弘は毎日死ぬ。

髪を掻きむしってその情景を振り払おうとする奈々瀬だが、何を

しても振り払えない。ましてやニュースの内容など微塵も頭に入  
て来ない。

その暗い記憶を振り払ったのは電話のベルだった。

奈々瀬は跳ねるように身を起こした。騒がしいくせに機械的な呼  
出音は人に不快感を与えるのに最も効率が良い音声だろう。甲高い  
一定の音を発し続けられたら、とても無視はできない。

奈々瀬はテーブルにあった子機を取る。

彼女の口から出た「もしもし」にはどこか棘があった。つとめて  
平静を装っていたつもり奈々瀬だったが、どうしても不快感が滲  
んでしまったのだろう。しかし、相手の発した一言目で頭の中でも  
やもや渦巻いていた物が一気に霧消した。

電話の相手は警察だった。

相手の刑事らしき男の声はあいさつと自己紹介もそこそこに、先  
日の件で聞きたい事があると言った。

「何か：分かったんですか？」と奈々瀬。

そして受話器からある名前が告げられた。

笹中悟という名前に心当たりはありませんか。

お父さん。

待ってて、お父さん。

電話を切つてすぐ、奈々瀬は家を飛び出した。

奈々瀬は川沿いの堤防を逆走する。学校帰りに通った時よりも夕  
日はさらに低くなり、空の向こうへ沈み切つてしまひそうになつて  
いた。

空は二色のグラデーションを描く。太陽の方角は眩しいほどに赤  
く、その反対側は寂しいほどに濃紺。奈々瀬の背後からは深海のよ  
うに重い青色が押し迫ってきている。立ち止まった途端に海の底へ  
と引き摺り込まれてしまひそうだ。

奈々瀬は走った、やがて訪れる夜から逃れるように。

紙町病院は五階建ての総合病院で、地域外からも患者が訪れる。

病院という場所はいつの時間も静謐さが漂っていた。しかし奈々瀬はその雰囲気を打ち壊さん勢いで一階ロビーへと駆け込んだ。

三階まで吹き抜けになった高い天井のせいで奈々瀬の騒がしい足音がロビー中に喧しく反響した。

ロビーの真ん中に立ち止まって息を整える。普段ならこの程度の距離を走っても呼吸を乱す事はないが、今は肩で息をするほどにまであっている。呼吸する度に消毒液のような病院独特の匂いが鼻を衝く。清潔ではあるが不健康な匂いだ。

辺りを見回すと、受付カウンターで忙しそうにパソコンのキーを叩く事務の女性が奈々瀬をちらりと睨んだ。騒がしくした事で、どうやら鬢蹙ひんしゆくを買ってしまったらしい。奈々瀬は隠れるように顔を伏せた。

時計に目を遣ると七時前。

まだ辛うじて面会に間に合う時間だった。

最後に大きく息を吐いて完全に呼吸を整えた奈々瀬は、出口へ向かう人の流れに逆らってエレベーターに乗って五階のボタンを押すと重たい音を立ててドアが閉まる。乗っていたのは奈々瀬一人だった。

奥の壁に鏡が嵌め込まれていた。不意に反射した自分の姿が目に入り、奈々瀬は息を飲んだ。

…誰だよ、アンタ。

自分でも知らない内に彼女の顔は酷く冷淡になっていた。学校で、くるみ達に見せている表情とは全く別物だろう。普段は意識しているから笑顔を作れるが、意識しなくなると笑顔が消える。

五階でドアが開くと、ロビーよりもさらに消毒液臭い空気が鼻を衝いた。静けさも寂しいほどに増している。

静かだ。死んだように静かだ。その静寂を侵してはいけないような気がした奈々瀬は出来るだけ足音を殺してリノリウムの床の上を歩いて行った。窓のない廊下は窒息死しそっくりな息苦しい。

513号室。その病室の前で奈々瀬は足を止める。

ネームプレートには「夏川信明」なつかわのぶあきの文字。

奈々瀬はドアをその個室のドアを開く。中は薄暗く、医療機器のランプが無数の星のように散らばっていた。窓枠に四角く切り取られて映っている紫色の空の弱々しい逆光がベッドの上に横たわるシルエットを浮かび上がらせている。

奈々瀬は壁に手を遣り電気を点ける。すると蛍光灯の光が紫色の空を不明瞭にする代わりに、病室を照らして全てを明瞭にした。

「お父さん…」

ベッドに横たわる奈々瀬の父、夏川信明は奈々瀬の呼び掛けに応じる事無くただ天井を見詰めている。正確には天井ではなく虚無を見詰めていた。

奈々瀬は小型冷蔵庫からリンゴを一つ取り出してベッドの横の丸椅子に腰かけた。そして点滴に繋がれた父に向かって話し掛ける。

「今日ね、学校で面白い事あったんだよ。くるみがまたトラップに引っ掛かってアルマのワサビ食べちゃったの。あの子ったらそれで目を真っ赤にしてウーロン茶一気飲みしてたんだよ」

父はただ虚無を見詰めている。

「他にもね、麻衣子に色々な薬品の事を教えて貰ったんだ。私またちょっと賢くなったかもね」

それでも、父はただ虚無を見詰めている。

「私は…毎日、元気だよ…」

奈々瀬は真っ赤なリンゴを握りしめながら俯いた。父は何の反応も見せる事無くただベッドで仰向けになっているだけだった。

父の顔を覗き込む。薄目を開けた父の顔にはだらしなく無精髭が生えていて、奈々瀬が好きな優しい父の姿から遠ざかっていた。

奈々瀬は無理に笑ってリンゴを一口齧った。甘いが、どこか水っぽい。

「お父さんも食べる？」

そう言っただけ食べかけのリンゴを父の口に近付けたが案の定何の反応も無い。少し強引に口に押し付けてみたが、ただ口元に果肉が付

着したただけだった。父の口の汚れを拭き取った奈々瀬は肩を落とす  
て苦笑した。

奈々瀬は動かない父の体に抱きついて顔をうずめた。消毒液の匂  
いに混じって懐かしい香りがする。

「大好き、お父さん大好き」

小さな頃はいつもこうやって父に抱きついていた。

小さな頃はいつもこうやって父を独り占めしていた。

奈々瀬の父は先月、仕事からの帰り道に交通事故に遭って病院に  
運ばれた。それ以来意識が戻らない。知らせを受けた奈々瀬が病院  
に駆けつけた時には、もう父は物を言わぬ人形のようになっていた。  
いわゆる植物状態だ。

頭を強く打っていて脳の損傷が激しいらしい。医者診断では、  
いつか意識を取り戻すかもしれないがもう二度と間を覚まさないか  
もしれないらしい。仮に意識を取り戻したとしても記憶をなくして  
いる可能性がある、と言っていた。

あの事故の夜、病院には警察もいた。奈々瀬は「お父さんを轢い  
たのはどんな奴だ」と問い質したが警察は顔を顰めるばかりだった。  
「ねえ、お父さん。悔しいよね、ムカつくよね」

奈々瀬はぼろぼろと涙を零しては父の布団に顔を擦りつける。彼  
女は子供のように声を上げて泣いた。

加害者は不明。

つまり轢き逃げだった。

「でもね、今日は大ニュースがあるんだよ。警察が電話くれてさ、  
お父さんを轢いた奴が分かったんだ」

涙を拭いた奈々瀬は顔を上げて父の顔を見ながらにこりと微笑ん  
だ。父の顔は前に見た時よりも頬がこけて痩せ衰えているような気  
がする。

「実はねニュースでもやってるんだけど、つい最近チンピラが工場  
の所でボコボコにされる事件があつてさ、それで警察がね、その事  
件の犯人の自宅にあつた車を調べてたらヘッドライトの所が割れて

「たんだつて」

奈々瀬は動かない父の頬を撫でる。

「それがね、お父さんが轢き逃げされた現場に残っていたライトの破片とびつたり合ったらしいよ。テレビでやってた事件の犯人とお父さんを轢いた奴は同一人物なんだよ。やっぱり悪い奴は何度も悪い事を重ねるんだね」

そう言っつて奈々瀬は悲しく笑った。

「名前は、笹中悟って言っらしいよ」

笹中悟と言う名前を口にした瞬間、奈々瀬の瞳が冷たく輝いた。乱れた髪を手櫛で整えて右耳に掛ける。

「お父さんは今こんなになってるのに、笹中つて奴はのうのうと生きてるんだよ。悔しいでしょ許せないでしょ、お父さん。私は悔しいし許せない。警察に捕まってもどうせ大した罪にならないんですよ。だから、私…良い事考えたんだ…」

奈々瀬は薄笑いを浮かべて父の耳元に柔らかな口唇を近付けた。

「笹中悟を、殺す」

追い詰めて、痛めつけて、苦しめて殺そうと思うの。

奈々瀬は父の首に抱きついて満面の笑みで言う。甘えるような猫撫で声。まるで幼い少女のように無邪気な笑顔だった。

「大丈夫だよお父さん、心配しないで…」

だつて初めてじゃないもん、人を殺すの。

奈々瀬はぼつりと打ち明ける。

それでも父は何の反応も見せなかった。

日に日に痩せ衰えてゆく父の姿を見て奈々瀬の顔は曇った。たとえ笹中悟を殺したとしても父が回復するかどうかは分からない。優しかった父がじわじわと死人に近付いてゆく様を見ているのは奈々瀬にとつて拷問以外の何ものでもなかった。

「ねえ、お父さん。今つて痛いよね苦しいよね。このまま一生苦しみ続けるのなんか嫌だよ、私はそんなお父さんを見てると可哀想で…本当に可哀想で」

眉を寄せる奈々瀬は父の顔を愛おしそうに撫でる。しばらく良く見ない内にしわも白髪も増えている。随分齡を取ったのだと、どこか寂しくなった。

頬に手を当てると無精髭の感触がある。動かないのに髭だけは伸び続けていた。本当に植物のようだ。

「笹中を殺した後ね、お父さんも楽にしてあげるよ。意識が戻るかどうか分からないでしょ。それなら私がお父さんを苦しみから助けてあげる。これがお父さんの娘として生まれてきた私の責任だよね」

奈々瀬は立ち上がって大きく背伸びをした。しなやかに伸びる四肢、ここまで走ってくる内に乱れた制服の裾から形の良い臍へそが見えた。

電気を消してドアの所から最後にもう一度父のベッドを振り返る。窓の外に映し出された空の色はいつの間にか濃紺一色に染まり、ガラスの破片のように鋭利で冷たい光を放つ星々が散らばっていた。

そして奈々瀬は呟く。

お父さんは私が責任を持って、殺してあげるからね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2028y/>

---

ポイズンガール

2011年12月8日01時23分発行